

朝 気 遺 跡

東小学校々庭の土師遺跡
発掘調査報告書

甲府市教育委員会

1980・3

朝 気 遺 跡

東小学校々庭の土師遺跡
発掘調査報告書

報 告 者

(日本考古学協会々員)

谷 口 一 夫

執筆者
夫夫昌夫
一美宏康
日本沢坂
谷坂長保

例　　言

1. 本書は甲府市朝氣一丁目14番1号甲府市立東小学校々庭における甲府市水道局が行った下水管埋設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
1. 発掘調査及び遺物整理報告書執筆作業は、共に甲府市長河口親賀殿と日本考古学協会々員谷口一夫との間で締結した委託契約に基づくものである。
1. 発掘担当者は甲府市教育委員会の指名で、日本考古学協会々員谷口一夫が当った。
1. 発掘調査は谷口一夫、坂本美夫君（旧姓菊島・日本考古学協会会員）が調査員として、また、当時の広島大学考古学教室の学生長沢宏昌君（石和町出身）、森田稔君、保坂康夫君（甲府市出身）が補助調査員に、それに調査協力を甲府市教育委員会職員、東小学校P T A、県立女子短期大学々生、山梨考古学研究会々員等々から頂いた中で実施した。
1. また、遺物の整理、復元から本報告書執筆にかかる作業は谷口一夫、坂本美夫、長沢宏昌、保坂康夫各君がこれに当った。
さらに、土器実測について米田明訓君、図版写真撮影で池戸司郎君の協力を頂いた。
1. 発掘調査及び報告書作成に当っては、甲府市教育委員会をはじめ関係各位の厚い御指導と御援助を得たことを記し、あわせて深甚なる謝意を表わす次第である。

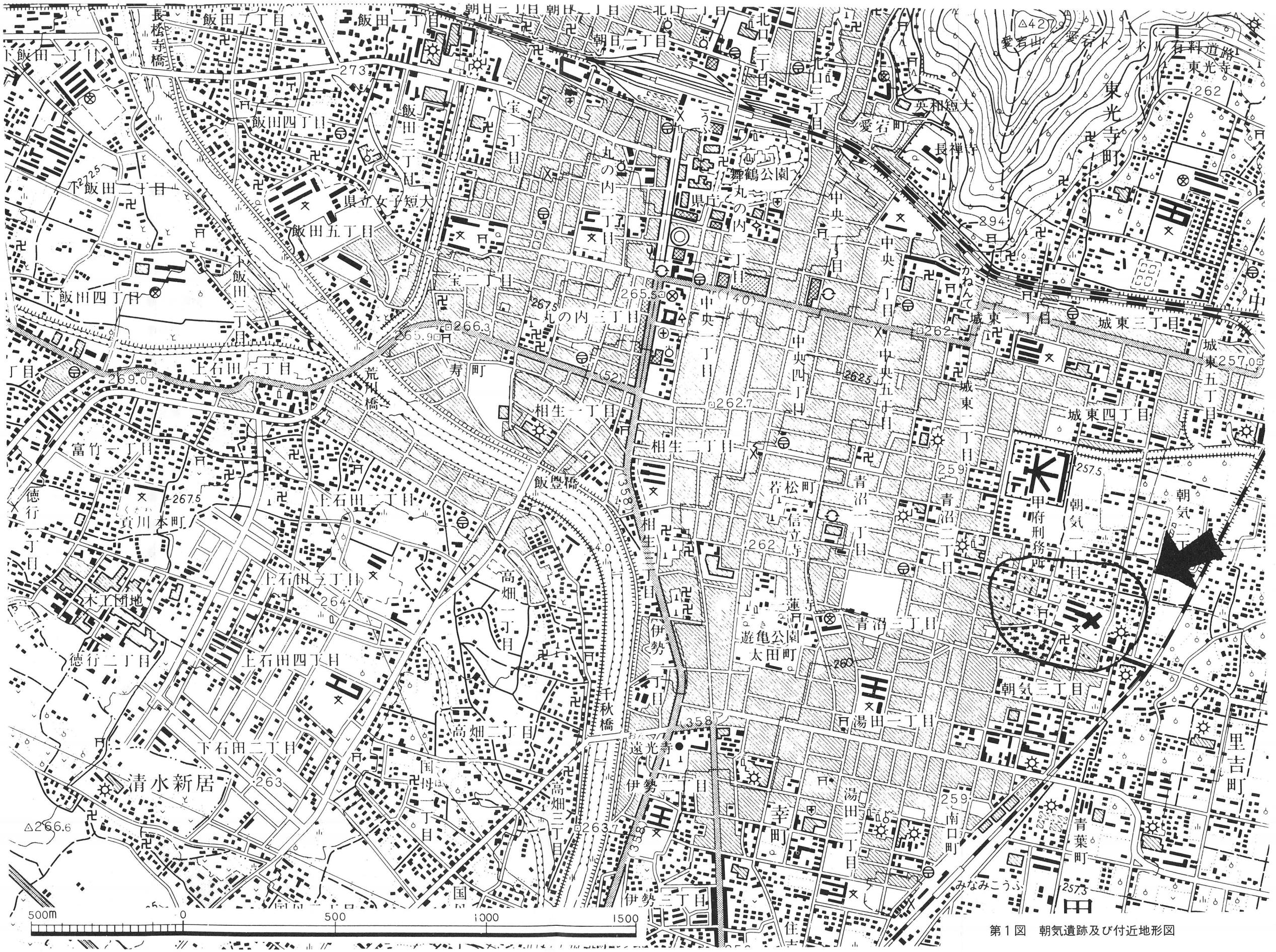
遺跡名について

本遺跡は東小学校々庭遺跡として山梨県遺跡地名表（昭54・山梨県教育委員会）№01057に記録されている。本報告書第2図1に該当する。しかし、同遺跡の範囲は広範囲に及び、この呼称では、ある特定地域だけが限定され、あたかも遺跡範囲が校庭内にとどまるかの錯覚を与える危惧がある。

また、前記山梨県遺跡地名表には、朝氣町遺跡№01009、本報告書第2図2に該当する遺跡があるが、これ等は遺跡範囲の大きさから当然つながるものと予測される。

いずれも発掘調査は限定された範囲内にとどまり、今まで面での調査が実施できる状況にないところから、その関係が明白にされていないが、この事は将来かならず解明されよう。

さて、この様な中にあって本遺跡を朝氣遺跡と命名し、今後広範囲に本遺跡の解明に努める必要を痛感している。



第1図 朝氣遺跡及び付近地形図

目 次

第一 章 概 説	1
第一節 発掘調査の動機と経過	1
第二節 発掘調査実施上の問題点	2
第三節 発掘調査団の構成	3
第二 章 位 置 と 地 形	4
第一節 朝氣遺跡の地理・歴史的環境	4
(1) 朝氣遺跡周辺の地形概観	4
(2) 朝氣遺跡周辺の遺跡	5
(3) 今後の課題	6
第二節 朝氣遺跡の層位と文化層	11
第三 章 朝氣遺跡発掘調査報告	17
第一節 朝氣遺跡発掘の経過（発掘日誌から）	17
第二節 朝氣遺跡出土の遺構	24
第三節 朝氣遺跡出土の土器	26
第四節 朝氣遺跡出土の石器	62
第五節 朝氣遺跡出土のその他の遺物	63
第四 章 ま と め	64
第一節 朝氣遺跡に於ける成果と今後の課題	64

挿 図 目 次

第 1 図 朝氣遺跡及び付近地形図	卷頭
第 2 図 甲府市の地形と遺跡分布図	8
第 3 図 雨で浸水した発掘グリット	19
第 4 図 発掘現場における関係者	20
第 5 図 発掘調査後の工事現場	21
第 6 図 朝氣遺跡の基本層位実測図	13
第 7 図 朝氣遺跡トレーナ・セクション実測図	15
第 8 図 東小学校と発掘地点実測図	23
第 9 図 第7区～第8区に見られた溝状遺構	24
第 10 図 第4区西拡張区に見られたカマドとピット	25
第 11 図 第3区～第6区 微細図	55
第 12 図 第22区～第23区 微細図	61
第 13 図 第24区～第26区 微細図	57
第 14 図 第27区～第30区 微細図	59
第 15 図 第12区 微細図	61
第 16 図 朝氣遺跡出土の石器	62

土器挿図目次

土器第 1 図 グリット内出土土器拓影	26
土器第 2 図 土 器 実 測 図	28
土器第 3 図 "	30
土器第 4 図 "	32
土器第 5 図 "	34
土器第 6 図 "	35
土器第 7 図 "	36
土器第 8 図 "	38
土器第 9 図 "	(4号グリット内出土土器) 40
土器第 10 図 "	41
土器第 11 図 "	42
土器第 12 図 "	45
土器第 13 図 "	48
土器第 14 図 "	51
土器第 15 図 "	52

図 版 目 次

第 1 図版	東小学校々庭を南方より望む、朝氣遺跡の中心（上）と 同上校庭における発掘現場の発掘調査着手時の現場（下）	卷末
第 2 図版	同 上	//
第 3 図版	30 区東特別区南壁セクション（朝氣遺跡の基本層序）	//
第 4 図版	80 区西壁に見られる粘土と砂の互層（旧河川の跡を物語る）	//
第 5 図版	45 区北壁発見の土師器	//
第 6 図版	同 上	//
第 7 図版	発掘調査着手時の北壁、床面は既に文化層にまで達していた（上） と整理された北壁セクションの一部と炉址及び柱穴（下）	//
第 8 図版	4 区西拡張区で発見された炉址と柱穴、灰の厚みが生活の長さを 物語っている（下）	//
第 9 図版	4 区西拡張区に於ける土器分布状況	//
第 10 図版	9 区（上）、24 区（下）出土の土師器	//
第 11 図版	30 区（上）で出土した青磁と 6 区（下）で出土した須恵器	//
第 12 図版	24～30 区で出土した陶器（上）と須恵器（下）	//
第 13 図版	5 区西拡張区から出土した動物の歯（上）と 13 区から出土したクルミ、ほぼ完全な形で採集	//
第 14 図版	12 区から出土した土師器。3 個の土器が重なり合って出土した。	//
第 15 図版	30 区出土の土師器	//
第 16 図版	"	//
第 17 図版	"	//
第 18 図版	4 区（上）出土の須恵器と 12 区出土の木器（下）	//
第 19 図版	30 区東特別区出土の土師器	//
第 20 図版	朝氣遺跡発掘で発見された唯一の弥生式土器破片	//
第 21 図版	朝氣遺跡出土の土器	//
第 22 図版	"	//

第 23 図版 朝氣遺跡出土の土器	卷末
第 24 図版	" //
第 25 図版	" //
第 26 図版	" //
第 27 図版	" //
第 28 図版	" //
第 29 図版	" //
第 30 図版	" //
第 31 図版	" //
第 32 図版	" //
第 33 図版	" //
第 34 図版	" //
第 35 図版	" //
第 36 図版	" //
第 37 図版	" //
第 38 図版	" //
第 39 図版	" //
第 40 図版 朝氣遺跡出土の石器	//

第一章 概 説

第一節 発掘調査の動機と経過

甲府市立東小学校々庭からは、昭和 42 年に甲府市水道局が行った下水管埋設工事の際、多量の土師器の出土を確認し、かつ、東小学校周辺地域からも住宅新築等の度に土師器発見のケースが続いたことによって、甲府市教育委員会では文化庁への遺跡発見届を提出、以来、周知の遺跡としての取扱いをされて来た。

今回、再び甲府市水道局では同校庭内に下水管埋設工事の必要にせまられ、甲府市教育委員会との協議の中から、工事関係部分の事前調査による記録保存を実施することになり、工事に先がけ甲府市長河口親賀殿と日本考古学協会々員谷口一夫との間で委託契約を結び発掘調査を実施したものである。

同遺跡は校庭という特別事情にあり、夏休み中に全ての下水管埋設工事が完了しないと、秋の学校行事に影響するところから、工事必要日数を逆算し（昭 51）7 月 3 日から 10 日間の日程で発掘調査の実施が計画された。

発掘調査は下水管埋設工事区域内に設定した $2\text{m} \times 2\text{m}$ を 1 区画とする 45 区画のグリッドを順を追って進めていったが、遺物包含層はその全てに広がっていることが解明されるなど、かねて予想された通りその規模は大きく、下水管埋設工事区域内だけでも、調査期間限界の 7 月 15 日夕刻の日没までかかった。

この遺跡の規模、内容から見ると最低 1 カ月間の調査日程も望まれたが、諸般の事情がこれを許さなかった。しかし、幸いにも今回の発掘調査によって、こゝに報告できるところの貴重なデータが得られた。

この報告書が今後、甲府盆地に於ける同時代の遺跡の標式として、物差しとして、重要な役割を果すことと思われる。

なお、発掘調査開始から報告書作成作業に至るまで、この貴重な遺跡の記録保存の為に絶大なるご協力を下された甲府市教育委員会岩波民造教育長はじめ、関係各位等の協力があつて、この成果が得られたことに発掘担当者として深甚なる謝意を申し上げる次第である。

第二節 発掘調査実施上の問題点

東小学校々庭からは土師器の包含がかかる確認されていた。同地は校庭造成時に40～50cmの埋め立てが行われており、文化層はその下に二層あるとされていた。

今回の発掘調査実施に当っては、①特に甲府盆地に於ける土師器編年研究に不可欠ともなっている層位関係についての把握。また、それと同時に②土器及び土器以外の遺物、及び遺構の発見に力を注ぎ、その生活様式の解明について充分に留意して、この時代の住民のあり方について追求することが課題となつた。

特に甲府盆地周辺にはこの時代に築造されたと思われる多くの古墳が存在するが、反面、住民の暮らしを把握する資料の確認例が少なく、この遺跡はその意味からも非常に重要な要素を秘めている。

また、遺跡の分布範囲は広く、今回の調査では面でなく線の調査であっても、やがて、朝氣遺跡の全容を明らかにする一つの方向づけをめざし、飛鳥、奈良、平安時代に居住した住民の姿を再現させる為の努力は当然必要であった。（T）

第三節 発掘調査団の構成

発掘担当者 主任調査員	谷 口 一 夫	日本考古学協会々員 (山梨県考古学協会委員長)
調査員	坂 本 美 夫 (旧姓 菊島)	日本考古学協会々員 (山梨県文化財主事)
補助調査員長	沢 宏 昌	(当時) 広島大学考古学教室学生 (山梨県文化財主事)
"	森 田 稔	(当時) 広島大学考古学教室学生 (名古屋大学大学院修士課程在学)
"	保 坂 康 夫	(当時) 広島大学考古学教室学生
調査協力員	中 田 伝 (以下 P T A 会員 延 258 名が参加)	東小 P T A 会長
"	関 う た 子	県立女子短大学生
"	中 沢 利 枝	"
"	長 田 た か ね	"
"	志 田 照 代	"
"	益 満 昭 子	"
"	駒 井 恵 子	"
"	小 田 切 恵 美 子	"
"	芦 沢 多 香 子	"
"	木 田 元 子	"
"	岡 田 君 子	"
"	小 沢 良 子	"
"	川 崎 昌 宏	山梨考古学研究会々員 (以下同会々員 延 10 名が参加)

第二章 位置と地形

第一節 朝氣遺跡の地理・歴史的環境

(1) 朝氣遺跡周辺の地形概観

甲府市は、その北半を山地で、そして南半を扇状地と沖積原で占められている。甲府市周辺の遺跡は山地にはほとんどなく、山地と扇状地の接する部分付近から扇状地や沖積原に立地している。

遺跡が主に立地する甲府市南半の地形は、おおよそ以下のようなものである。

2,000 m級の峰を連ねる奥秩父連峰から甲府盆地側へ下ってみると、西から片山（665 m）、八人山（570 m）、大藏経寺（716 m）等、600～700 mのピークを最後に山地がとぎれ、約100 mの急斜面を下り盆地が開ける。

盆地に入ると、西隅から荒川が、そして中央から相川が流れ込み、両者とも扇状地を形成している。荒川は北西から南東へ、相川は北東から南西へと流れ、両者は現在寿町の荒川橋付近で合流する。

地形図をみると、両河川が盆地に流入する地点から同心円状の等高線が疊を接するようにしてあり、荒川扇状地と相川扇状地とは明確に判別することができる。また、地質図をみると、扇状地堆積層と、沖積地堆積層の境界がこの付近を通りゆるやかな弧を描きながら東西にのびている。沖積原と扇状地の境界をこの付近に求めることができよう。

一方、荒川橋付近から西方をみると、その等高線は荒川が甲府盆地に最初に入り込んだ地点に向って同心円状に描かれているのではなく、さらに西方の中心に向って同心円を描いているのに気付く。そこは、竜王町にある低位段丘赤坂台地の西側を流れる釜無川が、赤坂台地を出て沖積原に最初に接した地点である。そこを中心とした同心円状の等高線は、笛吹川の河岸近くまで達している。いわゆる釜無川沖積原である。

一方、この釜無川沖積原の北西方向に高くなる地形を避けるように西へ流路をゆるく曲流させた荒川は、飯田橋付近でさらに流路を南の方向へ変え、ゆるやかに曲流しながら笛吹川に至る。飯田橋付近からの荒川の東方には、流路を南の方向に変えた地点に向って同心円状の等高線を見出すことができる。荒川が流路を南へ変える付近は、等高線間の間隔が急に広くなる部分であり、河川の遷急点であることが考えられる。この地形は、この遷急点から積平衡作用によって荒川が発達させた地形であることが窺知できる。

また、現在では、荒川が流路の方向を変えた地点から濁川が出発し、西から東へ向かう。濁川は、同心円状の等高線の北端を通り、甲府東高等学校付近で流路を南の方向に変え、そのまま南下して笛吹川に合流する。そして、この同心円状の等高線は、荒川と濁川に挟まれるようにしてある。いわゆる、濁川沖積原である。

濁川沖積原は、荒川扇状地や相川扇状地ばかりでなく、釜無川沖積原とも違い、等高線間の間隔が非常に広い。さらに、その南部にまったく等高線の描かれていない広く平坦な地域が存在していて注目される。

濁川より東方の石和よりの地域では、等高線が北西一南東方向に伸び、濁川より西方の地域と明確な

違いを見出すことができる。これらの等高線は、平等川、笛吹川両河川にはほぼ直交してあり、笛吹川の右岸を石和から塩山へと続いている。いわゆる笛吹川・重川・日川複合扇状地である。（保坂 康夫）

(2) 朝氣遺跡周辺の遺跡

先土器時代の遺物としては、上石田遺跡でポイントとナイフ形石器が出土したという。しかし、出土量が非常に少ないと、沖積原にあることなど先土器時代人がここに居住していたかどうかは疑わしく今回の言及を控えたい。

縄文時代の遺跡は、山地と低地の接する地域に分布する北原遺跡、酒折遺跡、善光寺町裏遺跡、緑ヶ丘遺跡、また沖積原に立地する上石田遺跡、遠光寺遺跡、宝町遺跡がある。

後者は、縄文時代の遺跡としては特殊な地域に立地している。

一方、敷島町内で、宮前遺跡、西川遺跡、金の宮第1号及び第2号遺跡、金ノ尾遺跡など荒川右岸の荒川扇状地上に立地する縄文時代遺跡が多数あり、沖積原に立地する遺跡はこれらの遺跡と一連のものであると考えることができるかもしれない。

この荒川扇状地の西隣りに赤坂台地があるが、縄文時代遺跡は一遺跡も発見されていず、際立った対照を示す。

このような特殊な遺跡立地は、この地域に居住していた縄文人たちが他の縄文人たちとは違った環境を開拓し進出したとするよりも、当時のこの地域の環境が縄文たちの居住に必要な条件を十分満足していたと考えるべきであろう。

弥生時代の遺跡は、扇状地上に立地する緑ヶ丘遺跡、塩部遺跡、湯村遺跡と、沖積原に立地する伊勢町第1号遺跡、湯田町遺跡、朝氣遺跡、朝氣町遺跡、上町遺跡、要明寺遺跡、青葉町遺跡（所在不明）増坪遺跡がある。

後者は、濁川沖積原の北半に集中し、遺跡数も多い。

この地域は、縄文時代の遺跡の立地する地域よりさらに低地である。また、釜無川沖積原には、1979年発行の山梨県遺跡地名表によるかぎりまったく発見されていない。

一方、先述した荒川右岸の扇状地には、金ノ尾遺跡など多数の弥生時代遺跡が存在しているという。しかし、濁川沖積原は、扇状地や釜無川沖積原と違い、等高線間の間隔が非常に広く特徴的である。

昭和32年頃発掘された甲斐住吉遺跡（所在不明）では、地表下110cmで弥生時代の遺物が発見されその上40cmを葦の生成層が覆っていたという。また、南甲府駅の西方に窪地が存在していることから低湿地であったことが考えられる。

この地域では、このような自然環境を背景にして農耕社会の定着が達成されたと考えられるのではないか。

これに続く古墳時代以後の、土師器を出土する遺跡は、濁川沖積原では伊勢町第1号、第2号遺跡、上町遺跡、朝氣遺跡の4遺跡のみである。一方、扇状地に立地するものがが多くなり、緑ヶ丘遺跡、宝町遺跡、塩部遺跡、湯村遺跡、山梨大学遺跡などが知られる。また、濁川より東方の石和町近辺において多くの遺跡が見出されている。

古墳は、大半が盆地の北縁部の山地との境界付近から扇状地上に見出される。また、主に横根町に見出される積石塚は、これとは対照的にほとんど山地に立地する。この地域は崖錐堆積物がみられる

地域であり、その礫を用いたものと思われる。

このように、朝氣遺跡では、濁川沖積原に定着した農耕社会をうけつぎ、平安時代に至るまでの長期にわたって集落が営まれたと考えることができる。 (保坂 康夫)

(3) 今後の課題

最後に、今後の課題として、この地域における遺跡研究の問題点をいくつか指摘し、本章を終わりたい。

甲府盆地に立地する遺跡は、以上見てきたように、時代別に明瞭な立地の違いが把握できる。また、同時に地形的に相互に独立した遺跡群を把握することも不可能ではないであろう。

一方、歴史叙述には、遺跡環境の復原は欠かすことはできない。それは、居住地の立地を規定していると考えられるからである。

今回は、国土地理院発行の2500分の1の地形図を用いて、主に遺跡周辺の地形の把握に努めた。幸い昭和54年発行の地形図には2.5mの補助等高線が描かれていたので、かなり微細な地形を読み取ることができた。しかし、たとえば遺跡立地を検討する際に重要な指標になる自然堤防は、2~3mの比高であると言われ、さらに詳細な地形図が必要となる。また、盆地は、河川の堆積作用が盛んな所であり、本来は現地形をもって容易に古地形を推定することは避けなければならないであろう。

本地域には、富士山など有史以前より火山灰をかなり広域に降下させている火山が近くにある。そして、このような火山灰層が盆地の堆積物中に互層を成しているという。このような火山灰層を鍵層として古地形の復原も不可能ではないと考える。

また、特に農耕社会の定着が成し遂げられたと考えられる濁川沖積原の地域では、今後遺跡の発見に十分な注意をはらわなければならないであろう。この地域では、土器類ばかりでなく、木製品の出土が十分考えられ特に注意を要する。また、同時に、水田はグライ土壤など特徴的な土壤が伴うことが考えられ、こういった点を指標にした水田域の把握にも注意を要さなければならないであろう。

このように、甲府盆地では、弥生時代以後の遺跡ばかりでなく、特殊な立地を示す縄文時代の遺跡についても、考古学ばかりでなく、地質学、地理学等学際的、組織的な研究が必要であり、かつまたこのような研究が十分に可能となる稀にみる恵まれた地域であると評価できるのではないだろうか。

註—— 第2図は、国土地理院発行の2500分の1地形図甲府（昭和54年発行）と、甲府北部（昭和50年発行）を用い作成したものである。

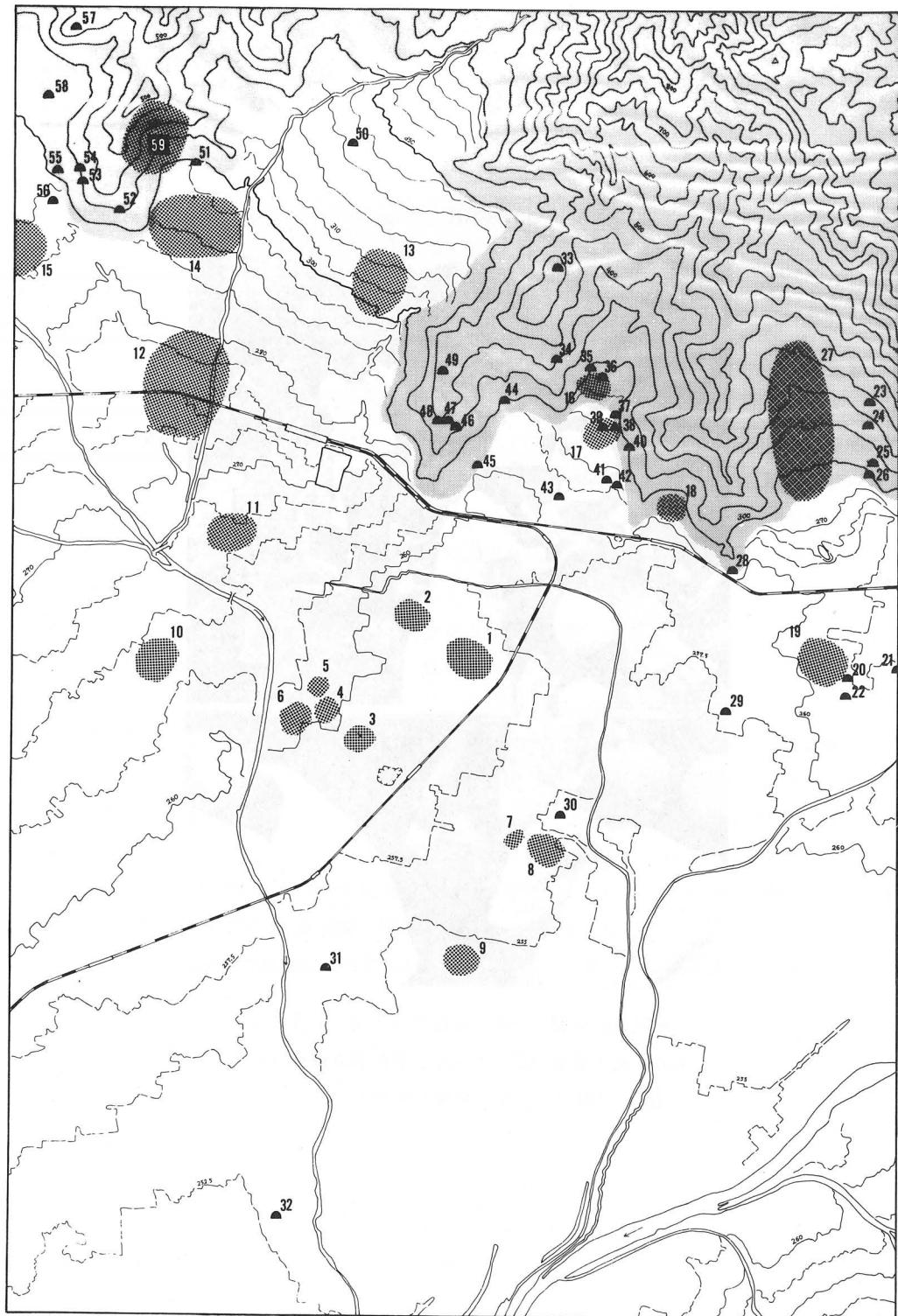
遺跡は、山梨県教育委員会発行の山梨県遺跡地名表（昭和54年発行）によるが、坂本美夫氏、末木建氏、長沢宏昌氏の御教示によるものもある。記して謝意を表する次第である。

また、地質に関する記述は、昭和45年発行の山梨県地質図によった。

また、濁川沖積原等の名称は、山本寿々雄氏著「山梨県の考古学」P 185第47図「甲府盆地地形成因概観図（田中啓爾博士作成）」による。 (保坂 康夫)



朝氣遺跡発掘では東小学校グランドということもあり、東小児童の関心も高く、発掘調査最終日の7月15日、170名の児童が発掘に参加した。



第2図 甲府市の地形と遺跡分布図

1.	朝 気 遺 跡	弥 生 • 土 師
2.	朝 気 町 遺 跡	弥 生
3.	湯 田 町 遺 跡	弥 生
4.	伊 勢 町 第 1 遺 跡	弥 生
5.	伊 勢 町 第 2 遺 跡	土 師
6.	遠 光 寺 遺 跡	繩 文
7.	増 坪 遺 跡	弥 生
8.	要 明 寺 遺 跡	弥 生
9.	上 町 遺 跡	土 師
10.	上 石 田 遺 跡	繩 文
11.	宝 町 遺 跡	繩 文 • 土 師
12.	塙 部 遺 跡	弥 生 • 土 師
13.	山 梨 大 学 遺 跡	土 師
14.	緑 ケ 丘 遺 跡	繩 文 • 弥 生 • 土 師
15.	湯 村 遺 跡	弥 生 • 土 師
16.	北 原 遺 跡	繩 文
17.	善 光 寺 裏 遺 跡	繩 文
18.	酒 折 遺 跡	繩 文
19.	在 原 塚 遺 跡	土 師
20.	富 士 塚 古 墳	(円 墳)
21.	太 神 さ ん 塚 古 墳	(円 墳)
22.	琵 琶 塚 古 墳	(前 方 後 円 墳)
23.	無 名 (積 石 塚)	
24.	無 名 (積 石 塚)	
25.	無 名 (積 石 塚)	
26.	無 名 (積 石 塚)	
27.	横 根 古 墳 群 西 支 群 (積 石 塚 • 62 基)	
28.	無 名 (古 墳)	
29.	藤 塚 古 墳	
30.	御 前 塚 古 墳	
31.	人 形 塚 古 墳	
32.	刃 剣 塚 古 墳	
33.	善 光 寺 塚 1 号 墳	

34. 一 つ 塚 古 墳
35. 善 光 寺 塚 2 号 墓
36. 稲 荷 塚 古 墓
37. 北 原 古 墓 第 1 号
38. 北 原 古 墓 第 2 号
39. 北 原 古 墓 第 3 号
40. 不 老 園 古 墓
41. ポ ン ポ コ 塚 古 墓
42. お め 塚 古 墓
43. 法 印 塚 古 墓
44. 山 楽 山 古 墓
45. 二 ツ 塚 古 墓
46. 無 名 (古 墓)
47. 無 名 (古 墓)
48. 愛 宿 山 山 頂 1 号 墓
49. 愛 宿 山 山 頂 2 号 墓
50. お 塚 さ ん 古 墓
51. 無 名 (古 墓)
52. 無 名 (古 墓)
53. 大 平 古 墓 第 1 号 墓
54. 大 平 古 墓 第 2 号 墓
55. 無 名 (古 墓)
56. 万 寿 森 古 墓
57. お て ん ぐ さ ん 古 墓 (積 石 塚)
58. 無 名 (古 墓)
59. 湯 村 古 墓 群 東 支 群 (6 基 うち 1 基 積 石 塚)

第二節 朝氣遺跡の層位と文化層

第6図は第30区東特別区南壁セクション図で朝氣遺跡の基本層位実測図である。この図を基に、以下に本遺跡の層序の概観を述べてみる。

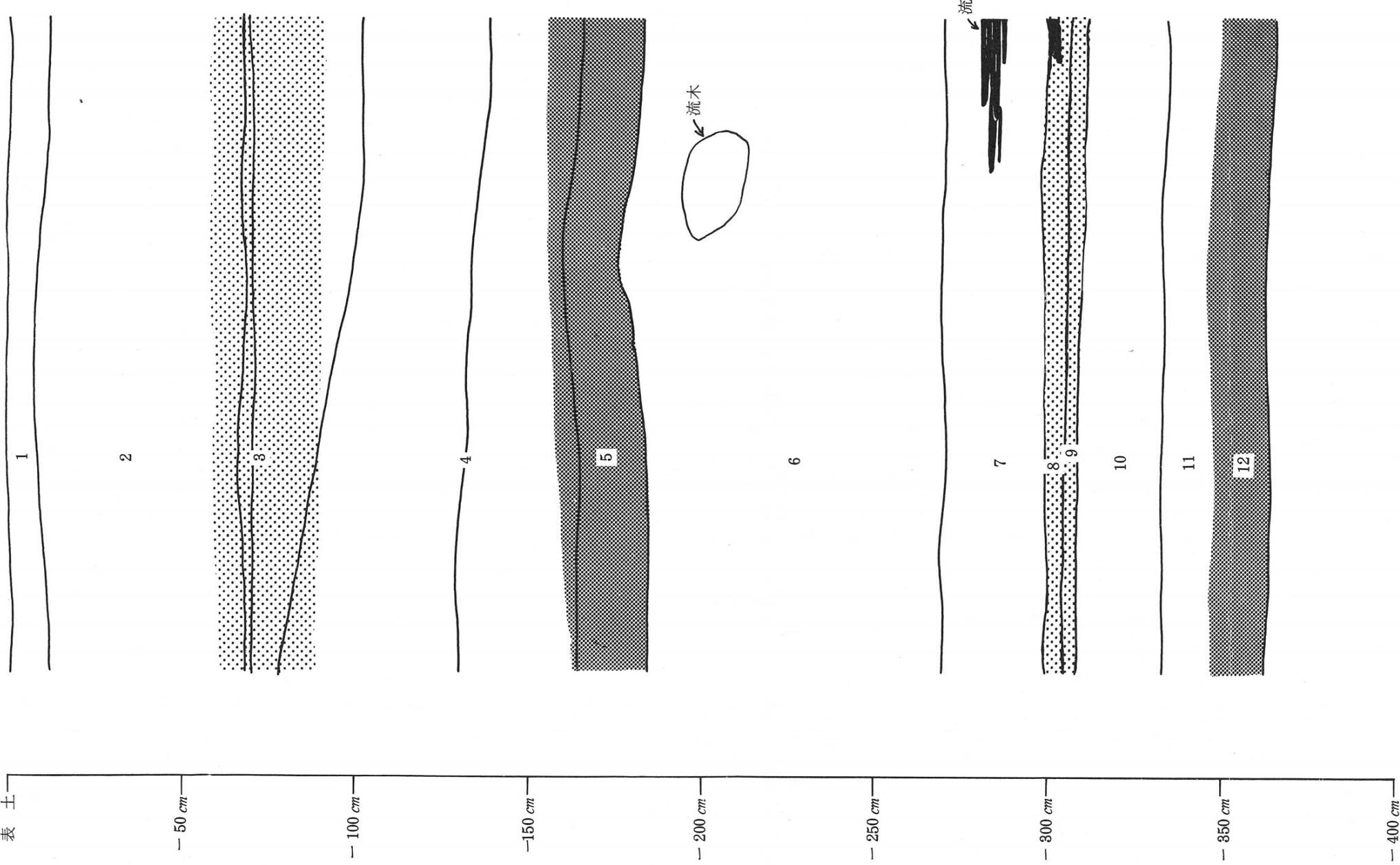
- 1層……グラウンド埋立時の砂礫層で、大きな礫を多く含んでいる。
- 2層……暗褐色粘質土で、グラウンド埋立前の水田の床土である。
- 3層……酸化鉄の赤味を帯びた黒色粘質土で、10～30cmの堆積である。
- 4層……砂を含んだ黒色粘質土で、60～80cmの堆積である。
- 5層……4層同様、砂を含んだ黒色粘質土であるが、4層に比べ白色の砂質土が多く混っている。堆積は20cmである。
- 6層……黒色粘質土と白色砂質土の互層で流木を含む。80～90cmの堆積である。何回もの洪水を物語る。
- 7層……やはり白色砂質土であるが、他の層と違い、砂の粒子が荒い。本層にも流木がみられる。20～30cmの堆積である。
- 8層……暗褐色粘質土で5～10cmの堆積である。
- 9層……暗褐色粘質土に荒い粒子の砂の混った層で、5cmの堆積である。
- 10層……粒子の細かい白色砂層で25～30cmの堆積である。
- 11層……暗褐色粘質土と白色砂質土の混土で30cmの堆積である。
- 12層……粘土層である。

以上が朝氣遺跡の基本層序であるが、これらのうち遺物を包含するのは3、5、8、9、12層である。3層は国分期、5層および8層9層が鬼高期、12層が和泉、五領期である。朝氣遺跡では、はっきりした遺構こそほとんど確認されていないが、五領～国分までの土師器が層位的にとらえられた。その中で、特に鬼高期の文化層は5層と8・9層に分かれるが、これらの間には6～7層が180cmほど堆積している。しかも、6、7層には流木がみられ、6層では黒色粘質土と砂の互層となっている。このことは、「鬼高期」というきわめて短い時間内に何度も洪水が起ったことを示している。後述するように、甲府市内でも比較的底地であるところには弥生時代以降の遺跡が多い。他遺跡でも現地表から-140cm程度で弥生式土器を出土した例や、上石田遺跡のように-60cm程度で縄文中期の遺構、遺物を出すところもある。本遺跡においては前述したように-350cmで、五領、和泉期の遺物が出土している事実もあり、当時の荒川（あるいは釜無川か）の氾濫がかなり激しかったと考えられる。

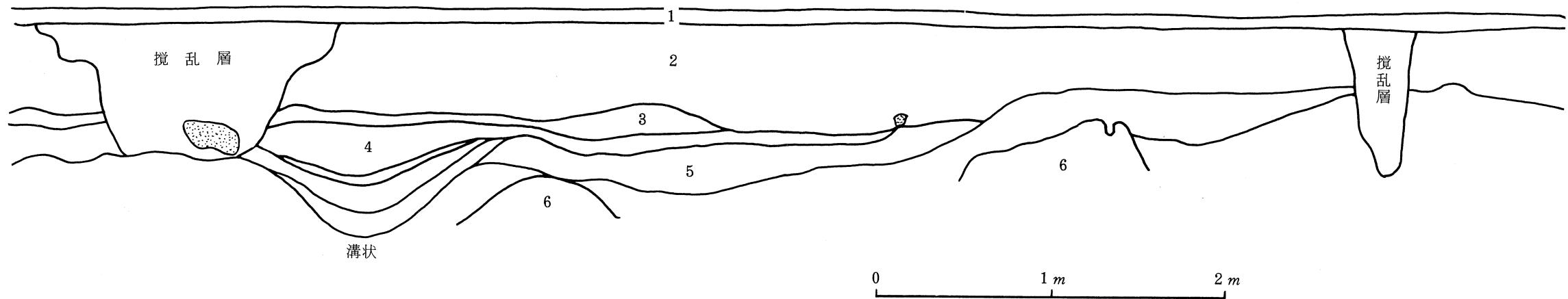
12層においては和泉、五領期の遺物が出土しているが、五領期の遺物はわずかにS字状に口縁をもつ甕の破片と高杯で、本層の主体は和泉期であると考えられる。しかし、和泉期、五領期それぞれを層位的にとらえることはできなかった。

なお、弥生式土器の小破片が数点出土しているが、これらは最上層から発見されたもので層位的にはとらえられない。また、同じく国分期の層から真間式土器が出土しているが、これもわずかなもので、これを層位的に分割するまでにはいたらなかった。
(長沢 宏昌)

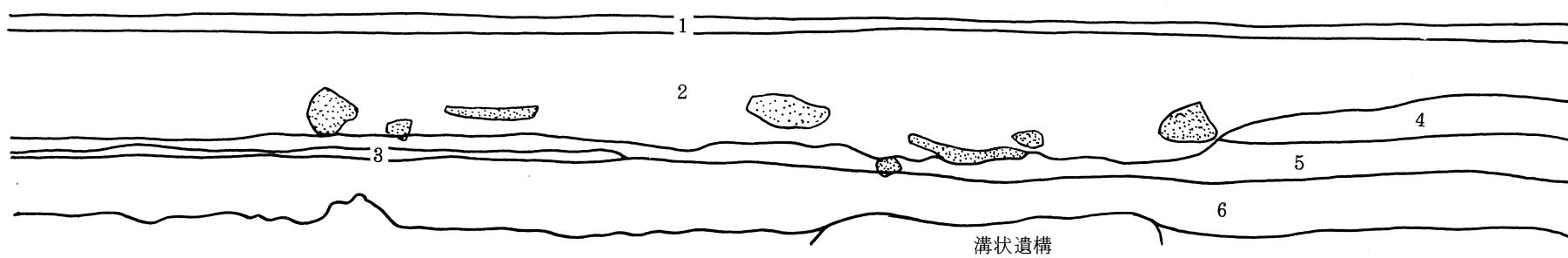
表 土



第12区～16区 東壁セクション



第6区～8区 西壁セクション



第7図 朝氣遺跡トレンチ・セクション実測図

1. 表土
 2. 埋立砂礫層
 3. 酸化鉄を含んだ赤い堅い層
 4. 明るい褐色土層
 5. 暗褐色土層
 6. 明灰色砂層
- 文化層(国分期、真間期)

第三章 朝氣遺跡発掘調査報告

第一節 朝氣遺跡発掘の経過（発掘日誌から）

昭和 51 年 7 月 3 日（土）曇り一時雨。

前日の 2 日（金）までに甲府市教育委員会の配慮によって、調査現場際に発掘本部並びに資材庫をかねたテント設営が完了し、発掘調査用具、諸資材の調達を済せ、3 日には午前 9 時に調査に伴う概況説明を発掘担当者谷口から行われた後、発掘グリットの設定に着手した。

発掘グリットは第 5 図に見られる通り、東小学校々庭をほぼ南北に走る発掘区域の性格から、巾 2 m 四方のグリットを南から北へ 45 区設定し、南から 1 区、2 区、3 区、4 区、5 区、6 区、………と順を追い 45 区まで設定した。総延長 90 m である。

また、発掘現場はグラウンドという特殊状況の中で表土が固く、かつ、現地表から 50 ~ 60 cm が埋立による整地になっており、発掘調査着手の時点では下水管埋設予定地のほぼ南北一直線に約 95 m、巾 4 m 深さ 50 ~ 60 cm（第 1 図版、第 2 図版参照）に亘って、ユンボによる掘削除土作業が進められており、発掘調査はいきなり文化層から始められるという状況の中にあった。

この溝の中心線から左右 1 m づつで 2 m の中で設定したグリットである為、第 2 図版でみられる通りビニールの区画の東西へ各 1 m の空間が出来たが、その区域は東拡張区、西拡張区と呼称した。

午後、1 ~ 5 区、6 ~ 10 区、11 ~ 15 区、16 ~ 20 区、21 ~ 25 区、26 ~ 30 区、30 ~ 35 区、36 ~ 40 区、41 ~ 45 区の 9 区分に分けて文化層の上層にまで達した掘削除土作業で表面に露出した土器片の表面採集を済せ、終了後直ちに 1 区、3 区、5 区から発掘調査を開始した。

発掘後間もなく、- 5 cm の位置で 5 区南西隅にて須恵器を確認。

また、9 区西拡張区壁に住居址？ らしきもの、4 ~ 5 区西拡張区に土師器の大型破片を確認、1 区 3 区、5 区に続き、4 区、5 区についても大型破片のレベルに合わせ発掘作業を続行。さらに、7 区及び 1 区、2 区は - 10 cm の位置で止め、同レベルでの遺物散布状況の確認をする目的で 11 区、13 区へと作業を進めた。

昭和 51 年 7 月 4 日（日）晴。

4 区西拡張区を前日に引き続き調査、さらに 8 区西拡張区壁に土師器の完形品が出土。その壁の整備。また、昨日から着手した 11 区は - 10 cm の位置で土器片散布が著しく、そのレベルで整備、同じく 13 区からは - 10 cm のレベルでクルミの実の出土が著しく、その面で整備、発掘調査は 15 区、17 区へと移行した。

特に、3 ~ 4 区西拡張区からは 2 つの柱穴が確認され、住居址の床面を求め、3 区、4 区、5 区及び同西拡張区の全域に亘り、同一レベルでの整備を進めた。

また、この日の作業は急ピッチに進め、13 区（クルミ発見グリットの微細図作成）、15 区（発掘するも攪乱）、17 区（10 ~ 15 cm）、19 区（15 ~ 20 cm）、21 区（10 cm）、23 区（5 ~ 10 cm）、25 区（10 cm）、27 区（上層を一部）、29 区（上層を一部）、31 区（上層を一部）を発掘した。

特に 25 区は黒色土層に当り遺物（土器片）の包含が多く、かつ、中心に焼土もあり、住居址の可能

性もある様に思えた。

24区と26区は明日5日に追うこととした。また、29区は良好な遺物包含地と思われる反面、31区はいきなり粘土層と、一見して平坦なグラウンドも当時の層位関係の複雑さが伺われる。

昭和51年7月5日（月） 晴。

昨日の24区、25区、26区に亘り昨日のレベル（-10cm）で全面を追う作業を行った。同レベルで東、西とも拡張区いっぱいに広げた結果、土の色が明確に違う線を確認、少くとも生活面であることが想定された。また、その面から「鉄さい」も発見。さらに、土器片も多数あり、ほぼ完形の壺2個も採集した。

また、4区、5区も東側拡区をいっぱいまで追うこととし進めたが、その作業の中で炭を多く含む黒色土塊を発見した。

また、4区、5区、6区では同一レベルで住居址の確認をすべく、その床面を求めたが明確に出ず、その為、5区西拡張区に試掘溝を入れたが、それでも確認できなかった。なお、現レベルの下15cmあまりで砂層となり、その砂層中より黒色（表裏）土器一片を採集。

さらに、4区南東から新たに柱穴1個及び支柱穴らしきもの4個を発見した。同レベルとの関係は不明。

昭和51年7月6日（火） 晴。

昨日につづき25区、26区では住居址確認のための床面を追う作業を進める一方、新たに15区、33区、35区の発掘にも着手。

また、昨日柱穴及び支柱穴の発見のあった4区、5区、6区では、その全部を同一レベルに落し土色の相違を追う作業を進めた。

30区から縁釉の比較的大きな破片、及び28区からほぼ一個体分の壺を発見。

午後、24区～30区まで東、西拡張区とも同一レベルに落し、土色の変化関係を追った。

特に24区に隅丸方形らしき黒色部分が現われたが、25区にまたがる部分で消えており、明確さを欠くが生活面であることは想定される。

午前中から作業を進めていた15区は搅乱されており作業は途中で打ち切る。縁釉破片1個を発見。

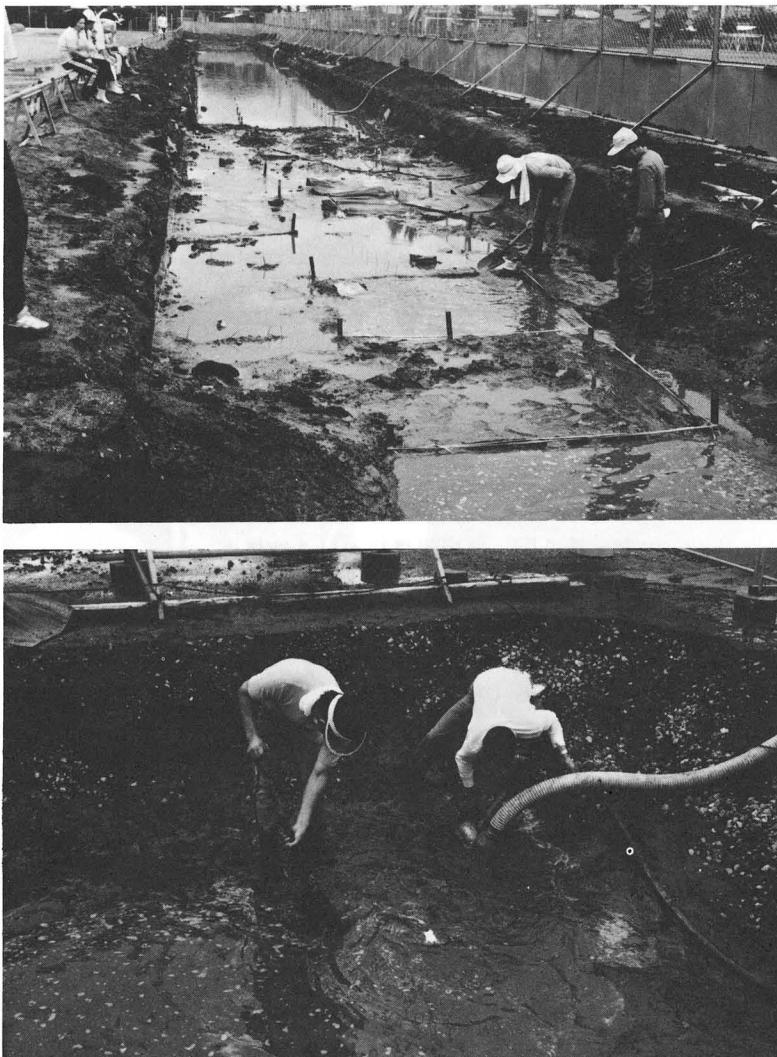
昭和51年7月7日（水） 晴。

11区、12区、13区、14区、15区、16区を同一レベルで追う。13区ではクルミ、桃の種多数を発見。15区では最近の工事で搅乱された形跡があるが、さらに掘り下げるところ東西に走る黒色の帯状の溝状遺構が認められた。発掘範囲が限られているので、こうした遺構を追求することも不可能であった。

昭和51年7月8日（木） 晴。

午前中24区～30区の微細図をとり、土器片を採集。また、午後、4区～7区の微細図をとり土器片を採集。

なお、4区西拡張区の土器はかなり大型であると同時に炉址である為、そこだけ残し、炉の床面でプランを追う。



第3図 雨で浸水した発掘グリット

6区から長頸壺の頸部（灰釉）を発見。その周辺には焼土の堆積がみられた。

なお、この日に発掘開始日に議会の都合で出来なかった鍛入れ式を甲府市教育委員会岩波教育長、市教委関係者出席のもとに正午前に執り行い、新たに38区～44区の発掘に着手。

40区から30cm掘り下げた部分全面に暗褐色土層の広がりはあるが、遺物は土師器の小破片数点にとどまった。

42区は約40cm掘り下がたが北部は既に砂層に達した。しかし、グリット全体からは黒褐色の帶が南東に伸びていた。大型破片の確認もあり、この辺に調査の重点を置く。

昭和51年7月9日（金） 晴。

40区～44区を掘り下げる。40区は40cm掘り下げる砂まじりの暗褐色粘土層となる。遺物は土師の小破片のみ。



第4図 発掘現場における関係者

41区は20cm掘り下げるも暗褐色粘土層（砂を含まない）で遺物は少ない。42区は昨日のまま。43区は30cm掘り下げるもグリット内は殆んど砂層。44区は北端壁にかかり（ユンボで埋立層をはがされた面から）3cmの地点から完形の壺を発見（第5、6図版）。この壺は口径約10cm、胴径16cm、高さ17.5cmの赤褐色を呈し焼成も良好。砂層に乗った形で埋まっていた。

昭和51年7月10日（土）雨。

午前中、昨日の作業を継続する。雨が降ったりやんだりしていたが本降りになり作業を中止。

昭和51年7月11日（日）曇り。

トランシットによる基準点を設ける。4区西拡張区炉址はグラウンド地表面下64.75cm、13区出土の木器？は同88.5cm、12区出土の壺は同89.5cm。その他、床面、層位関係の図面、及び微細図づくりの作業を進める。

発掘は昨日の継続部分についてさらに進める。特に44区北壁部分を拡張するも、他に遺物の確認は出来なかった。

40区～44区に於ける層位には変化の度合が大きい。

昭和51年7月12日（月）雨。

雨の為、発掘調査、記録とも休む。

昭和51年7月13日（火）晴。

昨日来の雨の為、発掘グリット全面が水没した。午前中はこの水の排水作業で終える。

午後、4区、21区、24区、38区を掘り下げる。

4区では住居址と思われる範囲内を砂層まで掘り下げる作業を進めたが、約5cm掘り下げた位置からカーボン、焼土面に当る。これを生活面として確認。また、この面のレベルで広く追う。遺物は土師器



第5図 発掘調査後の工事現場

発掘調査完了後、直ちに埋管工場が行われたが、第30区から第45区方向にかけて厚い真白い砂層が確認された。工場関係者の話では、この砂層は舞鶴公園南から、刑務所北側を通り、東小学校に通じているといわれる。

須恵器と共に破片のみ。カマドの実測を行いさらに作業を進める。

21区は砂層まで掘下げ完了、遺構は発見されず。遺物は土師器破片のみ採集。

24区は7月6日確認の生活面を追う。確実な床、壁はいぜん認められない。遺物は土師破片のみ。

また、24区～30区東側セクション実測。さらに38区は約30cm掘り下げたが遺構らしきものの確認はできなかった。遺物は土師器破片のみ。

昭和51年7月14日（水） 晴。

調査日程もありますとこ2日間、記録を重点に作業にピッチをあげる。

3区、4区及び同西拡張区の住居址及び壁を追い記録。床面と床面内外にある柱穴とは直接関係なく、現生活面以後の遺構とみられる。

7区～8区西壁面を実測、床面には8区に確認されたような黒褐色の帯が確認された。

10区～13区は砂層まで（グラウンド表面から約130cm）掘り下げる。特に12区から土師器の長頸広口壺と壺2個の3個の土器が完形のまゝ下を向き重なって出土（第14図版参照）、また同層位から他に木器？の発見もあった。

14区～16区は遺構、遺物の確認なく発掘中止。17区は砂層まで下げた。24区～26区の住居址らしき遺構の確認は最終日に持ち越す。

40区～42区に東西～西南に黒褐色の帯状遺構を確認。

昭和51年7月15日（木） 晴。

最終日、昨日までに残した遺構の確認、記録に全力を上げる。また、これまでの未発掘グリット、及び-5、-10cmまで掘り下げていたグリット、2区、6区、9区、17区、18区、20区、23区、31区、32区、33区、34区、35区、36区、37区に東小児童170名が入り発掘実習を行った。

24区～26区の住居址確認も砂を含んだ層である住居壁幕の立ち上りも不明。最終的に住居址の確認は出来なかった。遺物も土師器破片を中心に完形はなかった。

また28区～31区にまたがり、大きな溝状の落ち込みがある様にみられ、全般的に有機物の含有層となっている状況であった。発掘調査に参加した東小PTAの地元の人達は丁度この辺に河があり、子供の頃、この河で遊んだという話も多く、事実層位の状況もそれを物語るものがあった。

なお、午後になり30区の-160cmの砂層から土師器の壺の完形2個を含め発見された。この日の作業で発掘調査の全てを完了した。

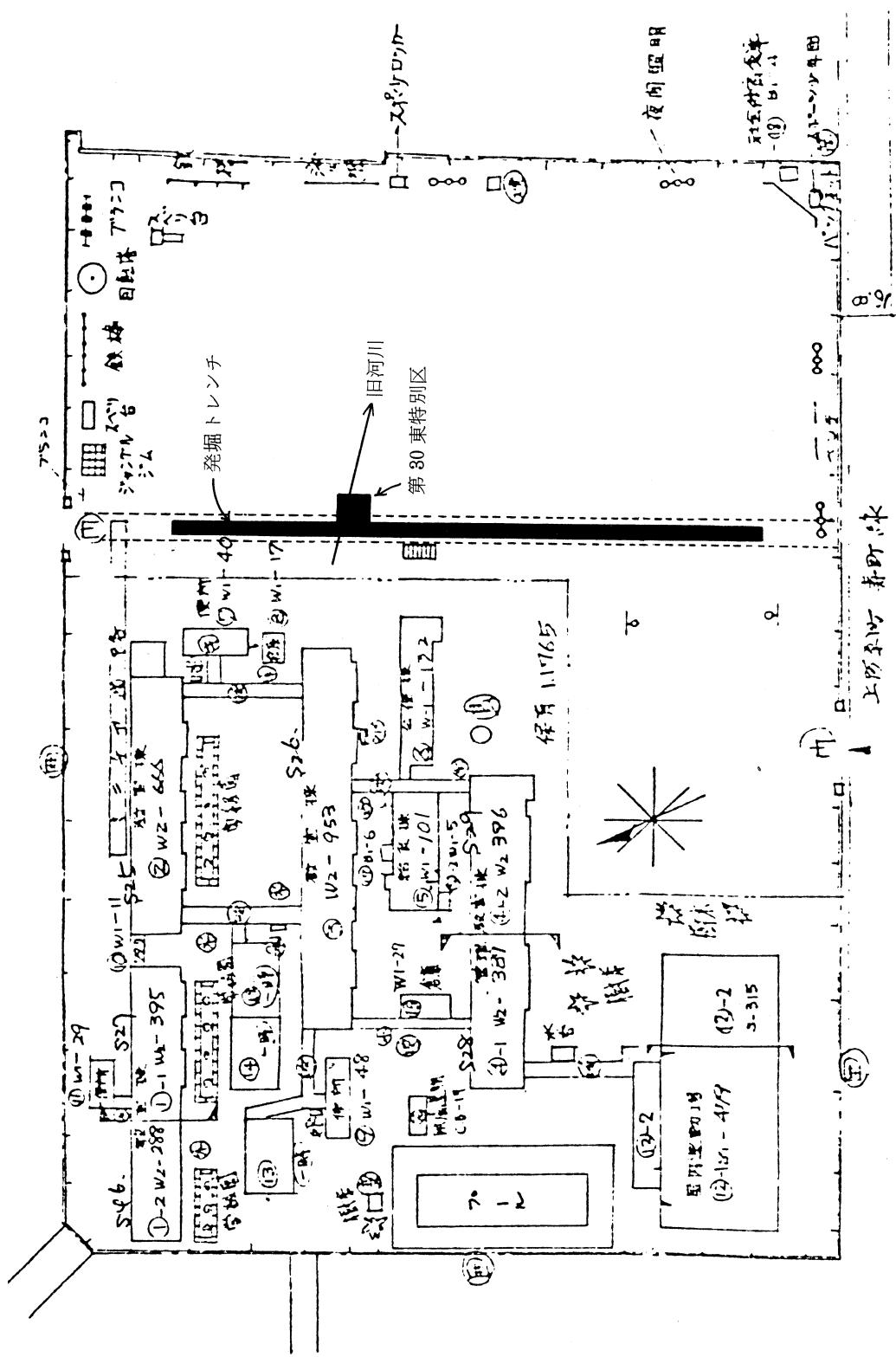
昭和51年8月8日（日） 晴。

7月15日に全ての発掘調査を完了したが、翌16日から下水管埋設工事が開始された。8月7日、発掘地域隣接地が工事関係者によって掘られ、たまたまそこから木材等の出土があるという報に接し、住居址の建物の一部かという期待のもとに8日現地調査を行った。

場所は27区～30区の東側で、一番遺物の包含が濃厚な28区～30区の大きな溝状の落ち込みの延長線にあって、好資料が得られた。

出土した木材は自然木で人工的な加工の形跡はなかった。

第8図 東小学校と発掘地点実測図



第二節 朝氣遺跡出土の遺構

溝 状 遺 構

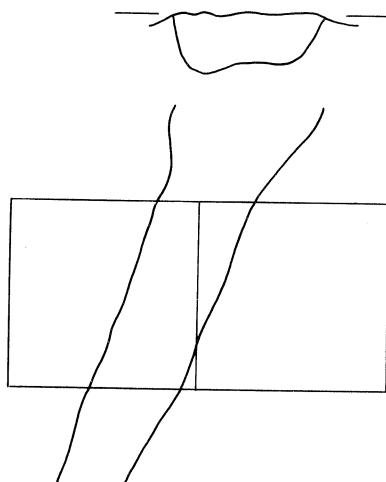
7区～8区にかけて、巾約100cm、深さ約70cmの溝が発見された。7区西拡張区西壁では地表下約65cmで砂層に達するが、その砂層を堀り込んでいた。溝底はほぼ平坦で50～60を計る。覆土は黒褐色を呈する粘質土で一層だけであった。なお、遺物は全くみられず、他のグリットでは同様な遺構はみられなかった。

カ マ ド

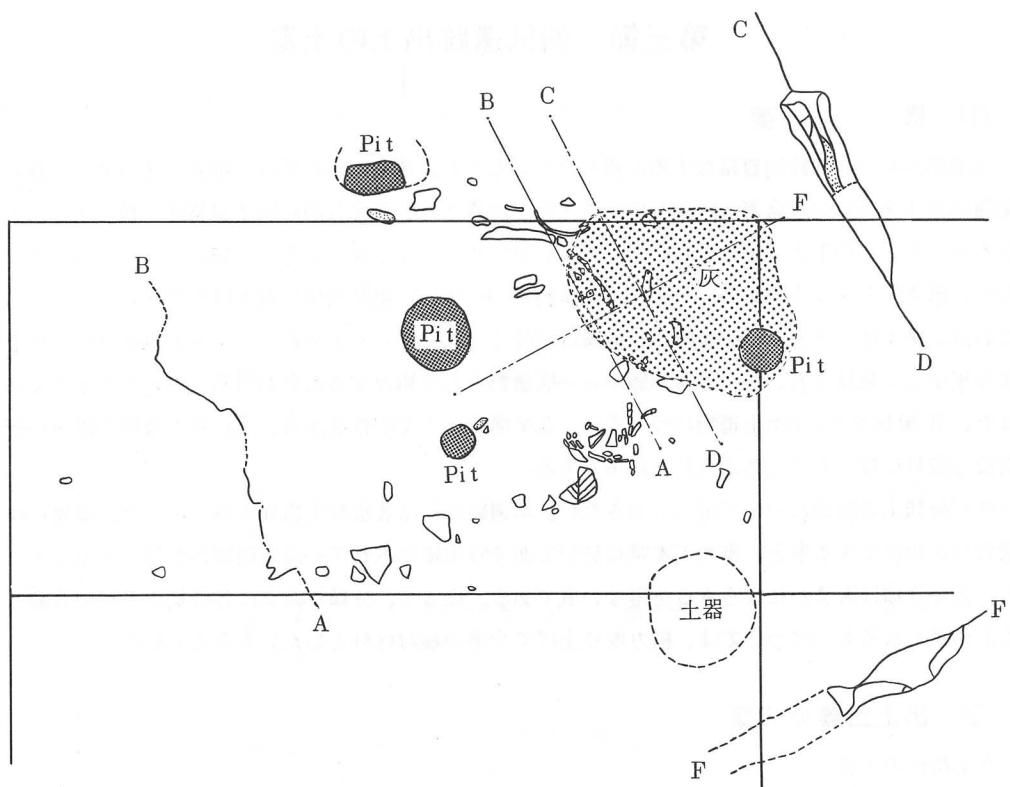
4区西拡張区北側寄りに南向きのカマドが確認された。50×60cmの範囲に焼土が広がり、灰は10cmほどの堆積であった。袖石、天井石は全くみられなかつたが、甕の破片を袖石がわりに利用していたと考えられる。焚口と思われる部分の両脇に50cmの間隔をおいて甕の破片を埋め込んでいた。この二つの破片は激しく二次焼成を受けたと思われ、表面の剥離が激しく、もろいものである。両破片は別個体であるが、ともに鬼高窓のものであった。（第32図版参照）なお、カマドは当然住居内に構築されたものであるが、その住居の壁および床面は確認できなかつた。

P i t

2区、3区西拡張区および4区西拡張区にそれぞれ小Pitがみられた。20×20×26cm、20×20×21cm、23×25×17cmを計る。これらはほぼ直線上に連なり、間隔は175cm、180cmでほぼ等しい。他に4区中央部に18×18×11cmの小Pitがみられるが、これが前述した3つのPitと同じ性格のものであるか不明である。なお、Pitの中から遺物木質等は発見されなかつた。（長沢 宏昌）



第9図 第7区～第8区に見られた溝状遺構



第10図 第4区西拡張区に見られたカマドとピット

第三節 朝氣遺跡出土の土器

(1) 概 要

本遺跡からは、比較的豊富な土器が得られた。しかし、遺構については、前節で述べている様に調査範囲の狭少あるいは包含層の状態が悪いことなどが重なり、残念ながら明確な格好で検出することができなかった。この事より出土遺物については、総てのグリットを一括して分類、考察を行ないたい。ただし、第4区グリッドと第30区グリッドの遺物については、更に別個に取上げることとする。

これは、第4区グリッド出土遺物が、遺構は明確にされなかったものの、カマドと推定される焼土付近より集中して発見され、かつ土器形態から一括遺物として処理することが可能と思われるからである。また、第30区グリッド出土遺物については、基準層序としての性格から、文化層と環境の関連の把握に有効な資料になるものと考えられるからである。

次に分類上の問題について記しておきたい。本遺跡からは豊富な土器類を得ているが、遺構に伴う一括資料が皆無である事と、重ねて本県に於いてあまり明確にされていない時期の土器であることなどから、その分類は大まかにならざるを得ない事である。従って、分類が確実に各時期のものに合致しているか疑問となるものについては、極力取り上げて今後の検討材料としたいと考えている。

(2) 出土土器の分類

弥生時代の土器

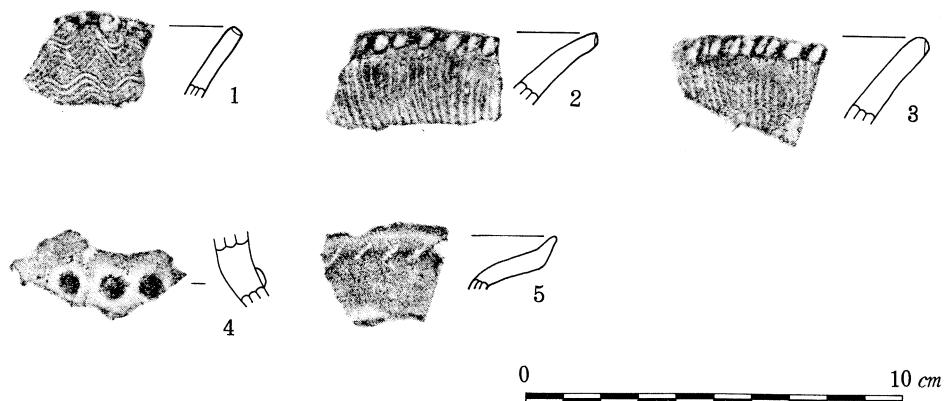
本遺跡から出土した土器片の中から、確実に弥生式土器片と考えられるものは、僅かに1点だけであった。

甕（第1図1）

ゆるやかに外反する口縁部細片である。口唇部際まで櫛描波状文が施され、かつ口唇部には刷毛状工具によると考えられる刻目が施されている。

古墳時代の土器

本遺跡からは、量の多少はあるものの古墳時代前期から後期の全期間にかけての土器が確認されている。



土器第1図 グリット内出土土器拓影

第1表 グリッド内出土土器一覧表

挿番号	器形	口径 法量 (cm) 器高 底径	土器の観察	器形等 の特徴	整 形 等			出土グ リッド	備考
					外 面	内 面	口唇部		
第1図 1	甕		胎土 砂粒、雲母を少量含む 色調 外一灰褐色 内一黒褐色 焼成 良好、硬い		櫛描波状文	箆ナデ	刷毛状工具による刻目	19 G	
2	"		胎土 砂粒を少量含む 色調 茶褐色 焼成 良好		縦位櫛状箆ナデ	横位櫛状箆ナデ	"		
3	"		胎土 砂粒を少量含む 色調 茶褐色 焼成 良好		"	"	"	30 G	深 3.0~3.5 m
4	壺		胎土 精々されて いる 色調 茶褐色 焼成 良好	ボタン状貼付文	箆ナデ	箆ナデ		3 G 拡	
5	塊		胎土 精々されて いる 色調 外一黒褐色 内一茶褐色 焼成 良好		箆ナデ 口縁部に櫛状工具による刺突文	箆ナデ			

壺

1類（第1図4） 壺の頸部から肩部にかけたあたりの破片と思われるもので、ボタン状貼付文を特徴とする。

2類（第2図1） 口辺部の破片で、ゆるやかに外反する。櫛状箆ナデ調整痕が外面に残る。内外面共に赤彩が施されている。

3類（第2図2） 直線的に開く長い口辺と、平底で球形胴のものが「く」字状に接合した形のものである。内外面ともに入念に箆磨を行ない、更に口縁部と肩部付近に放射状暗文を施している。

4類（第7図9） ゆるやかに外反し、口縁部辺りで短かく内弯するものである。3類同様に内外面を入念に箆磨した後、更に放射状暗文を施している。

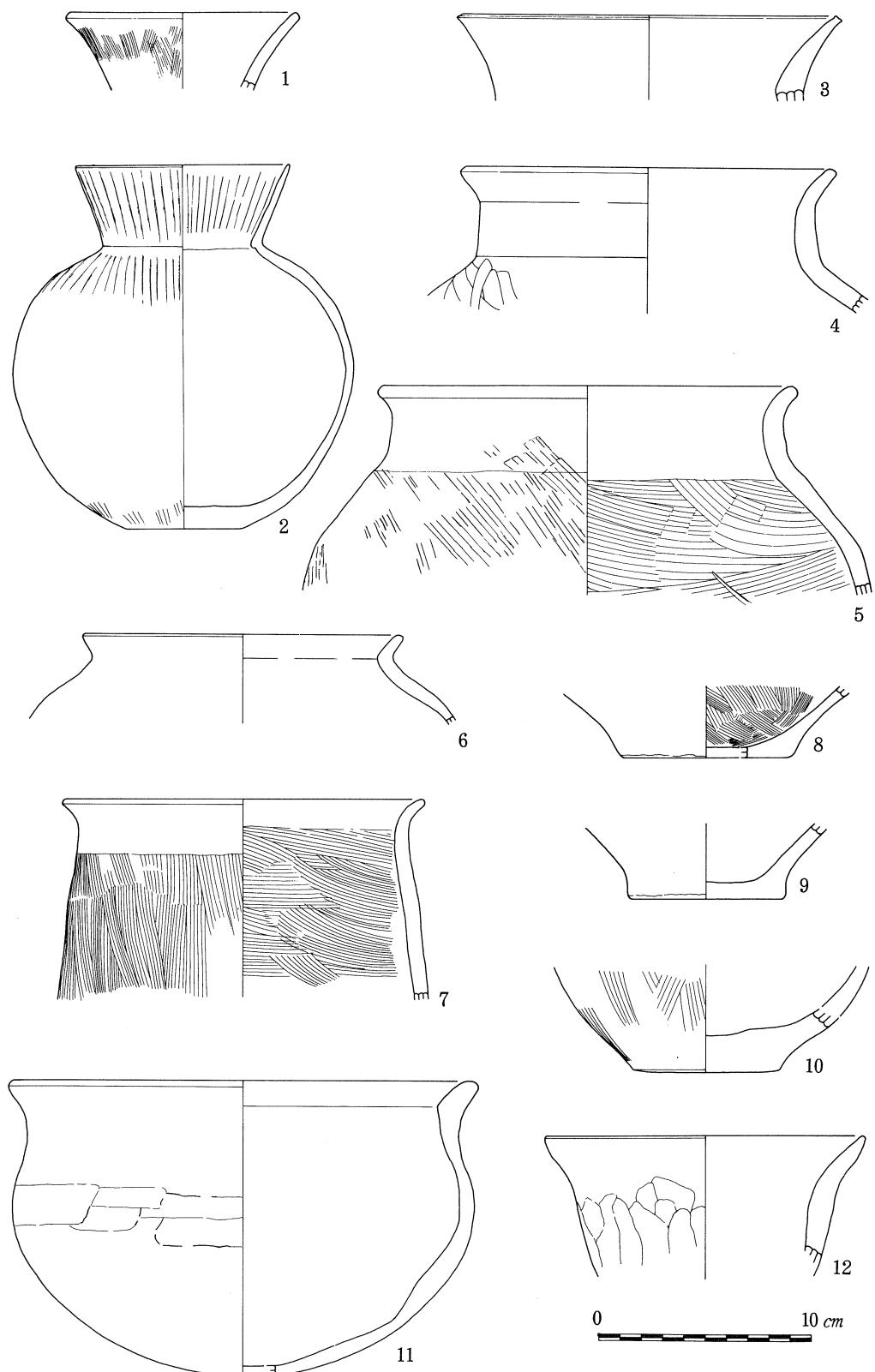
甕

1図（第1図2・3） 口縁部の細片であるが、過去の調査例から球形胴の脚台付の甕と考えられる櫛状箆ナデが明瞭に残り、口唇部には、櫛状工具によると考えられる刻目が施文される。

2類（第7図1） S字状口縁を呈する甕である。器肉が極めて薄い。

3類（第2図3） ややゆるやかに外反する口辺部である。口唇部の中央部が僅かに凹む。

4類（第2図4・5） 球形胴の甕の肩部から口辺部の破片である。口辺部は、頸部がほぼ垂直に立ちあがり、口縁部に至り短かく外反するものである。肩部以下に箆削整形痕が認められる。また器肉が厚い。



土器第2図 土器実測図

5類（第2図6） 短い口縁部が球形胴部より直接外反するものである。箒ナデ調整が認められる。

6類（第2図7） 最大径が胴部にある長胴形の甕である。口縁部は短かく外反する。内外面とも櫛状箒ナデが明瞭に残るが、口辺部ではヨコナデで平滑にされている。

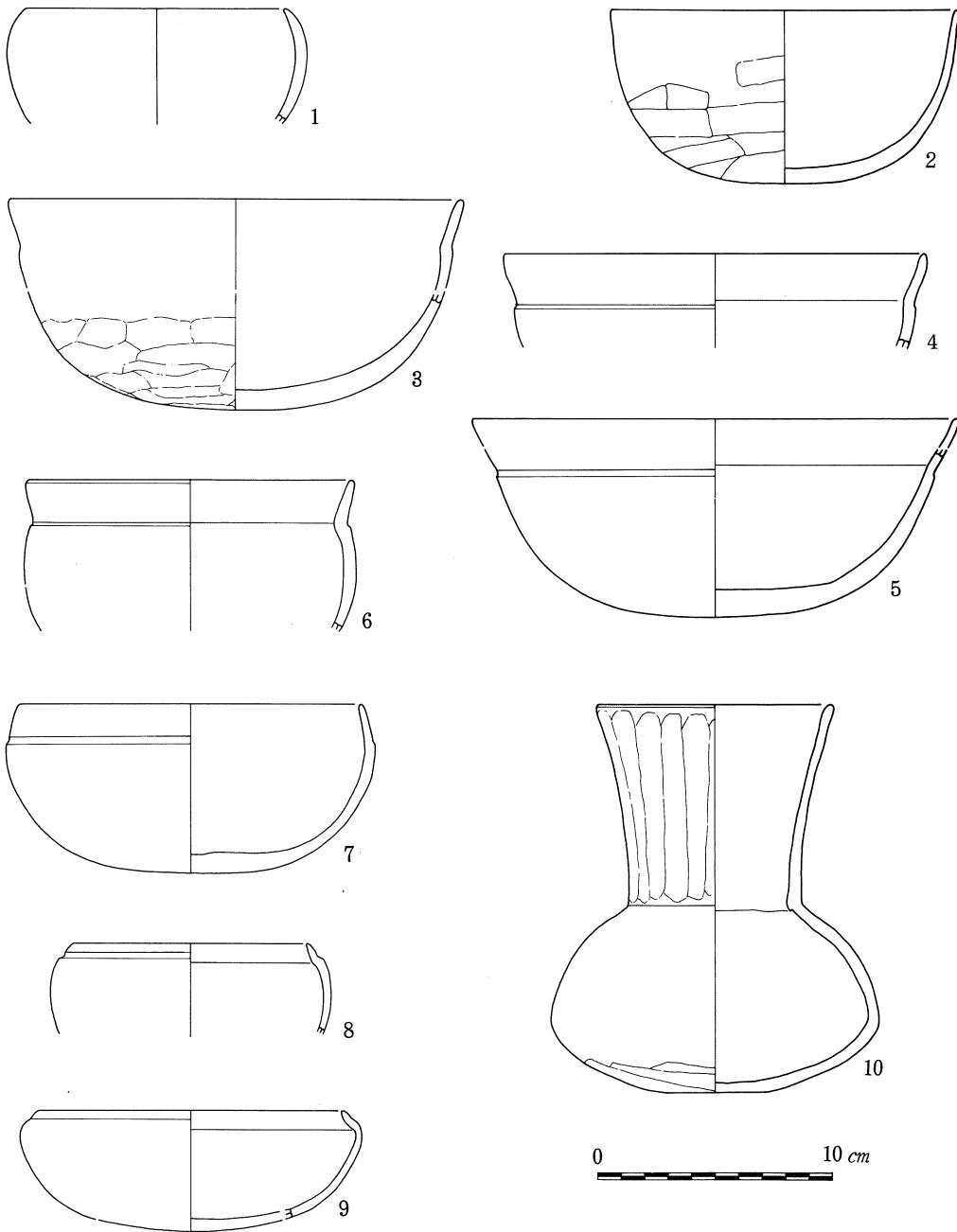
7類（第7図13） 口縁部は直線的に外方に開く。胴部は偏球形を呈する。外面は箒削後箒磨を施し、内面は指頭にて搔いている。

堆（第7図3）

口縁部を欠く。胴部は偏球形を呈し、小さい平底を形成する。外面は箒削後箒磨を施し、内面は指頭にて搔いている。

第2表 グリッド内出土土器一覧表

堆番号	器形	法量/口径 (cm) (器高 底径)	土器の観察	器形の特徴	調整			出土グリッド	備考
					外面	内面	底		
第2図 1	壺	11.0 — —	胎土 精々されて いる 色調 赤色 焼成 良好	胴部以下を欠く。 縦位櫛状箒ナ デ後口縁部に ヨコナデ、頸 部下半に横位 箒磨、赤彩	箒磨 赤彩			10 G	赤彩
2	"	10.1 17.1 5.4	胎土 精々されて いる。 色調 赤褐色 焼成 良好	「く」字状を呈する	縦位櫛状箒ナ デ後箒磨、更 に口縁部と肩 部に放射状暗文	箒ナデ、箒磨 更に口縁部に 放射状暗文		44 G	
3	"	18.1 — —	胎土 精々土 色調 灰褐色 焼成 良好、硬質	口唇部にくびれ	ヨコナデ	ヨコナデ		表 採	
4	甕	17.6 — —	胎土 砂粒が多い 色調 褐色 焼成 良好	垂直に近い立上りの 頸部で、口縁部がや や外方に開く、球胴 形の甕と思われる。	口縁部ヨコナ デ、肩部箒削	ヨコナデ		21 G	
5	"	19.7 — —	胎土 砂粒が多い 色調 黒褐色 焼成 良好、硬い	"	斜位櫛状箒ナ デ後、口縁部 頸部にヨコナデ	口縁部ヨコナ デ、胴部に横位 櫛状箒ナデ		表 採	
6	"	15.0 — —	胎土 砂粒が多い 色調 外一褐色 内一灰褐色 焼成 良好	短い口縁部、球胴形 の甕と思われる。	口縁ヨコナデ 胴部縦位箒ナ デ	箒ナデ		13 G	
7	"	17.0 — —	胎土 砂粒が多い 色調 褐色 焼成 良好	長胴形を呈する。	口縁部ヨコナ デ、胴部縦位 櫛状箒ナデ	口縁部ヨコナ デ、胴部櫛状 箒ナデ		表 採	
8	壺?	— — 7.6	胎土 比較的精々 されている 色調 赤褐色 焼成 良好		箒磨	斜位櫛状箒ナ デ	箒ナデ	28 G	
9	壺?	— — 7.1	胎土 砂粒が多い 色調 赤褐色 焼成 不良軟弱		箒磨	箒磨	木葉痕	22 G	
10	壺	— — 6.9	胎土 精々されて いる。 色調 黒褐色 焼成 良好、硬い		縦位櫛状箒ナ デ後箒ナデ	箒ナデ後、ら 線状に箒磨	箒削	表 採	
11	浅鉢	22.0 (13.9) —	胎土 砂粒が多い 色調 黒褐色 焼成 良好	丸底	口縁部ヨコナ デ、胴部箒ナ デ	口縁部 ヨコ ナデ、胴部 箒ナデ		29 G P ₂	
12	鉢	15.0 — —	胎土 精々されて いる。 色調 外一褐色 内一黒色 焼成 良好		口縁ヨコナデ 胴部 箒ナ デ 後に縦位箒削	ヨコナデ箒ナ デ		表 採	



土器第3図 土器実測図

直口壺（第3図10）

おそらく須恵器を模造した器形と考えられる。長くゆるやかに外反する口辺部と、小さな平底を形成する偏平な球形胴である。箇削後箇磨が施される。

鉢

1類（第7図2） 小形のものである。底から口縁部にかけて直線的に外方に開く。箇磨、櫛状箇ナデ痕が認められる。

2類（第2図11） 浅鉢と思われる。丸底で偏球形の胴部と、肥厚した口縁とである。

3類（第2図12） 胴下半を欠く。ゆるやかに外反する形態のものである。外面に箇削が認められる。

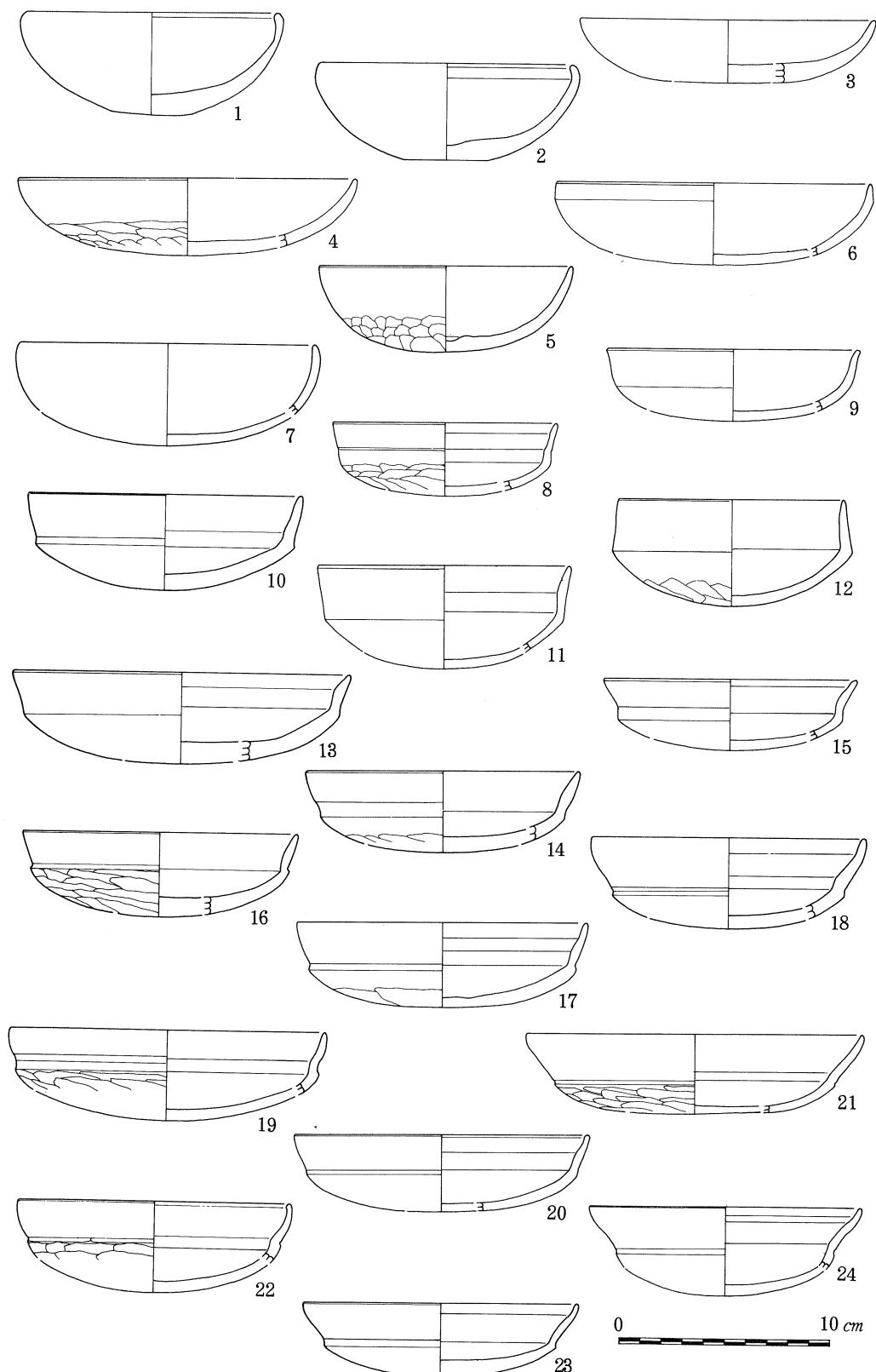
碗

1類（第1図5） 口縁部の破片である。口縁部は大きく外反した後、内屈する。口縁が内屈するあたりに櫛状工具と考えられる連続刺突文が施文される。

2類（第3図1） 半球形のもので、口唇部は尖形を呈する。箇削後、内外面を箇磨する。

第3表 グリッド内出土土器一覧表

插番 図号	器形	法量 (口径 (cm) 器高 底径)	土器の観察	器形の特徴	調整			出土グリッド	備考
					外 面	内 面	底		
第3図 1		11.0 — —	胎土 精々されて いる。 色調 黒色 焼成 良好	半球形を呈する。口 縁部内弯	横位箇削後に 横位箇磨				
2	"	14.8 7.5 —	胎土 砂粒が多い 色調 褐色 焼成 良好	半球形で丸底を呈する 口縁部は直線的に外 方に開く。	口縁部ヨコナ デ、以下は横 位箇削	ヨコナデ、箇 ナデ		14 G P 62	外面とも剥落 が多い。
3	"	— — —	胎土 砂粒を少量 含む。 色調 赤褐色 焼成 良好、硬い	丸底	横位、箇削後 箇ナデ、赤彩	箇ナデ 赤彩		表 採	
4	"	18.0 — —	胎土 精々されて いる。 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部と器体部の境 あたりに箇削による 稜がある。 口縁部が外反する。	横位箇磨	横位箇磨		表 採	
5	"	— — —	胎土 精々されて いる。 色調 黒褐色 焼成 良好	同上	箇削後に横位 箇磨	横位箇磨		表 採	
6	"	14.0 — —	胎土 精々されて いる。 色調 黒色 焼成 良好	同上	横位箇磨	横位箇磨		表 採	
7	"	14.6 7.2 —	胎土 精々されて いる。 色調 黒色 焼成 良好	口縁部と器体部の境 あたりに稜がある。 口縁部が内反する。	底部付近は箇 削後箇磨、他 は箇磨	箇磨			
8	"	10.0 — —	胎土 精々されて いる。 色調 黒色 焼成 良好	"	箇磨	箇磨			
9	"	12.8 — —	胎土 精々されて いる。 色調 黒色 焼成 良好	口縁部の内傾が著し い。	底部近くは箇 削後箇磨、そ の他は箇磨	箇磨			
10	直 口 壺	10.2 16.6 4.4	胎土 精々されて いる。 色調 赤褐色 焼成 良好	頸部の長い口縁と、 偏平の胴部、小さい 平底	頸部以上縦位、 箇削、胴部下 半斜箇削、こ れらの後箇磨	箇削後箇ナ デ	12 G	第4図の2 ・ 12と共に	

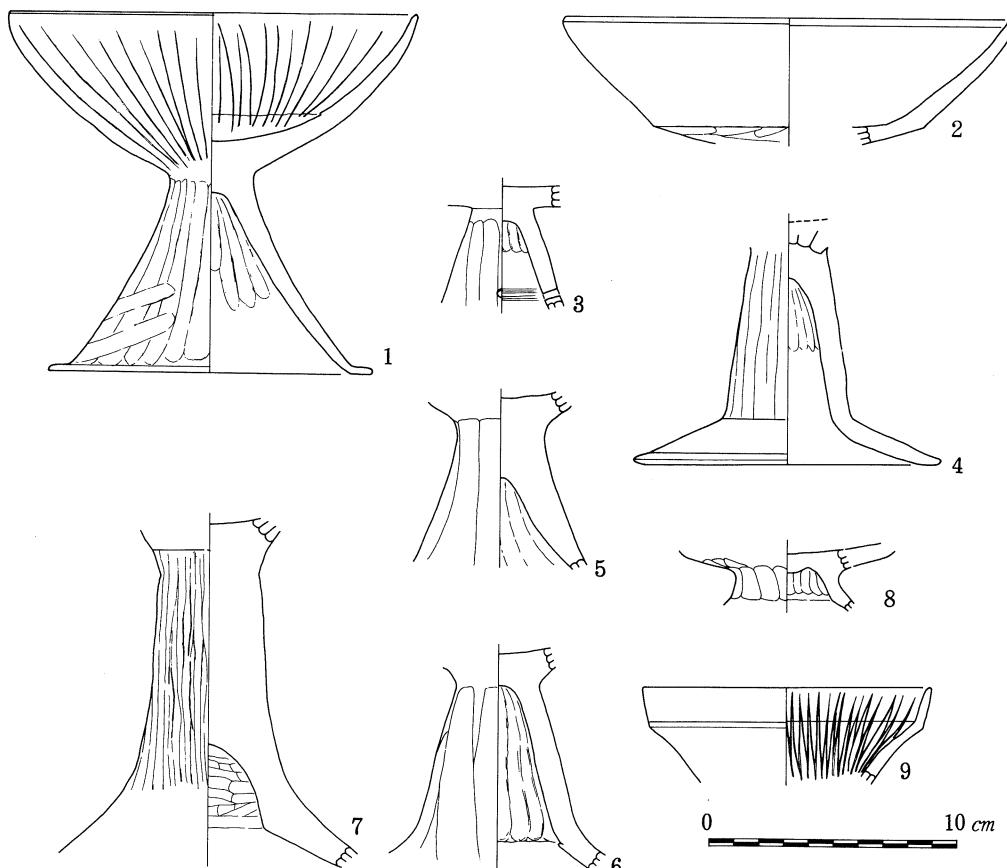


土器第4図 土器実測図

第4表 グリッド内出土土器一覧表

挿番 図号	器形	法量 (口径 器高 (cm) 底径)	土器の観察	器形の特徴	調整			出土グ リッド	備考
					外 面	内 面	底		
第4図 1	壺	11.8 4.6 4.0	胎土 精々されて いる。 色調 赤褐色 焼成 良好	半球状、小さな平底 状の底、口縁部内弯	箆磨	箆磨	箆磨	表採	
2	"	11.9 4.9 3.8	胎土 精々されて いる。 色調 黄褐色 焼成 良好	同上	器体部下半は 箆削後箆磨、 その他横位箆 磨	器体部上半横 位箆磨、その 他箆ナデ	箆削後箆ナ デ	12 G	
3	"	14.0 — —	胎土 精々土 色調 赤褐色 焼成 良好	偏平の半球形状	箆磨	箆磨		10 G	
4	"	18.0 — —	胎土 精々土 色調 暗褐色 焼成 良好	"	横位箆削後箆 磨	箆磨			
5	"	14.8 — —	胎土 精々土 色調 赤褐色 焼成 良好	" 口縁部が垂直に立 る。	箆磨	箆磨		5 G	
6	"	12.0 4.1	胎土 精々土 色調 内一黒色 外一暗褐色 焼成 良好	半球形、丸底	横位箆削後箆 磨	箆磨			
7	"	13.8 — —	胎土 精々土 色調 赤褐色 焼成 やや軟弱	"	ヨコナデ ,	ヨコナデ		43 G	
8	"	12.6 — —	胎土 精々土 色調 黒色 焼成 良好	口縁部が垂直に近い 状況で立上る。	底部箆削後箆 磨	箆磨			
9	"	12.0 — —	胎土 精々土 色調 赤褐色 焼成 良好	"	箆磨	箆磨			
10	"	18.0 4.6 —	胎土 精々土 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部が垂直に近い 状態で立上る。器体 部中央付近に稜を有 する。	箆磨	箆磨			
11	"	12.0 — —	胎土 精々土 色調 赤褐色 焼成 良好	"	箆磨	箆磨		21 G	
12	"	10.6 5.1 —	胎土 精々土 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部が内傾外反、 器体部中央付近に稜 がある。丸底	底部の箆削後 全面に箆磨	箆磨		12 G	
13	"	16.0 — —	胎土 雲母が少量 含まれる。 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部が外傾内反、 器体部中央付近に稜 がある。	箆磨	箆磨		16 G	
14	"	18.0 — —	胎土 精々土 色調 赤褐色 焼成 良好	"	底部の箆削後 全面に箆磨	箆磨		21 G	
15	"	12.0 — —	胎土 精々土 色調 赤褐色 焼成 良好	"	箆磨	箆磨		19 G	
16	"	18.0 — —	胎土 精々土 色調 黒褐色 焼成 良好	口縁部が外傾、内反 器体部付近に明瞭な 稜がある。	口縁部ヨコナ デ、底部箆削 後箆磨、稜は 箆削による造 出	箆磨		表採	

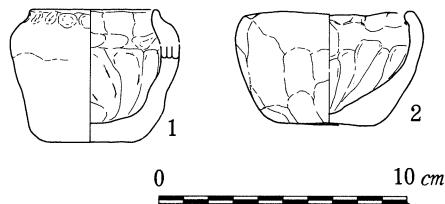
捕 番 号	器形	法量 (口径 器高 (cm) 底径)	土器の観察	器形の特徴	調 整			出土グ リッド	備 考
					外 面	内 面	底		
17	"	13.8 4.1 —	胎土 砂粒が多い 色調 外一赤褐色 内一暗褐色 焼成 良好	口縁部が外傾、内反 器体部付近に明瞭な 稜がある。	口縁部ヨコナ デ、底部箒削 稜は箒削によ る造出	箒ナデ		42 G 43	
18	"	12.8 — —	胎土 精々土 色調 赤褐色 焼成 良好	"	箒磨	箒磨		6 G	
19	"	15.0 — —	胎土 砂粒が多い 色調 黒色 焼成 良好	"	底部箒削後全 面箒磨、稜は 箒削による造	箒磨			
20	"	14.0 — —	胎土 精々土 色調 黒色 焼成 良好	"	"	箒磨			
21	"	16.0 — —	胎土 精々土 色調 黒色 焼成 良好	"	"	箒磨			
22	"	12.8 — —	胎土 精々土 色調 黒色 焼成 良好	"	"	箒磨			
23	"	13.0 — —	胎土 精々土 色調 黒色 焼成 良好	"	"	箒磨			
24	"	12.8 — —	胎土 精々土 色調 黒色 焼成 良好	"	"	箒磨			



土器第5図 土器実測図

第5表 グリッド内出土土器一覧表

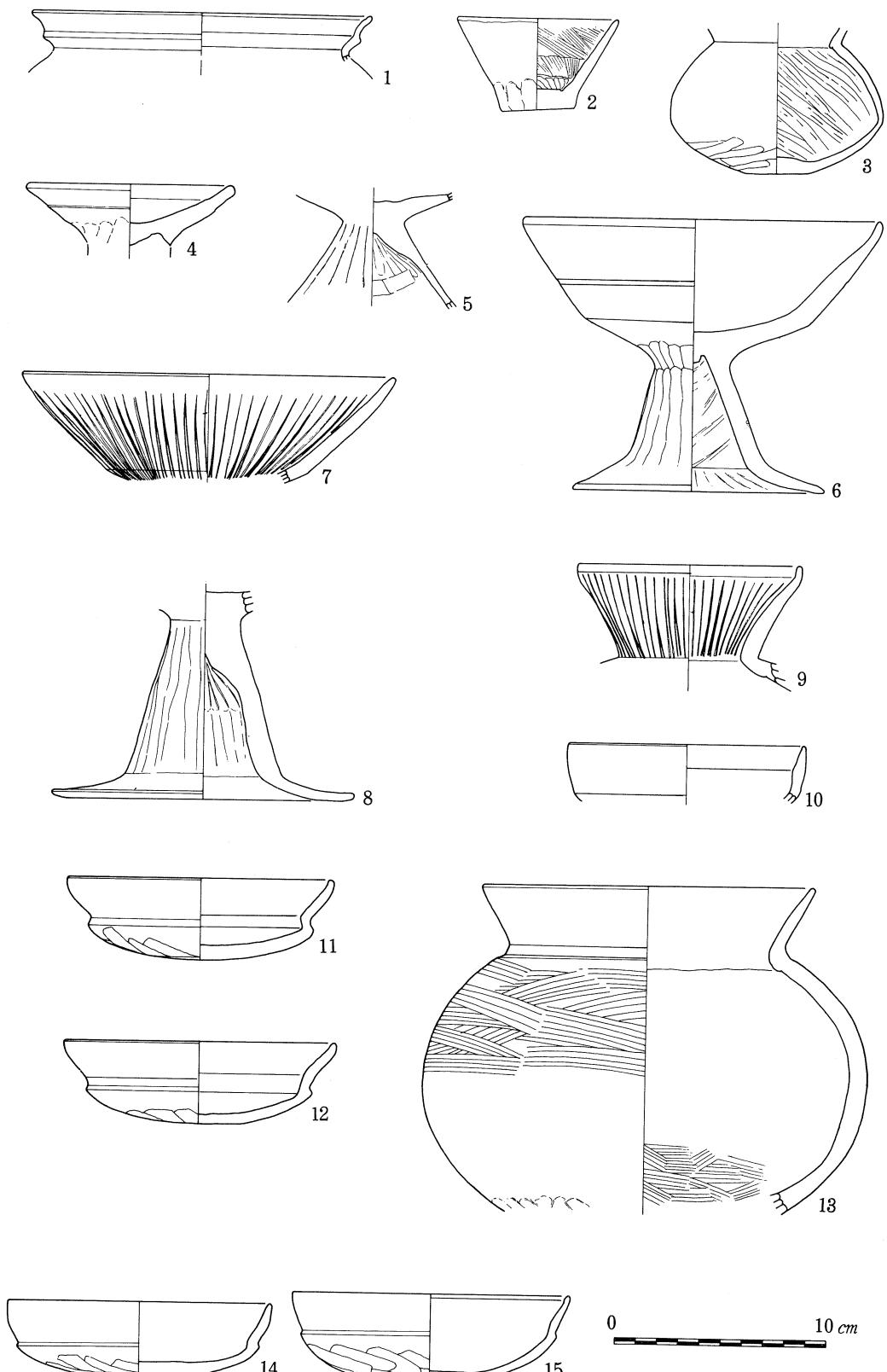
挿図番号	器形	法量(口径) (cm)底径	土器の観察	器形の特徴	調整			出土グリッド	備考
					外 面	内 面	底		
第5図 1	高坏	16.6 14.5 13.0	胎土 砂粒が多い 色調 赤褐色 焼成 良好	半球形状の坏部とラッパ状に開く脚部	坏部箇磨後放射状暗文、脚部箇削後箇磨	坏部箇磨後放 射状暗文、脚 部箇削痕、箇ナデ		44 G	
2	"	18.2 — —	胎土 精々されて いる 色調 灰褐色 焼成 良好	坏底部に段を有する	ヨコナデ、底 部に横位箇削	ヨコナデ		表採	
3	"	— — —	胎土 精々されて いる。 色調 明褐色 焼成 良好	脚部に孔をもつ (1孔)	箇削後箇ナデ	指頭搔痕、横 位櫛状箇ナデ		27 G 東拡	
4	"	— — 12.4	胎土 精々されて いる 色調 褐色 焼成 良好	長い脚と急激に開く 裾部	箇削後箇ナデ 裾部はヨコナ デ	指頭搔痕とヨ コナデ、ナデ			
5	"	— — —	胎土 精々されて いる 色調 明褐色 焼成 良好	長い脚のものと思わ れる	箇削後箇磨	指頭搔痕		21 G	
6	"	— — —	胎土 精々されて いる 色調 明褐色 焼成 良好	"	箇削後箇ナデ くびれ部は箇 磨	指頭搔痕		21 G	
7	"	— — —	胎土 精々されて いる 色調 明褐色 焼成 良好		箇ナデ、箇削	箇ナデ		11 G	
8	"	— — —	胎土 精々されて いる 色調 褐色坏部内 黒色 焼成 良好	実中の長い脚	箇削後箇ナデ	横位箇削と箇 磨			
9	甌	11.6 — —	胎土 精々されて いる 色調 茶褐色 焼成 良好		ヨコナデ、ナ デ	ヨコナデ後、 放射状暗文			



土器第6図 土器実測図

第6表 グリッド内出土土器一覧表

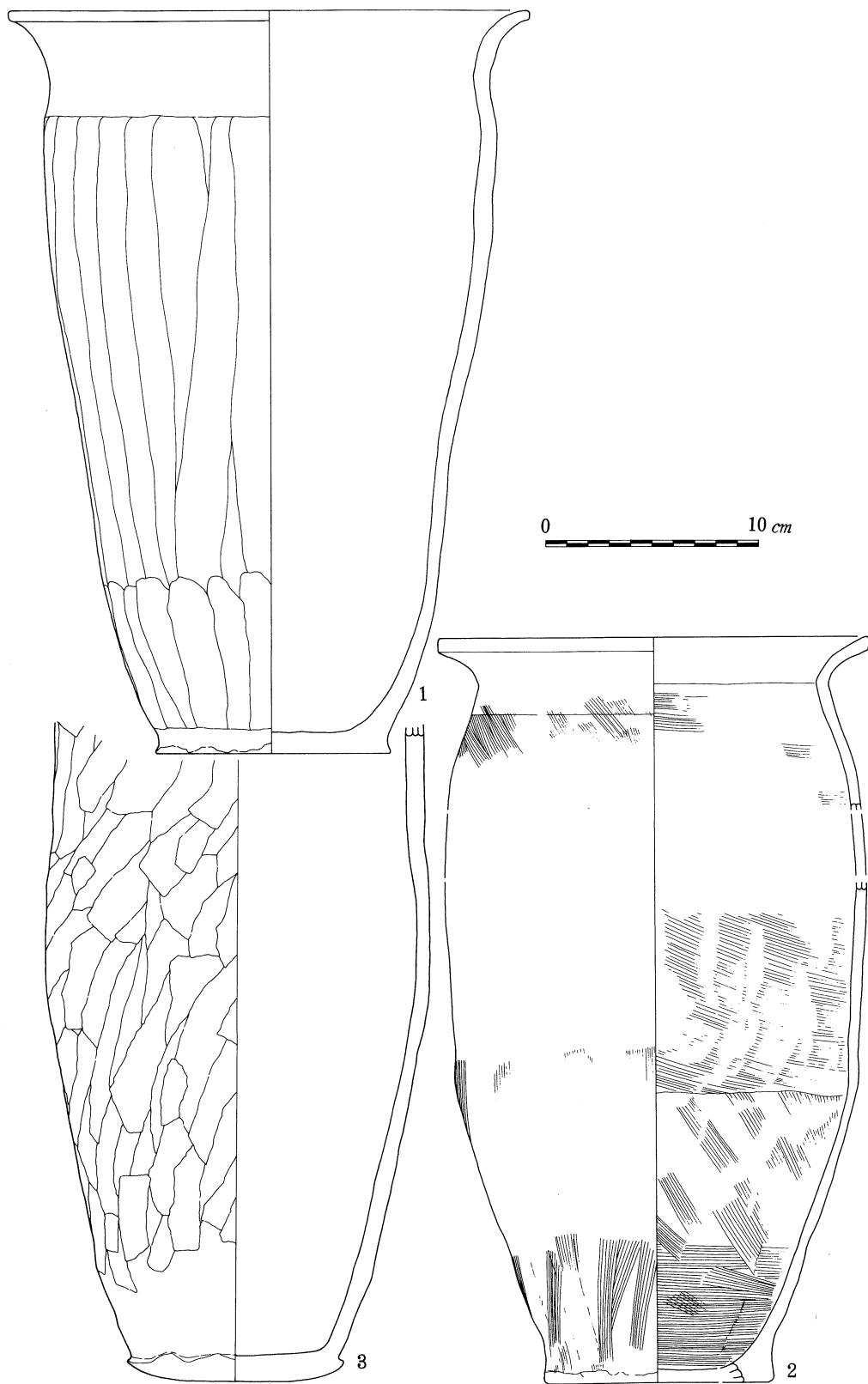
挿図番号	器形	法量(口径) (cm)底径	土器の観察	器形の特徴	調整			出土グリッド	備考
					外 面	内 面	底		
第6図 1	手捏	5.0 5.4 3.4	胎土 砂粒が多い 色調 黒褐色 焼成 良好		口縁部に指頭 押圧痕、箇ナ デ	口縁部に指頭 押圧痕、それ以 下に指頭搔痕	箇ナデ	26 G P 6	
2	手捏	6.7 4.5 3.8	胎土 精々 色調 褐色 焼成 良好		箇ナデ	指頭搔痕	箇ナデ		



土器第7図 土器実測図

第7表 グリッド内出土土器一覧表

挿番	図号	器形	法量(口径 (器高) (cm)底径)	土器の観察	器形の特徴	調整			出土グリッド	備考
						外 面	内 面	底		
第7図 1	甕	16.0 — —	胎土 砂粒、雲母を含む 暗褐色 良好	S字状口縁甕の口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ			30区	深さ(表土より) 3.5m出土
2	鉢	7.6 4.5 3.3	胎土 きめの細かい精々土 淡褐色 やや軟弱	台形状の鉢形を呈する	口縁部胴部中央へら磨き 胴部下半に不明瞭な指頭痕	斜位の櫛状ヘラナデ(2段)と指頭搔痕	ヘラナデ	"	"	
3	壺	— — 3.0	胎土 精々されている 黄褐色 良好	口縁部を欠く、小さな平底状である。やや偏平胴である。	胴部の中央付近より上半にヘラ磨き、胴部下半に横位のヘラケズリ	指頭による搔痕	ヘラナデ	"	"	
4	器台	9.8 — —	胎土 砂粒が多い 褐色 良好	器形から高坏でなく器台と思われる。脚部を欠く、坏部中央や上部に稜が認められる。	口縁部がヨコナデ 器体部下半がヘラケズリの後ヘラナデ	ヘラナデ			"	"
5	高坏	— — —	胎土 精々されている 褐色 良好	脚部が下方に大きく開く	坏部ヘラナデ 脚部指頭搔痕と横位ヘラケズリ	坏部 ヘラナデ 脚部指頭搔痕と横位ヘラケズリ		"	"	
6	"	17.0 12.9 11.9	胎土 小石を少量含む 赤褐色 良好	脚部の裾が大きく外方に開く	坏部ヘラ磨き 脚部縦位ヘラケズリ後位ヘラ磨 据部横位ヘラ磨	坏部ヘラ磨 脚部粗いヘラ磨		"	"	
7	"	17.2 — —	胎土 精々されている 褐色 良好	脚部の裾が大きく外方に開く	横位ヘラナデ 後に縦位の放状状暗文(笠磨)を施す	外面に同じ		"	"	
8	"	— — 14.2	胎土 精々されている 褐色 良好	脚部の裾が大きく外方に開く	縦位笠ケズリ 後縦位笠ナデ 裾部にヨコナデ	上部に切り取り押圧したしぱり痕あり、笠ナデ		"	深さ 3.0~3.5m	
9	壺	10.6 — —	胎土 精々されている 褐色 良好で硬い	胸部以下を欠く「く」字状を呈する	横位ヘラナデ 後に縦位の放射状暗文(笠磨)を施す	外面に同じ		"	"	
10	坏	11.2 — —	胎土 精々されている 黒褐色 良好	下半部を欠く、口縁が垂直に近く立上がる	ヨコナデと器体部下半に笠削	ヨコナデ		"	"	
11	"	12.6 3.9	胎土 精々されている 黒色 良好	器体部中央よりやや下方に稜をもつ。口唇部が内傾する。	器体部下半が斜位笠削他は横位笠磨 黒彩	横位笠磨 黒彩		"	深さ 3.2m	
12	"	12.8 3.9 —	胎土 精々されている 黒色 良好	同 上	同 上	同 上		"	"	
13	壺	15.6 — —	胎土 精々されていい黄褐色 内一灰褐色 良好	口縁部が直線状に立上る。胴部がやや偏平	口縁部ヨコナデ 胴部上半に横位櫛状笠ナデ、下半指頭押圧痕	口縁部ヨコナデ 胴部斜位の櫛状笠ナデ		"	外面に赤色顔料の塗布痕跡あり	
14	坏	12.4 3.5	胎土 精々されていい 黑色 良好	底が平底状を呈す。器体部中央やや下方に稜をもつ	底部笠削他は横位笠磨 黒彩	横位笠磨 黑彩	笠削	"	深さ 1.8m	
15	坏		胎土 精々されていい。 黑色 良好	"	"	"	"	"	"	



土器第8図 土器実測図

第8表 4号グリッド出土土器一覧表

番号	器形	法量(口径) (cm)×(底径)	土器の観察	器形の特徴	調整			出土グリッド	備考
					外一面	内一面	底		
第8図 1	甕	24.4 35.0 11.0	胎土 砂粒を多く含む 色調 外一茶褐色 焼成 内一暗褐色 良好	長胴を呈する。最大巾が口縁部にある。底部粘土折返し、ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、胴部2段 綫位箇削	ヘラナデ	木葉痕	4 G西 拡	カマド内出土と思われる。
2	"	10.5 (35.0) 10.8	胎土 砂粒、雲母が多い 色調 外一黒褐色 焼成 内一褐色 良好	長胴を呈する。 最大巾が口縁部にある。	綫位櫛状箇ナデ、胴部下位 は綫位箇削後に櫛状箇ナデ を施す。口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、胴部は横 位櫛状箇ナデ	"	"	"
3	"	- - 10.1	胎土 砂粒を多く含む 色調 黒褐色 焼成 良好	長胴を呈する。 口縁部を欠く。	斜位の荒い箇削	横位櫛状箇ナデ(不鮮明)	"	"	"

3類(第3図2) 半球形で丸底を呈する。口縁部は僅かに外反する。箇削後箇ナデされる。

4類(第3図3~6) 半球形で丸底を呈する。口縁部は外傾内弯する。また、口縁部と胴部の境あたりに稜をもっている。6は他のものに比べ丸味が強い。箇削後においていねいに箇磨が施される。3は内外赤彩、5は内外黒色土器である。

5類(第3図7) 2~4類同様球形胴を呈し、口縁部下方に稜を有する。ただ口縁部が逆に内傾するものである。箇削後箇磨が入念になされる。

6類(第3図8・9) 5類に似るが、5類より更に内傾が強い。なお9は8に比べ胴部が偏平である。箇削後箇磨がていねいに施されている。

坏

1類(第5図1・2) 底部から口唇部にむかいゆるやかに内弯しながら立ちあがり、口縁部に至って更に強く内弯する半球形を呈する。底は小さい平底状を呈する。内外面ともに箇磨がていねいに施される。

2類(第5図3・4) 底部より口唇部にむけてゆるやかに内弯しながら立ちあがる大きな口径の盤状の坏である。しかし口縁部は1類のように内弯しない。箇削後に入念な箇磨が施される。

3類(第5図5) 底部より口唇部にむかいゆるやかに内弯するものであるが、2類の様に盤状でなく、かつ内面黒色の坏である。箇削後に箇磨が施される。

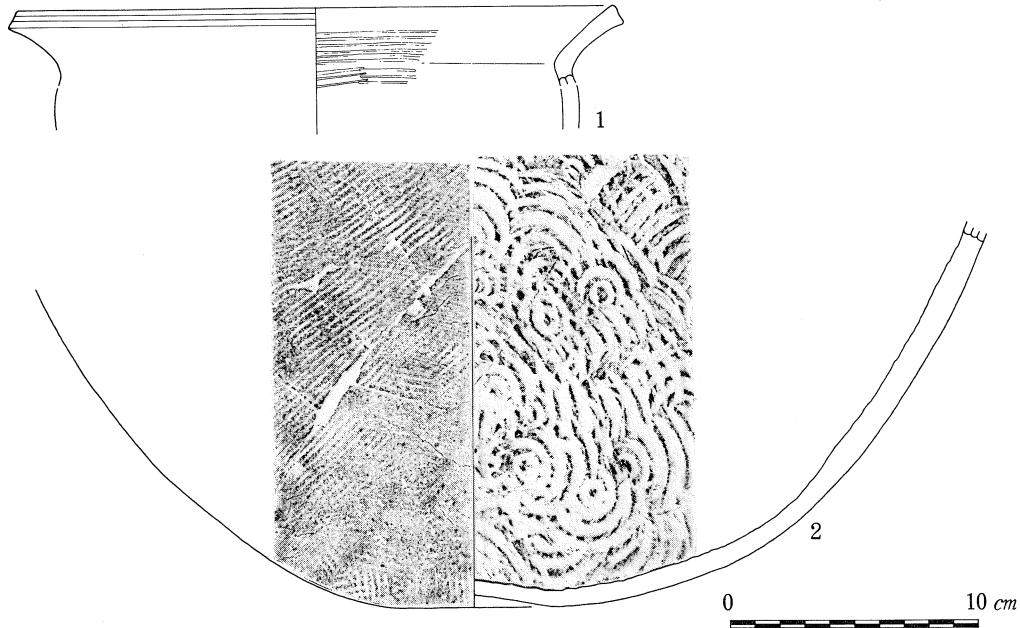
4類(第5図6・7) 底部から口唇部にかけてゆるやかに内弯し立上がり、口縁部に至り垂直ないし内弯気味に立上がる盤状の坏である。箇削後に箇磨または箇ナデを施す。

5類(第5図8・9) 口縁部と胴~底部との間に段ないし稜を有する部類の坏であるが、稜ないし段はそれ程明瞭ではない。口縁部はやや外反する長いものである。箇削後に箇磨がなされる。

6類(第5図10~12、第7図10) 口縁部と胴~底部との間に明瞭な稜が認められるもので、外反ないし内傾外反する長い口縁と比較的深い胴~底部を有す。箇削後に入念に箇磨が施される。

7類(第5図13~16) 6類に似るが、胴~底部が6類より浅い盤状のものである。箇削後に箇磨が施される。

8類(第5図17・19・20・22、第7図14・15) 7類同様稜をもつ盤状の坏であるが、口縁部が7類とは逆に内弯気味のものである。



土器第9図 土器実測図 (4号グリット内出土土器)

また底が平底状を呈するものが多い。箒削後に箒磨が施される。また第7図の14・15は内外黒色土器である。

9類 (第5図18・21・23・24、第7図11・12) 8類に類似するが、8類より口縁部が長く、かつ外反が強い。稜は箒削のものが多い。底部は7類同様に平底状のものと、丸底のものがある。箒削後に箒磨が施される。なお第7図11・12は内外黒色土器である。

器台 (第7図4)

器受部だけで、脚以下を欠く。器受部底部を箒削後に全面に箒ナデを施している。

高坏

1類 (第4図1) 坏部は擂鉢状を呈し、外面には段をもたず内弯するもの。脚部は上方より裾広がりに開き、裾部は水平である。坏部は箒磨後放射状暗文を施す。脚部は箒削後箒磨がていねいに行なわれる。

2類 (第4図2・4~6、第7図7~8) 坏底部の接合部に明瞭な段を有し、そこでいったん内屈してすぐ再び屈折して上方口辺に至り、更に僅かであるが口縁部が内屈する。脚部は中膨みで、裾部が長手で急激に外反する。坏部は底部が箒削された後箒磨を施す。更に第4図7のように放射状暗文を施す例がある。脚部は箒削後箒磨ないし箒ナデがなされる。

第9表 4号グリッド出土土器一覧表

捕団号	器形	法量/口径 (cm) 器高 底径	土器の観察	器形の特徴	調 整			出土グ リッド	備 考
					外 面	内 面	底		
第9図 1	甕	24.8 — —	胎土 小石を含む 色調 茶褐色 焼成 良好	胴部以下を欠く、長 胴の甕の口縁部と思 われる。	ヨコナデ	ヨコナデ横位 櫛状箒ナデ		4G西 拡	
2	須恵 器 甕	— — —	胎土 白色砂粒を 含む 色調 灰色 焼成 良好		交差平行多き	青海波文		"	

3類（第7図6） 2類に似るが、2類より坏部が深いものでかつ、脚も短かく上方より裾広がりに開くものである。坏底部より脚に箒削がなされ更に箒磨が施される。



土器第10図 土器実測図

第10表 グリッド内出土土器一覧表

捕番 図号	器形	法量 (口径 (cm) 器高 (底径))	土器の観察	器形の特徴	調整			出土グ リッド	備考
					外 面	内 面	底		
第10図 1	坏	14.8 — —	胎土 精々されて いる 色調 棕色 焼成 良好、硬い	両端に丸味をもつ大き な平底	ヨコナデ	ヨコナデ	手持回転箒 削	7G	

脚内面にヘソが見られる。

4類（第4図3） 中膨の脚と思われる。中央部に一孔が穿れている。坏部内面の平坦部が広い。箒削後箒ナデがなされる。

5類（第4図7） 脚部が実中（棒状）のものである。箒削後箒ナデをなす。坏部内面底部は黒色である。

6類（7図5） 薄手の作りで、坏部および脚部が裾広がりに開くものと思われる。箒削後に箒ナデがなされる。

手捏土器（第6図1・2） 小形のもので内面に指頭搔痕が明瞭に認められる。

須恵器（第9図2） 大甕の底部破片である。外面は平行タタキ目、内面が青海波文のタタキ整形である。

歴史時代の土器

皿

1類（第11図1・2） 玉縁状口縁の浅い盤状のものである。器体下半に斜位の手持箒削が施されている。

2類（第11図3～7） 1類同様に玉縁状口縁の浅い盤状のものであるが、内面中央部付近に「くびれ」が存在するものである。更に器体部下半はロクロ回転箒削である。底もロクロ回転箒削される。

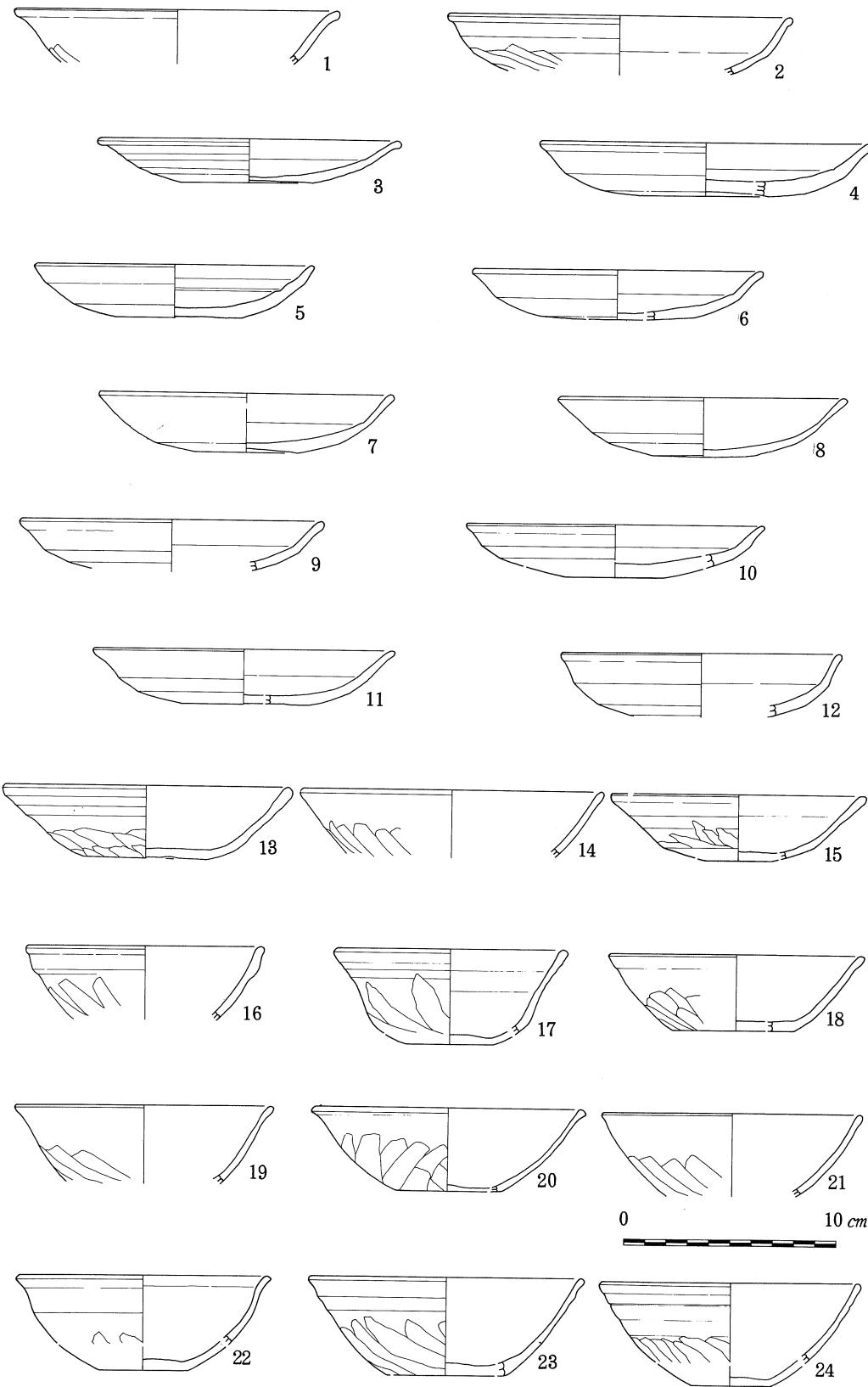
3類（第11図8～12） 2類の「くびれ」が見られないもので、他は2類に同じである。

4類（第15図1） 土師質の皿形土器である。玉縁の口縁部を形成する。ロクロ水引きで、底は回転糸切未調整である。また底部外周に近い部分に同心円状の溝が回っており、製作方法によるものと考えられる。

坏

1類（第10図） 底径が口径に近い大きな平底の坏である。底の端は角張っている。口縁は直線的に外方に開くが、僅かに内反も見られる。口唇部は尖形をとる。底部には手持箒削が認められる。

2類（第11図13～15） 玉縁状口縁のやや偏平な坏の一群である。器体下半部に斜位の手持箒削がなされる。底は18が糸切後回転箒削される。



土器第11図 土器実測図

第11表 グリッド内出土土器一覧表

捕 番 号	器 形	法量(口径 (cm)×底径) 器高 (cm)	土器の観察	器 形 の 特 徴	調 整			出土グ リッド	備 考
					外 面	内 面	底		
第11図 1	皿	15.2 — —	胎土 精々されている 色調 明褐色 焼成 良好	口縁部玉縁	口縁部ロクロ 水引、器体下 半斜位箠削	ロクロ水引		表採	
2	"	16.2 — —	胎土 精々されている 色調 外－明褐色 内－赤褐色 焼成 良好	"	"	"		27 G 西拡	
3	"	14.4 2.1 6.2	胎土 精々されている 色調 黒褐色 焼成 良好	口縁部玉縁、内面中 央付近に明瞭なくび れ	口縁部ロクロ 水引器体下半 横位回転箠削	" 同心円状暗文	箠削(糸切 痕は分らない)		
4	"	15.6 2.5 6.0	胎土 精々されている 色調 極色 焼成 良好	"	"	ロクロ水引	ロクロ回転 箠削	25 26 G	
5	"	13.2 2.5 6.0	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部玉縁、内面中 央部付近に明瞭なく びれ	"	"	箠削	26 G	
6	"	18.6 2.4 7.0	胎土 精々されている 色調 極色 焼成 良好	口縁部玉縁、内面中 央部付近に明瞭なく びれ	口縁部ロクロ 水引、箠ナデ	" 同心円状暗文	手持回転箠 削	27 G	
7	"	13.9 2.8 4.8	胎土 精々されている 色調 極色 焼成 良好	"	口縁部ロクロ 水引、器体下 半横位回転箠 削	"	ロクロ回転 箠削「一」 の線刻	27 G	
8	"	18.6 2.8 4.8	胎土 精々されている 色調 極色 焼成 良好	口縁部玉縁、内面中 央部付近のくびれは 不鮮明	"	"	ロクロ回転 箠削		
9	"	14.8 — —	胎土 精々されている 色調 明褐色 焼成 良好	"	"	ロクロ水引		25 G	
10	"	14.0 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	"	"	"		26 G	
11	"	14.2 2.6 6.0	胎土 精々されている 色調 明灰色 焼成 良好	"	"	"	ロクロ回転 箠削	27 G	
12	"	13.2 — —	胎土 砂粒を含む 色調 外－赤褐色 内－明褐色 焼成 良好	"	"	"		28 G 西拡	
13	坏	13.6 3.5 5.8	胎土 砂粒を少量 含む 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部玉縁	口縁部ロクロ 水引、器体下 半斜位手持箠 削	ロクロ水引	糸切後に回 転箠削	A	
14	"	14.2 — —	胎土 精々されている 色調 外－明褐色 内－赤褐色 焼成 良好	"	"	"		28 G	
15	"	12.0 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	"	口縁部ロクロ 水引、器体下 半は斜位箠削 後底に近い方 を回転箠削	"		6 G	
16	"	11.2 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	"	口縁部ロクロ 水引器体下半 斜位手持箠削	"		10 G	
17	"	11.2 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	"	"	"		5 G	

插番	図号	器形	法量(口径 (器高) (cm)底径)	土器の観察	器形の特徴	調整			出土グリッド	備考
						外 面	内 面	底		
18	"	12.0 3.6 5.7	胎土 砂粒を少量含む 色調 明褐色 焼成 良好	口縁部玉縁	口縁部ロクロ 水引器体下半斜位手持箇削	ロクロ水引	箇削	25 G		
19	"	12.0 — —	胎土 砂粒を少量含む 色調 明褐色 焼成 良好	"	"	"		29 G		
20	"	12.8 3.9 5.2	胎土 精々されている 色調 褐色 焼成 良好	"	"	"	"			
21	"	12.2 — —	胎土 砂粒を少量含む 色調 明褐色 焼成 良好	"	"	"		25 G 西拡		
22	"	12.0 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	"	"	"		8 G 拡		
23	"	13.0 4.7 5.5	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	"	"	"		26 G 西拡		
24	"	12.4 — —	胎土 砂粒を少量含む 色調 外一赤褐色 内一淡褐色 焼成 軟弱	"	"	"		26 G		

3類(第11図16～24、第12図1、2) 玉縁状口縁のもので、2類より深い形態である。器体下半に斜位箇削がなされる。底は箇削であるが、回転か手持か区別できない。

4類(第12図3～6) 丸縁状口縁を呈すものである。また底径も幾分大きいように見うけられる。器体部下半に斜位箇削がなされる。底は箇削のものと回転糸切未調整のものとがある。

5類(第12図7～10) 玉縁状口縁を呈するもので、底は口径に比べて小さい。器体下半に斜位箇削、内面に放射状暗文が施される。底は糸切後全面を手持箇削ないし箇磨している。

6類(第12図11～12) 丸縁状口縁部のもので、底径も幾分大きいものである。器体下半に斜位箇削、内面に放射状暗文がなされる。底は回転糸切後その周辺ないし全面を手持箇削する。

7類(第12図13) 玉縁状の口縁で、底が僅かに台状を呈する。器体部は箇削は認められずロクロ水引痕が存在する。底は回転糸切未調整である。

8類(第13図1) 高台付坏である。高台部は削出しによるものである。

鉢

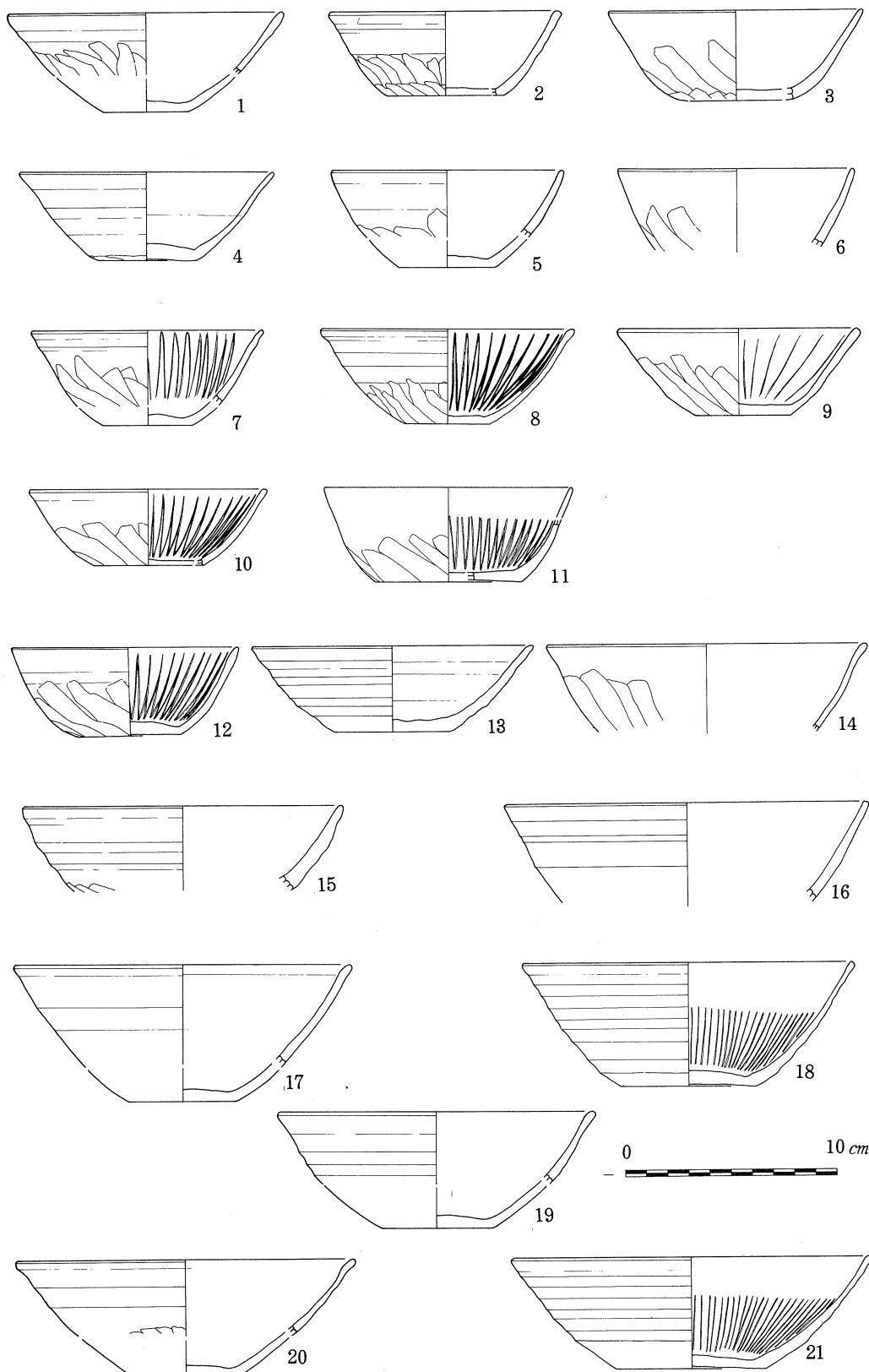
1類(第12図14～15) 玉縁状口縁をなし、器体下半に斜位箇削がなされている。

2類(第12図17) 玉縁状口縁をなし、器体下半に斜位箇削は見られない。

3類(第12図16、19) 口縁は玉縁ないし丸縁を呈するが、器体下半はロクロ回転箇削される。内面黒色土器である。

4類(第12図20) 玉縁口縁で器体部下半には斜位の箇削が見られる。内面黒色土器である。

5類(第12図18～19) 玉縁状口縁を呈し、器体部下半はロクロ回転箇削される。内面は放射状暗文が施される黒色土器である。



土器第12図 土 器 実 測 図

第12表 グリッド内出土土器一覧表

插番 図号	器形	法量(口径 (器高) (cm)×底径)	土器の観察	器形の特徴	調整			出土グ リッド	備考
					外 面	内 面	底		
第12図 1	壺	13.0 — —	胎土 砂粒を少量 含む 色調 赤褐色 焼成 軟弱	口縁部玉縁	口縁部・ロク 口引器体下 半に斜位箇削	ロクロ水引		26 G	
2	"	11.0 4.0 5.4	胎土 砂粒を少量 含む 色調 赤褐色 焼成 良好	"	"	"	箇削	5 G	
3	"	12.0 (4.4) 5.2	胎土 砂粒を少量 含む 色調 外一赤褐色 内一淡褐色 焼成 軟弱	口縁部丸縁	"	"	箇削	25 G	
4	"	12.0 4.2 4.5	胎土 砂粒を少量 含む 色調 淡褐色 焼成 軟弱	"	"	"	回転糸切未 調整	26 G	
5	"	11.0 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	"	"	"		26 G 西拡	
6	"	11.2 — —	胎土 砂粒が多い 色調 外一茶褐色 内一灰褐色 焼成 良好	"	"	"		28 G 西拡	
7	"	11.0 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部玉縁	"	ロクロ水引後 花弁状暗文		6~10 G表	
8	"	12.0 4.5 4.0	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	"	"	"	糸切後箇磨	26 G 西P ₃	
9	"	11.4 4.2 4.4	胎土 砂粒を少量 含む 色調 赤褐色 焼成 良好	"	"	"	全面手持箇 削	26 G P ₁₂	
10	"	11.2 3.6 5.2	胎土 精々されている 色調 褐色 焼成 良好	"	"	"	箇削	27 G	
11	"	— — 7.0	胎土 精々されている 色調 茶褐色 焼成 良好		"	"	回転糸切後 周辺を手持 箇削	5 G拡	
12	"	10.7 4.2 4.9	胎土 精々されている 色調 褐色 焼成 良好	口縁部尖縁	"	"	回転糸切後 全面を手持 回転箇削	28 G 西拡P ₇	
13	"	18.2 4.1 5.4	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 軟弱	口縁部丸縁、底が台 状に近い	ロクロ水引	"	回転糸切未 調整	28 G P ₂	
14	"	15.2 — —	胎土 砂粒を少量 含む 色調 灰褐色 焼成 良好	口縁部玉縁	口縁部ロクロ 水引器体下半 斜位箇削	"		29 G	鉢とも考えら れる。
15	"	15.2 — —	胎土 精々されている 色調 褐色 焼成 良好	"	"	"			やや器肉が厚 い
16	"	17.2 — —	胎土 精々されている 色調 外一褐色 内一黒色 焼成 良好	口縁部丸縁	口縁部ロクロ 水引器体下半 横位回転箇削	"		11 G	
17	"	16.0 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部玉縁	ロクロ水引	"		33 G	

捕番 図号	器形	法量 (口径 (器高 (cm) 底径)	土器の観察	器形の特徴	調整			出土グリッド	備考
					外 面	内 面	底		
18	"	15.6 5.9 6.4	胎土 精々されている 色調 外一赤褐色 内一黒色 焼成 良好	口縁玉縁	ロクロ水引 器体下半横位 回転箇削	放射状暗文	糸切後回転 箇削	28 G	
19	"	15.0 — —	胎土 精々されている 色調 外一赤褐色 内一黒色 焼成 良好	"	ロクロ水引	ロクロ水引		26 G	
20	"	16.0 — —	胎土 精々されている 色調 外一赤褐色 内一黒色 焼成 良好	"	口縁部ロクロ 水引 器体下 半に箇削	"		9 G	内面に不鮮明 であるが、暗 文あり
21	"	17.0 5.3 7.0	胎土 精々されている 色調 外一赤褐色 内一黒色 焼成 良好	"	口縁部ロクロ 水引器体下半 に横位回転箇 削	放射状暗文	糸切後、回 転箇削	26 G P4	

坏蓋

1類（第13図2～12） 擬宝珠のつまみのもので、口縁が嘴状を呈する。天井部に近い部分に回転箇削が見られ、それ以下は箇ナデとなる。

2類（第13図13） 口縁が長い嘴状を呈しつつ厚手のものである。

3類（第13図14） 口縁部の嘴状がほとんど見られない類である。

甕

1類（第8図1・3） 最大径が口縁部にある長胴形の甕である。胴部は僅かに認められる肩部からゆるやかにかつ直線的に収縮し底に至る。口辺部は、長い頸部を経た後に外反する。外面は箇削整形痕が明瞭に残る。内面は箇ナデ、底は木葉痕である。

2類（第8図2、第9図1） 8類同様に長胴形の甕である。最大径は口縁部にあるものと思われる。器肉が薄く箇削整形された後に箇ナデ調整が施されている。

その他（第2図8～10） 甕あるいは壺の底で木葉底である。

3類（第13図15） 小形の甕である。内外面とも櫛状箇ナデが顕著に見られる。

4類（第13図16～17） 肥厚した口縁部のものである。櫛状箇ナデが内外共に顕著に見られる。

5類（第13図16～17） 外反の強い薄手でかつ長手の口縁部である。

その他（第13図19～20） 櫛状箇ナデが顕著に見られる甕の底部である。木葉底である。

羽釜（第14図1） 羽釜の口縁部破片である。口唇部は内屈している。内外面に櫛状箇ナデが顕著である。

陶器類

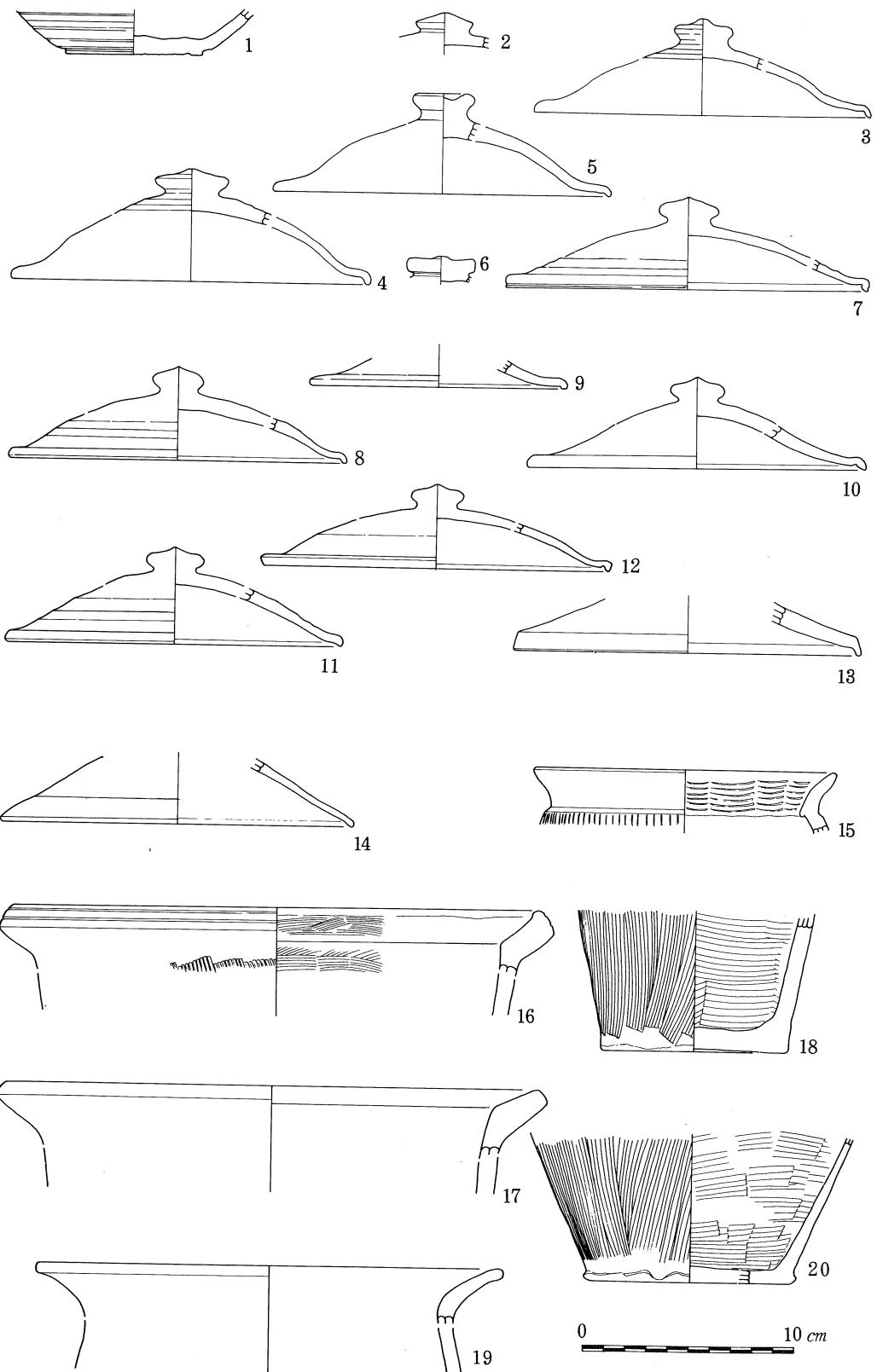
須恵器の坏（第14図2） 坏蓋（第14図3）、長頸壺（第14図6）がある。

灰釉陶器は破片が15片得られたが、図上復元できたのはわずか1点である（第14図4）。また縁釉陶器片も5点ほど得られたが図上復元さえもできない細片であった。

磁器として青磁の底部片（第14図5）が出土した。

(3)

弥生式土器として第1図1の甕があげられる。櫛描波状文等を施文した特徴ある土器で、長野県下の箱清水式土器の系統に属するもので、弥生時代後期後半頃に置かれるであろう。この手の土器は古くは北巨摩郡高根町、宮地遺跡その他などから少量発見されていたが、近年に至り、東八代郡一宮町・田村（1）



土器第13図 土器実測図

第13表 グリッド内出土土器一覧表

插番 図号	器形	法量/口径 (器高) (cm)・底径	土器の觀察	器形の特徴	調 整			出土グ リッド	備 考
					外 面	内 面	底		
第13図 1	坏	— — 6.5	胎土 砂粒を多量に含む 色調 外一赤褐色 内一淡褐色 焼成 やや軟弱	高台付	ロクロ回転箆削	ロクロ水引	ロクロ回転 箆削出し高台	26 G	
2	坏蓋	— — —	胎土 精々されている 色調 明灰色 焼成 良好	擬宝珠形	ロクロ水引	ナデ		25 G	
3	"	— — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	"	"	"		2 G	
4	"	— — —	胎土 精々されている 色調 暗褐色 焼成 良好	"	つまみ部ナデ 坏のつまみ部 との接続付近 箆削、その他 ロクロ水引	ナデ		28 G	
5	"	— — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	上部に浅い沈線	ナデ	ナデ		26 G	
6	"	— — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	擬宝珠形	ナデ	ナデ		27 G	
7	"	17.0 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	口唇部外面に浅い沈 線	ロクロ水引	ロクロ水引		8 G 拡	
8	"	16.0 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好		ロクロ水引、 上半はロクロ 回転箆削	"		26 G	
9	"	12.2 — —	胎土 精々されている 色調 明褐色 焼成 良好		ロクロ水引	"		12 G	
10	"	16.0 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好		"	"		26 G	
11	"	16.0 — —	胎土 砂粒が多い 色調 暗褐色 焼成 良好		ロクロ水引、 上半はロクロ 回転箆削	"		26 G	
12	"	16.6 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好		"	"		28 G	
13	"	16.4 — —	胎土 精々されている 色調 褐色 焼成 良好		ロクロ水引	"		27 G	
14	"	16.6 — —	胎土 精々されている 色調 褐色 焼成 良好			"		27 G 東拡	
15	甕	14.3 — —	胎土 砂粒が多い 色調 赤褐色 焼成 良好	小形の甕と思われる	口縁部ヨコナ デ、胴部縦位 櫛状箆ナデ	口縁部横位櫛 状箆ナデ、胴 部箆ナデ		29 G	
16	"	26.2 — —	胎土 砂粒、金雲 母が多い 色調 赤褐色 焼成 良好	肥厚した短い口縁	口縁部ヨコナ デ胴部縦位櫛 状箆ナデ	横位櫛状箆ナ デ、箆ナデ		6 G	
17	"	26.0 — —	胎土 砂粒が多い 色調 赤褐色 焼成 良好	"	ヨコナデ	ヨコナデ		9 G	
18	"	22.0 — —	胎土 精々されている 色調 淡褐色 焼成 良好		ヨコナデ	ヨコナデ		10 G	

捕番 図号	器形	法量/口径 (器高) (cm) 底径	土器の観察	器形の特徴	調整			出土グリッド	備考
					外 面	内 面	底		
19	甕	— — 8.8	胎土 砂粒、雲母を含む 色調 茶褐色 焼成 良好		縦位櫛状竪ナ デ	横位櫛状竪ナ デ	木葉痕	3 G 東拡	
20	"	— — 10.0	胎土 砂粒を多量に含む 色調 黒褐色 焼成 良好		"	"	木葉痕	27 G	

遺跡、更に中巨摩郡敷島町・金の尾遺跡などの発掘調査によって確認されている。特に金の尾遺跡に於いては多数の住居址に伴って多量の土器が出土しており、セットとして良好な資料が得られている。この様に本県に於いて箱清水式土器系統の文化の強い浸透性が指摘できるようである。

古墳時代の土器のうち、壺1・2類、甕1・2類、鉢1類、塊1類、高坏6類、器台、塙などが古墳時代前期の南関東地方編年の五領期の土器に比定されるものであろう。近年山梨県下に於いてもこの時期の集落址の調査が活発になされ、北巨摩郡長坂町・柳坪遺跡(A地区)、東八代郡境川村・京原遺跡塩山市・西田遺跡(第1次、第2次)などから豊富な資料が得られている。特に西田遺跡に於いては、⁽⁴⁾61軒にのぼる五領期の住居址が発見されるところとなり、編年等の確立が待たれるところである。

さて、本遺跡より出土した五領期に比定される土器のうち、甕2類、鉢1類、器台、高坏などは前記諸遺跡から例外なく発見されているものである。しかし壺1類、甕1類、塊1類などについては類例が乏しく、西田遺跡を除いては確認されていない。壺1類は、西田遺跡のものはボタン状貼付文の下方に小刻みの波状文などが施されている。甕1類は、西田遺跡に於いて比較的豊富に得られているが、その伴出関係については現在分析中であり報告書にまたなければならないが、本遺跡の第30区に於いて地表下3.5m付近で甕2類(S字状口縁甕)と伴出しており、その関係について漠然ながら推定できよう。塊1類も西田遺跡において類似品が少量確認されているが、西田遺跡のものは爪の先を押あてて文様を施しているものである。

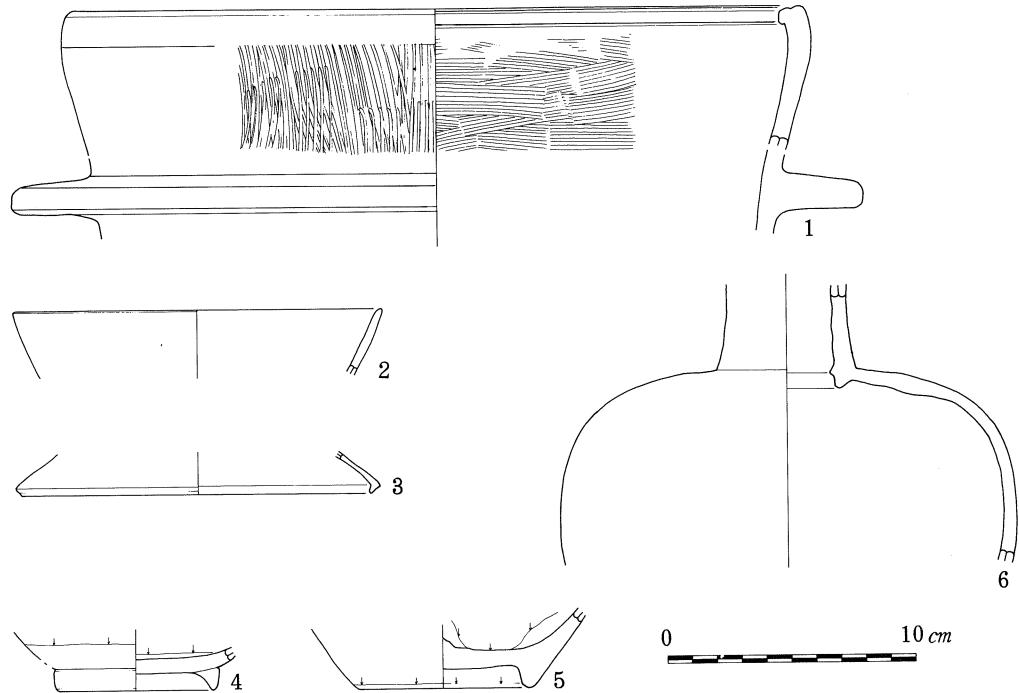
甲府市内では、伊勢町遺跡、甲府工業校庭遺跡などに於いて甕2類は確認されているが、壺1類、甕1類、塊1類は見られない。⁽⁷⁾湯田町遺跡に於いて甕1類に類似する台付甕が発見されたが、伴出品には甕2類は見られない。かつ、西田遺跡に於いては見られない壺形土器などが一緒に発見されており、遺跡の様相の違いが看取されよう。

壺3・4類、甕3類、鉢3類、塊2、3類、高坏1~5類などは南関東地方編年の和泉期に比定されるものであろう。

本県において和泉期に比定される遺跡の組織的調査は皆無に近く、本県土師器研究の空白ともいえる時期である。東八代郡石和町・赤井遺跡、同郡御坂町成田地内、中巨摩郡甲西町・江原遺跡、甲府市の例としては、塩部遺跡(旧マイボール付近)、⁽⁹⁾伊勢町遺跡などが知られる。このうち高坏については赤井遺跡、御坂町成田地内、江原遺跡などに類似品が見られ、壺3・4類、甕3類、鉢3類と共に和泉期に比定される土器と考えても大過ないであろう。

しかし、2・3類については、次の鬼高窓の土器の範疇にも類似品が見られるものであり、明確な区別は難しいところである。

甕4~7類、鉢2類、塊4~6、坏2~9類、直口壺、須恵器大甕などは、南関東地方編年の鬼高窓に比定される土器と考えられるものである。本県に於ける鬼高窓の土器編年が末木健氏によつてなされ
⁽¹³⁾



土器第14図 土 器 実 測 図

更にその後、御坂町郷土遺跡の調査が行なわれるなど、比較的資料にめぐまれている。しかし、甲府市内に於いては良好な遺跡は確認されていない。末木氏編年等に従って分類すると、壺1・6類及び直口壺が鬼高I期前半、甕4類がI期後半～II期前葉、甕6類がII期中葉以降、壺5・7・8類がI期前葉以降～II期中葉以降に比定されよう。更に郷土遺跡出土品はII期中葉以降の小池区土取場遺跡以降に編年の位置を与えるのが妥当と考えられるもので、壺2・3・4・9類などが該当しよう。

第14表 グリッド内出土土器一覧表

捕 番 号	器 形	法量(口径 (cm) 器高 (cm) 底径 (cm))	土器の観察	器 形 の 特 徴	調 整			出土グ リッド	備 考
					外 面	内 面	底		
第14図 1	羽釜	30.2 — —	胎土 砂粒が多い 色調 外一暗褐色 内一黒色 焼成 良好		ヨコナデ及び 縦位櫛状窓ナ デ	ヨコナデ、横 位櫛状窓ナデ		21 G	
2	須恵 器壺	14.8 — —	胎土 色調 黒灰色 焼成 良好	口縁部が尖線	ロクロ水引	ロクロ水引		10 G	
3	〃 壺蓋	14.6 — —	胎土 色調 黒灰色 焼成 良好		"	"		26 G	
4	長頸 壺	— — —	胎土 砂粒を少量 含む 色調 灰白色 焼成 良好					6 G	外面に自然釉 付着
5	灰釉 陶器皿	— — 6.2	胎土 きめが荒く やや粗 色調 焼成 良好	高台付	ロクロ水引	ロクロ水引	窓ナデ		内外面に灰釉
6	青磁 壺	— — 6.8	胎土 白陶質 色調 うぐいす色 焼成					15 G 東拡 P 8	

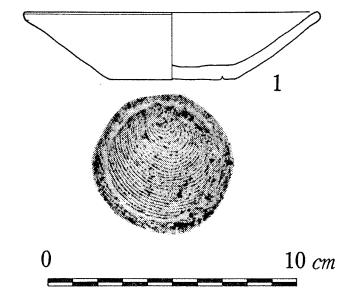
壺4～6類については、明確な資料が確認されていないが、東八代郡境川村・蘇在家遺跡に於いて壺4類の類似品が出土している。⁽¹⁵⁾ 蘇在家遺跡の土器群は、小地区共同土取場遺跡に近いものであり、壺4類もその付近に置かれるものであろう。壺5～6類の器形が、明確にされたのは今回の調査が初めてのものであろう。この器形は本遺跡のある校庭に昭和45年に下水管布設工事の際に発見された土器の中にも数多く認められているものであり、特徴的存在のものと考えられる。しかしその編年的位置は今後にまたなればならないし、その分布についても同様なことがいえよう。

鬼高窓の土器について見てきたが、特に甕について盆地西部と東部との間に少差であるが様相の差位が観取されるところであり、東部地域の編年が必要と思われる。

歴史時代の土器としては、南関東地方編年の真間期および国分期の土器などが確認されている。

甕1、2類、壺1類は、真間期に比定される土器と考えられる。壺1類は大きな平底であり、底の両端が角ばるもので、本県土師器編年に於ける晩期I～3式に刻当するものと考えられるものである。⁽¹⁶⁾

皿1～3類、壺2～8類、鉢1～5類、蓋1～3類、甕3～5類、羽釜は、いずれも国分期に比定



土器第15図 土器実測図

第15表 グリッド内出土土器一覧表

插番 図号	器形	法量(口径 (cm)× 器高 (cm)× 底径 (cm))	土器の観察	器形の特徴	調整			出土グ リッド	備考
					外 面	内 面	底		
第15図 1	土師 質 皿	11.9 2.8 5.0	胎土 砂粒を多く含む 色調 淡褐色 焼成 良好	口縁が玉縁に近い	ロクロ水引	ロクロ水引	回転糸切未 調整	9 G西	底は円柱より出たものと考えられる。

されるものと考えられる。本県土師器編年にあてはめると、皿2・3類が晩期II 3～4式、皿1類が晩期II 4式、壺4・6類が晩期II 3式、壺2・3・4類が晩期II 4式、壺7類が晩期II 5式、鉢及び壺蓋は晩期II 3～5式、甕5類が晩期II 3式、甕4類が晩期II 5式、羽釜が晩期II 5式に比定できるものと考えられるが、組合せ等が不明であり決定的なものとはいえない。しかし、いずれにせよ晩期II 3～5式の間に比定されるものが、その大部分を占めていることは事実であろう。

本時期の土師器に伴うものとして縁釉陶器、灰釉陶器などが出土している。縁釉陶器は胎土の硬い篠岡窯系統のものと、胎土が軟弱な鳴海窯系統のものが見られる。灰釉陶器類は永田古窯址製品と考えられる破片が少量認められるが、その多くは黒笛90窯製品と考えられるものが占めてるようである。

土師質土器の成形について

皿4類は、土師質土器であり、底は糸切未調整のものである。土師質土器は晩期II 5式頃より土師器に伴って出現することが確認されているが、本類は形態からすれば、晩期II 6式以降に位置づけられるものと思われる。

特に本類の成形は、これまでの本県における土師器の中においてこれまで確認されていない注目すべきものである。それは、底の内側5m/m前後に1周する凹が円形に回るものであることと、この凹の内側と外側に見られる回転糸切痕が同時のものでかつ同一軌跡をもつものであることから、今までの粘土塊引出し成形では説明のつかないものであり、おそらく1周する凹が円形に回るところから、底は円

形の別作りのものに坏部が付けられたものと思われる。この様な成形は服部敬史、福田健司氏によって最近確認され提唱されている「底部円柱づくり」といわれる製作工程に見られるものであろう。両氏の工程は、まず粘土塊からロクロ回転により底部の円柱をつくり、この円柱に別に用意した粘土紐を接合しロクロにて巻きあげ、更にロクロ回転を利用して、整形、調整し、最後に糸にて底部を切り離し、製品が完成するものである。この工程からすれば、本類の底に見られる1周する凹はまさに円柱の痕跡であり、内面は整形および調整により円柱の痕跡が見られない平滑な仕上げであることが、「底部円柱づくり」とすることを妥当としよう。また同氏等は「円柱づくり」がどの辺まで逆のぼり得るのか検討されているが、本県に於いても同様に本類の土器より更に逆のぼる晩期II-3式頃の坏底部が円形に剥落するものが見られ、あるいは、この時期頃まで起源が逆のぼる可能性が考えられる。

(4) 第12区出土土器

第3図10の直口壺、第4図2・12の坏(坏1・6類)は、直口壺を最下段に坏1類、坏6類の順序に重ねた状態で発見された一括資料である。坏1・6類は、南関東地方編年の鬼高式期に比定される土器であり、しかも古手の時期に置かれるものであることは先に述べたとおりである。

(5) 第30区出土土器

本区は、第30区グリッドに接して東側に掘られた工事用の溝であるが、地表下3.5mまで掘りさげられており、かつ幾つかの文化層が確認されるなど、文化層と環境の関連を知ることができるものであろうし更に、甲府市内に於ける今後の遺跡調査に貴重なデーターを与えてくれよう。本区は地表下3.5mで五領式期に比定される土器(第7図1~5)と和泉式期に比定される土器(第7図6~10)が出土している。地表下3.2m~3mで鬼高式期に比定される土器(第7図11~13)が出土している。地表下約1.8mでやはり鬼高式期に比定される土器(第7図14~15)が出土している。地表下約0.8mで国分式期に比定される土器が出土しているが、細片のため図示していない。

本区の鬼高式期に比定される土器は、下層より坏9類、砂層と腐食土層の互層を経て上層に坏8類が認められ、仮に順序の逆転なく堆積したものとすれば、坏9類 坏8類の新旧関係が指摘できる。坏8類は、本県土師式土器編年の晩期I-1式(真間式期の古手)に位置づけられているにも稜が認められ(18)その連續性が認められ、新旧関係が妥当性を持つところとなる。しかし、郷土遺跡出土土器の中には坏9類の類似品は見られるものの、坏8類は認めることができなく、現在までのところ住居址出土品に於いては連續性が確認されるまでには至っていない。そして、鬼高式期の終末についてはそれ程明確にされていないのが現状であり、次の第4区出土甕に伴う坏類の形態の確認が待たれるところである。

(6) 第4区出土土器

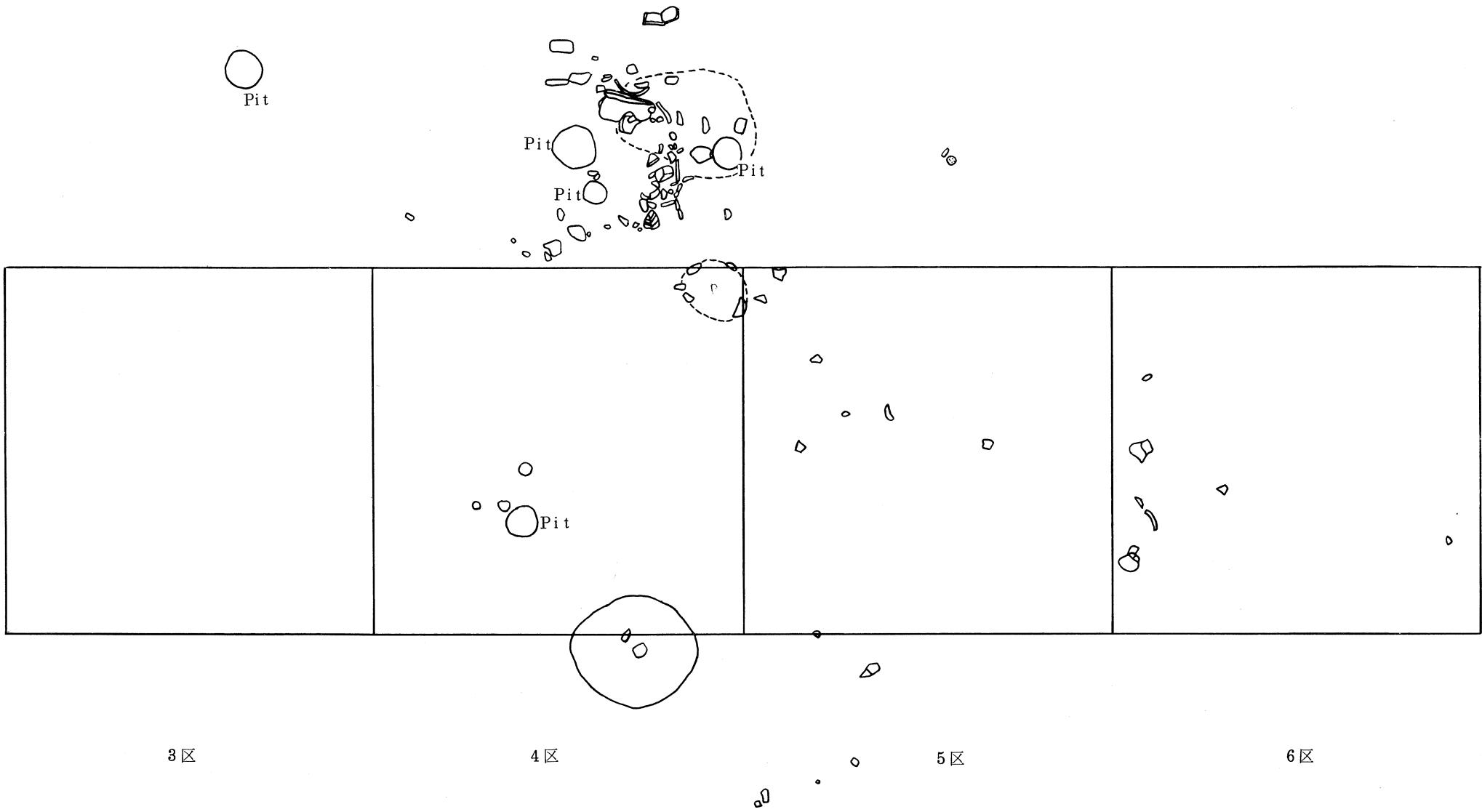
第8、9図は、第4区の焼土付近から一括して発見された土器群である。南関東地方編年の真間式期に比定されるものであろう。甕8・9類はいずれも長胴形の長甕であり、最大径も口縁部に認められるものである。坏については、残念ながら確認されていない。長胴の甕8・9は郷土遺跡より更に下降するものと考えられ、過去の編年において晩期I-1式以前に更に刻当する形式の存在を指摘しておいたが、本区出土の甕は晩期I-1式とした甕類にも類似点が見られることなどから、晩期I-1式以前に置かれる可能性の強いもので、かつ鬼高式期終末との関係について伴出する坏と共に資料の増加が待た

れるものである。

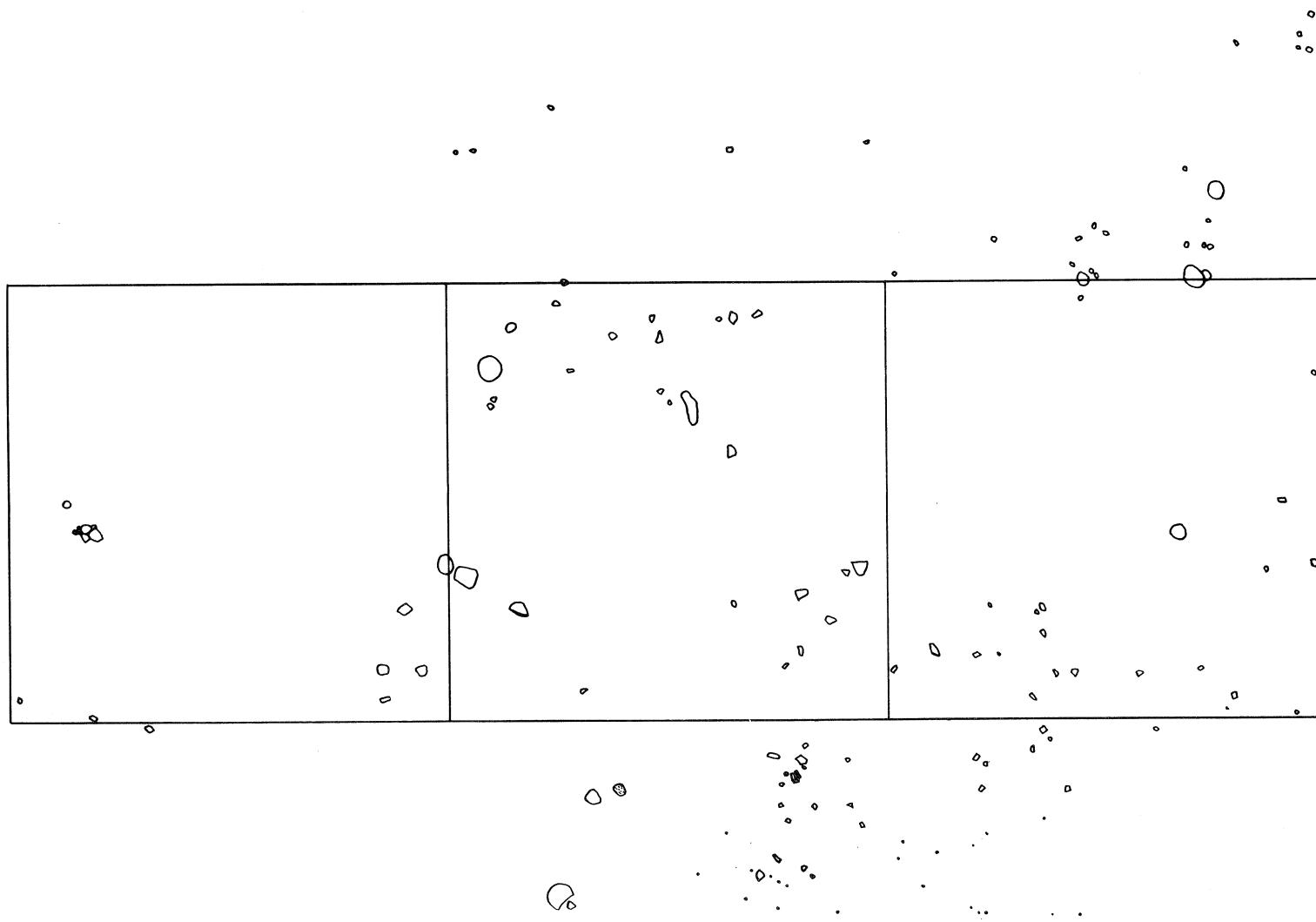
(坂 本 美 夫)

註

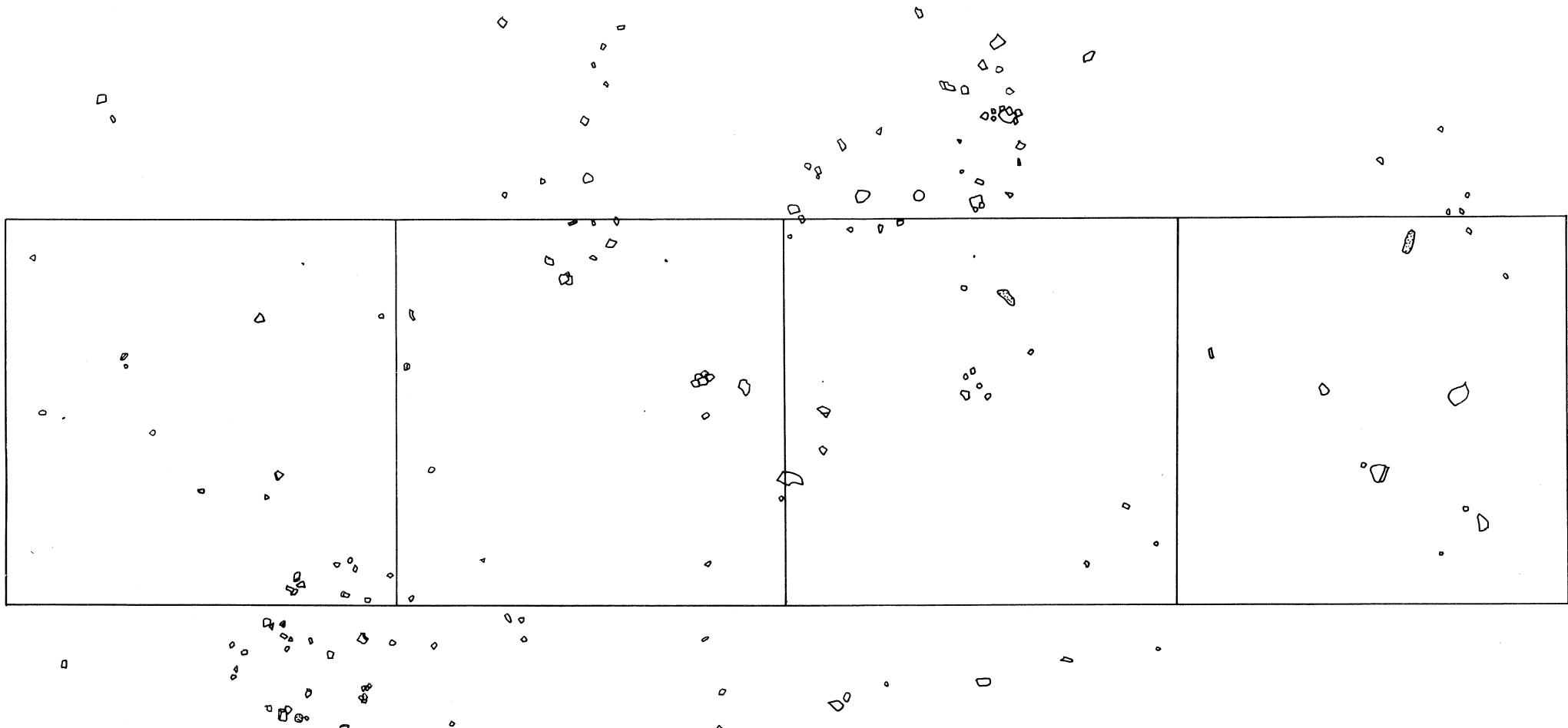
1. 山本寿々雄 『山梨県の考古学』 昭 43
2. 山本寿々雄 山崎金夫他 『一勝沼バイパス道路建設に伴う一方形周溝墓等の調査』 山梨県教育委員会刊 昭 51
3. 末木健他 「山梨県中巨摩郡敷島町金の尾遺跡発掘調査中間報告」『長野県考古学会誌』第 33 号 昭 54
4. 末木健他 「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡長坂・明野、垂崎地内—」 山梨県教育委員会刊、昭 50
5. 野沢昌康、萩原三雄 『京原』 山梨県教育委員会刊 昭 49
6. 山崎金夫他 『西田遺跡—第 1 次発掘調査報告書』 山梨県教育委員会刊、昭 53 他
7. 上野晴朗 「山梨県甲府市伊勢町遺跡調査概報」 『甲斐史学』第 7 号 昭 40
8. 山本寿々雄 註 1 に同じ
9. 山本寿々雄 坂本美夫他 『勝沼バイパス道路建設に伴う—甲斐国埋設条里遺構等の調査』 山梨県教育委員会刊、昭 48.
10. 上野晴朗 『御坂町誌』 昭 46
11. 上野晴朗 『甲西町誌』 昭 51
12. 筆者実見
13. 末木健 註 4 に同じ
14. 萩原三雄 田代孝 「郷土遺跡」 『御坂町の埋蔵文化財』 御坂町教育委員会他刊 昭 54
15. 森和敏 「蘇在家遺跡」 『辻遺跡と蘇在家遺跡』 山梨県教育委員会刊 昭 49
16. 拙稿 『山梨県に於ける晩期土師式土器編年試論』 『甲斐考古』12 の 2 昭 50 他
17. 服部敬史 福田健司 「南多摩窯址出土の須恵器とその編年」 『神奈川考古』 第 6 号 昭 54
18. 拙稿 「山梨県に於ける晩期土師式土器編年の再検討—特に奈良時代を中心として—」 『甲斐考古』 16 の 1 昭 54
19. 拙稿 註 18 に同じ



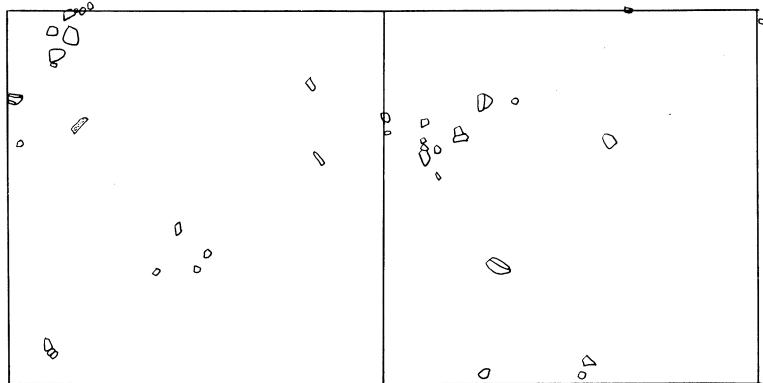
第11図 第3区～第6区微細図 (グリッドは $2m \times 2m$) <真間・国分期における土器分布状況>



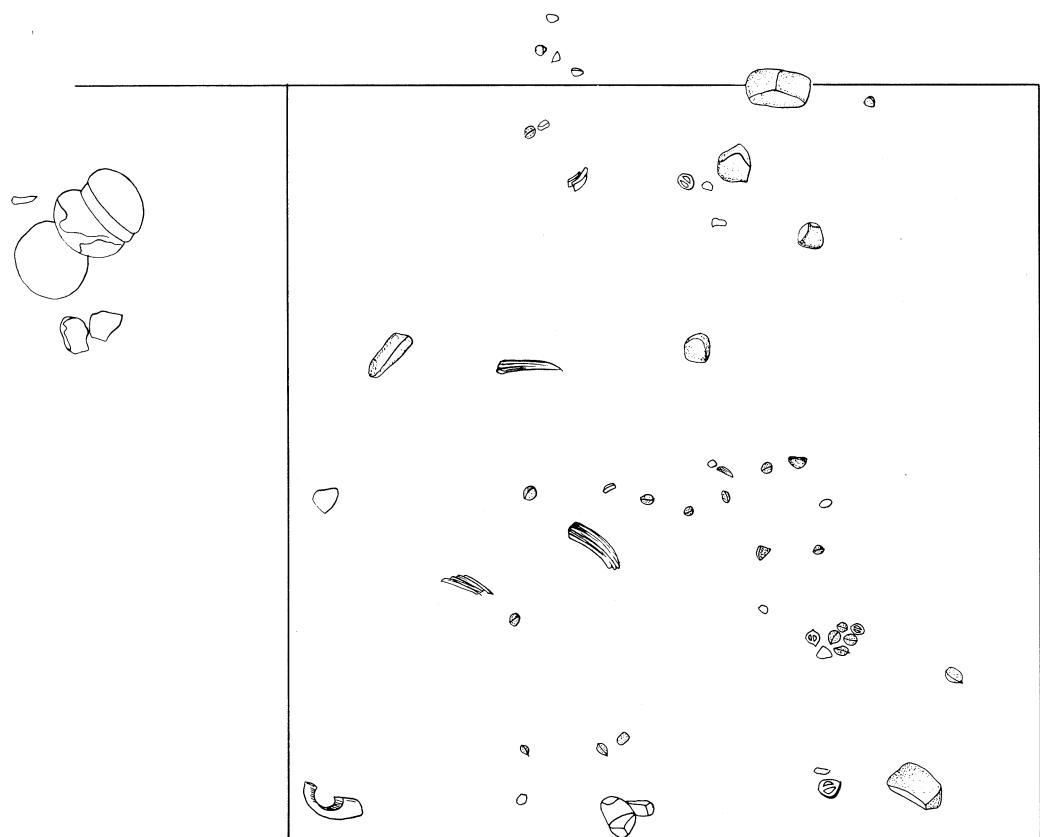
第13図 第24区～第26区微細図 <国分期に於ける土器分布状況>



第14図 第27区～第30区微細図 <国分期に於ける土器分布状況>



第12図 第22区～第23区微細図



第15図 第12区微細図 <クルミと土器の分布状況>

○○

第四節 朝氣遺跡出土の石器

朝氣遺跡から出土した石器は、砥石3点のみである。

第16図 の1は、22区第3層中の出土品である。

石質は、シルト岩と思われる。白色で非常に緻密である。この素材の石質は、薄く剥落する性質があり、断面からは2~3mm程度の薄いラミナが観察できる。葉理面は、砥石の平面に平行している。

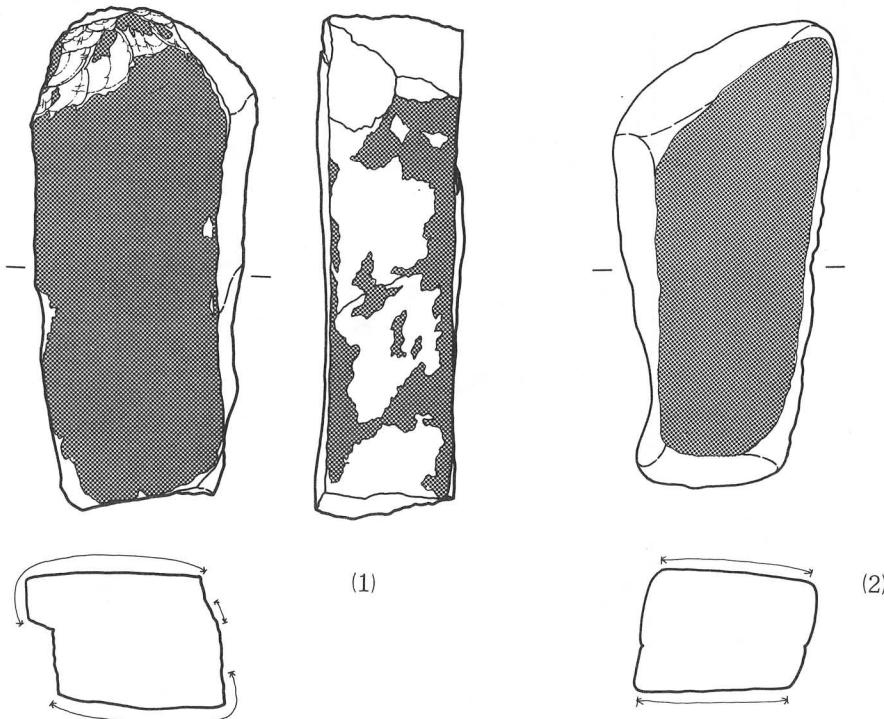
砥石の形は長方体である。そして、素材に円礫面が見当らず、角礫であることが理解できる。

砥石の作業面である研磨面は、礫の長軸にそった四面全てにみられるが、作図された平面が最も顕著であり、その裏面は、それについて顕著である。図の左右側面の研磨は顕著でなく、面の凸部分に局的に見られる程度である。

最も顕著で広い研磨面を側面から見ると、中央部がやや窪んでいる。また、縦断面を見ると、中央部がやや張り出しているのがわかる。

図の上方に見られるのは、明らかに人為的な剥離痕である。図左側方や上方から、ラミナを剥ぎ取るように剥離が加えられている。剥離痕は、局的に研磨面が観察でき、剥離後、研磨されたことが理解できる。この部分は、側面図にみるように、多少高まりをみせる部分であり、この部分を削平するために行なわれたものかもしれない。

また、図左側縁の中央部付近にも剥離痕が見られる。この剥離痕は、ほとんど研磨面に覆われているこの剥離痕は、上方のものと違い研磨面に対して45°程度の角度をもっている。上方のものとは違う目的のものと思われる。母岩から素材を得る時についたものかもしれない。



第16図 朝氣遺跡出土の石器

第16図の2は、30区第3層中の出土品である。

石質は、变成岩の一種と思われる。黒灰色で、シルト程度の粒子が観察できる。砥石の平面に平行して節理面がみられる。

砥石の形は、長方体である。素材は、半円礫である。

砥石の作業面である研磨面は、作図した平面と、その裏側の面とにある。作図した面が最も研磨が顕著であるが、1ほどではない。或は石質の性質で風化してしまったものかもしれない。

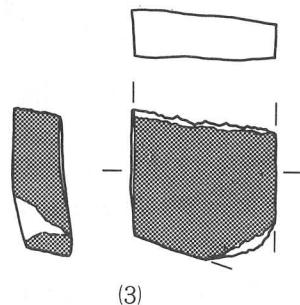
研磨面は、表裏面とも全く平坦である。

第16図の3は、27区第3層中の出土品である。

石質は、不明である。2mm程度の石灰岩のような粒子のまわりにシルトが充填したラミナとシルトだけのラミナが互層する。葉理面は、図の平面に直交し、側面に平行する。

破損品である。元の形は、細長い平行四辺形、或は、台形であったと思われる。断面は板状で薄い。当初からこのように整形されていたものかもしれない。

横側面観は、表面が下方に向って低くなっているのに対し、裏面は上方に向って低くなっている。また、表裏面と右側面では、ゆるやかなカーブを描く凹凸がみられ、作業面であったことが窺われる。しかし、図左側辺と上方の研磨面は、作業面であったか明らかではない。（保坂康夫）



(3)

第五節 朝氣遺跡出土のその他の遺物

朝氣遺跡出土の土器、石器類は前節で述べたが、その他の遺物としては第12区からグルミが発見された。その分布状況は第15図に示した微細図の通りであるが、たまたま、同レベルに手頃な自然石も確認されるなど、ここで割って食べたと思われる痕跡が明らかである。また、桃の種も一部混入されていた。

同レベルから土師器（国分期）や木製の椀と思はれる遺物や、動物の骨粉なども見られるなど、このレベルに於ける生活の臭いといったものが伝わって来る。

住居址の確認はこの区でも不可能であったが生活面が存在したことは明らかとなった。

また、第5区西拡張区からは小動物の歯が発見された第13図版。

その他遺物については、別段報告するものは発見されなかった。

第四章 まとめ

第一節 朝氣遺跡に於ける成果と今後の課題

平坦な東小グランドも地表下の層位は煩雑で変化が激しい。発掘調査は巾 2 m (一部拡張区で 4 m) 長さ 90 m の限られた地域内であったが第 7 図セクションに見られる通りそれを如実に見ることができた。

発掘調査に参加した東小 P T A の年配者は子供の頃、丁度運動場の中心よりやゝ北側よりに当る場所に西から東へ流れる川があったことを話され良く遊んだものだといった事を大勢から伺ったが、事実第 30 区～32 区にその川の存在が認められる層位が歴然と確認された。

たまたま、その部分を発掘調査完了後、工事の都合で掘られた第 30 区東特別区第 8 図中央に突出た部分にその旧河川が当ったが、何層にも重なる砂層と粘土層の互層を含めて、当時の河川の流れの強弱をも読みとることができる。

その旧河川を中心に南側と北側で文化の様相がやや異なる感じがした。

つまり、発掘グリットの南の部分、例えばカマドの発見された第 4 区 (現地表下 70 cm) は大体が国分期と一部に真間期の土師器があるのに、河川をはさみ最北端に当る第 45 区北壁からは現地表から同じ 70 cm の同レベルでありながら和泉期の土師器の出土があつたりしている。

そして、この河川の部分についてみると、その和泉期の土師器が第 6 図の地層図に見られる通り現地表下 3 m 50 cm もの深さから出土するなど、わずか 90 m の間において、その文化層の起伏の激しいことが朝氣遺跡の一つの特徴であるともいえる。

また、既に層位の節や土器の節で記述されているが、丁度第 30 区及び第 30 区東特別区に於て鬼高二期の土師器が上層、下層の二層から発見され、その間に 1 m 以上に及ぶ砂層、粘土層の互層が確認され、大木の流木をも含みこの期に度重なる洪水があつたことをも想定されるに充分である。

さて、出土土器はたゞ一片の弥生式土器をはじめ、五領、和泉期、鬼高二期、真間、国分期といった形で土師器の発見があり、弥生時代末期の 4 世紀 (西歴 300 年代) から、この地で住民の居住が始まり、五領、和泉期の 5 世紀 (西歴 400 年代～)、鬼高二期 6 ～ 7 世紀 (西歴 500 ～ 600 年代～)、真間期 8 世紀 (西歴 700 年代～) を経て、国分期 9 世紀 (西歴 800 年代～) の 500 年に及ぶ長い年月に亘り、住民の居住が確認されたわけである。

もとより、甲府市内の遺跡でこれだけ明確にかつ時代的に 500 年にも及ぶ長期に亘る資料が量の多少はあっても継続して得られた前例はなく、その意味では発掘現場が狭少であったが、得られた成果は大きいし、今後のこの時代の研究資料としてその果す役割はきわめて重要である。

また、幸いグランド全域が遺跡になっているという事は今後少くともその部分は保存されているという事で、将来はこの資料をさらに強固にする部分が残されているということで期待されるものが多い。

今回の調査は前述した様に一本の線であって、面で発掘すれば住居址その他の遺構も明確に現われると思はれるし、また第 30 区から第 30 区東特別区を通ずる旧河川の延長線に於ける状況もより詳しく解明されると思はれる。

一応今回の発掘調査では和泉期と鬼高二期それに国分期の資料が多く得られたが、欲を云えば住居址に於けるセットでの資料があれば、さらに遺跡の性格を理解する上で好結果が得られたものと思はれる。

この様な資料も今後に期待する事ができよう。

朝氣遺跡の範囲は、東小学校周辺に於いて道路工事、住宅建築の折々大量に発見されている姿から相当広範囲に及ぶことは容易に理解されるが、いずれも市街化され、道路は舗装され、その部分の学術調査は現実に不可能ないま、この東小学校々庭はきわめて重要な遺跡であると評価できる。

おそらく弥生時代末期から今日まで間断なく住民の居住があったものと思はれるし、その意味ではさらに詳しいデータを得る為の全面発掘も必要であり、今後残された課題であろう。

図 版

第一図版



東小学校々庭を南方より望む、朝氣遺跡の中心。



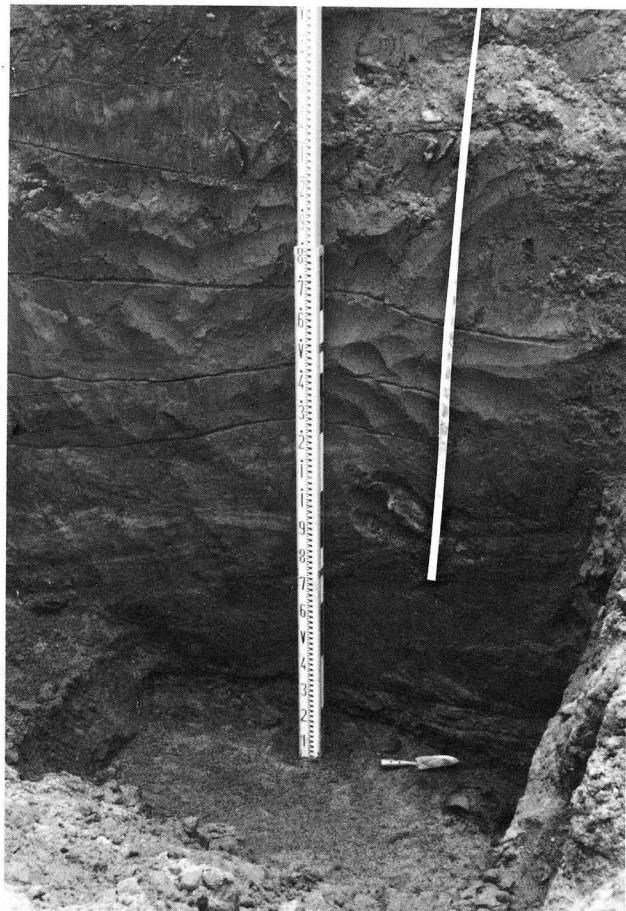
同上校庭における発掘現場の発掘調査着手時の現状。



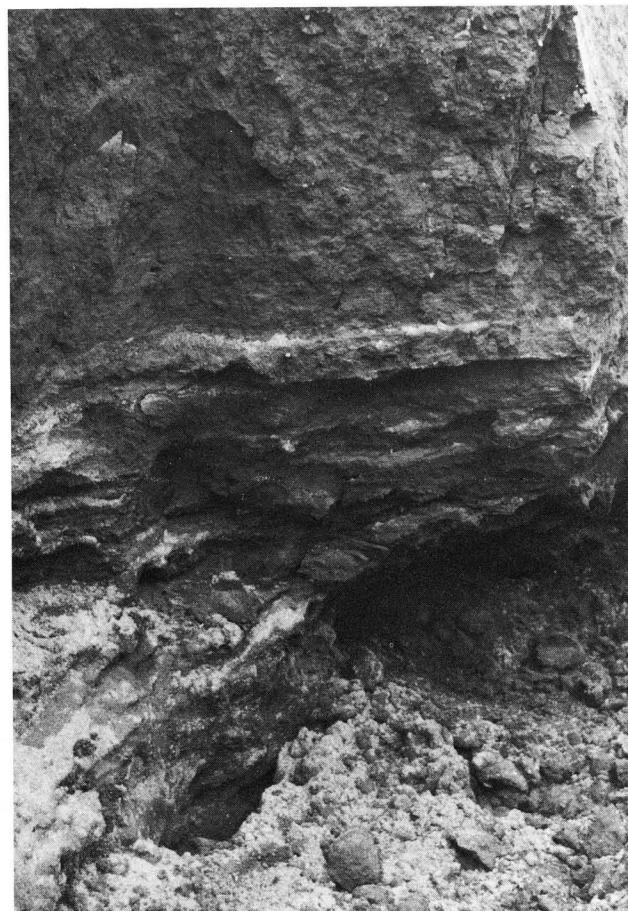
発掘現場、調査着手時の現状と発掘本部（テント）。
北から南方を望む。



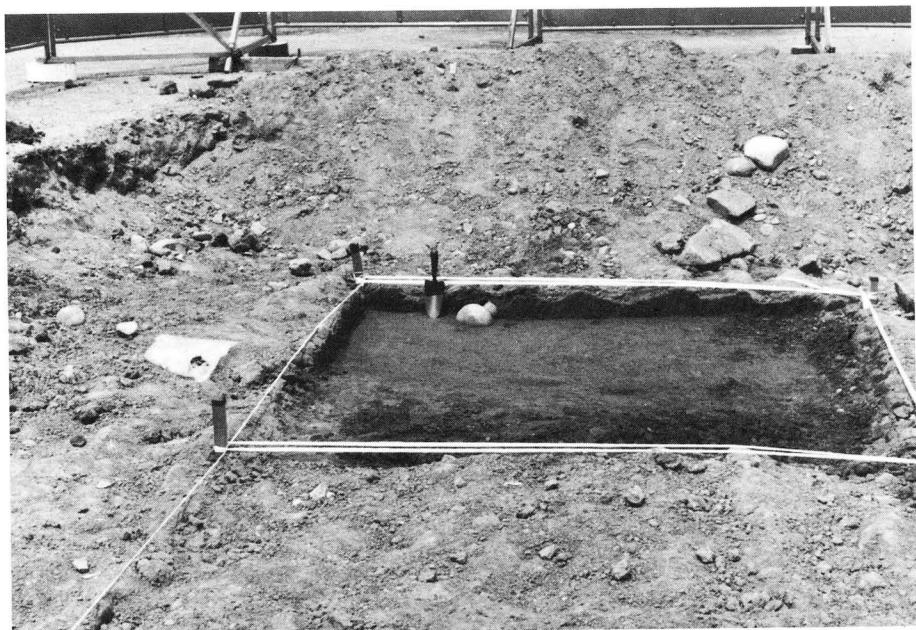
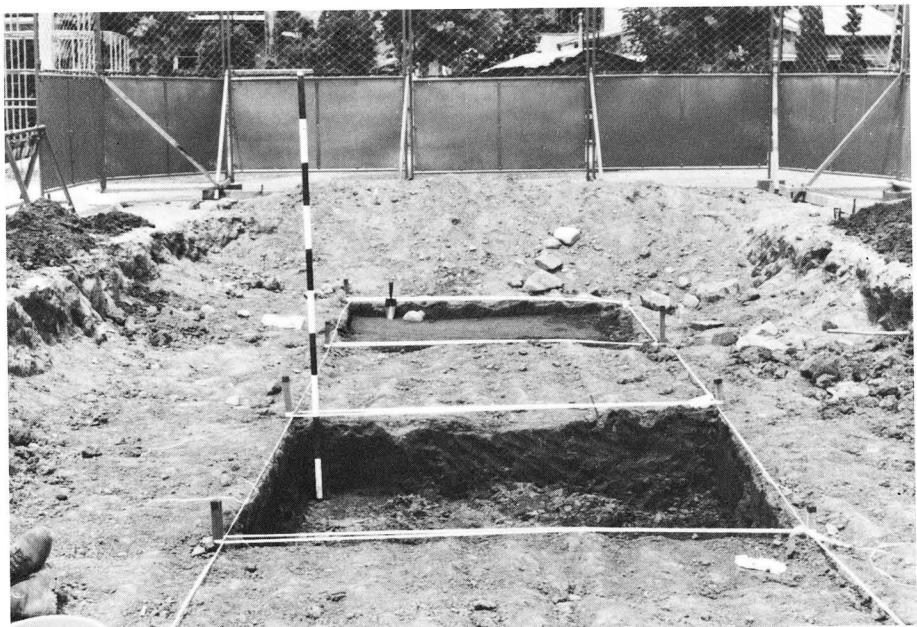
巾4m、深さ70~80cmに亘り廃土作業が終えた発掘現場
の中心線にそって2m四方の発掘グリットを45区画設定
した。南方より1区、2区、3区……と命名。



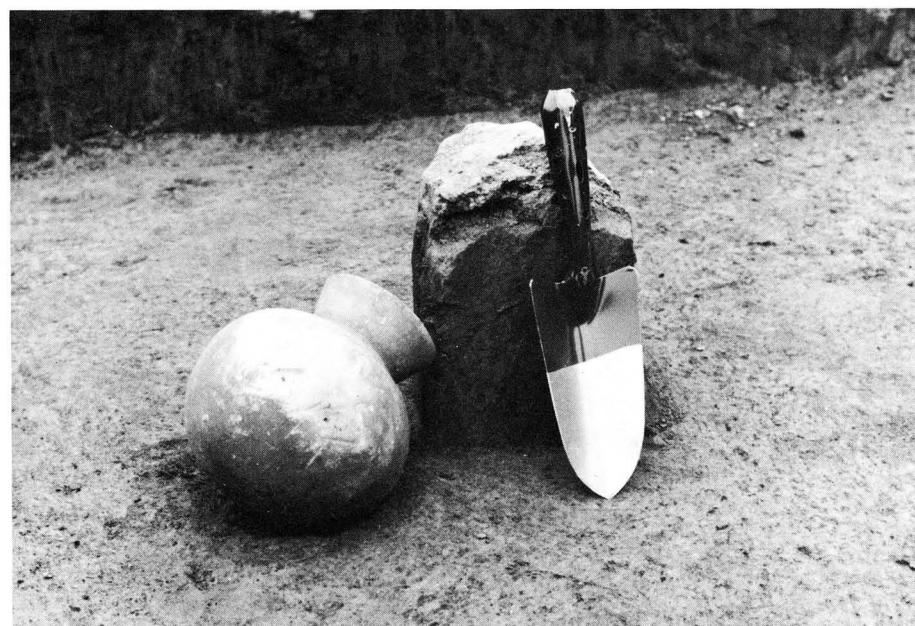
30区東特別区南壁セクション（朝氣遺跡の基本層序）



30区西壁にみられる粘土と砂の互層（旧河川の跡を物語る）



45区北壁で発見された土師器



45区北壁発見の土師器出土状況



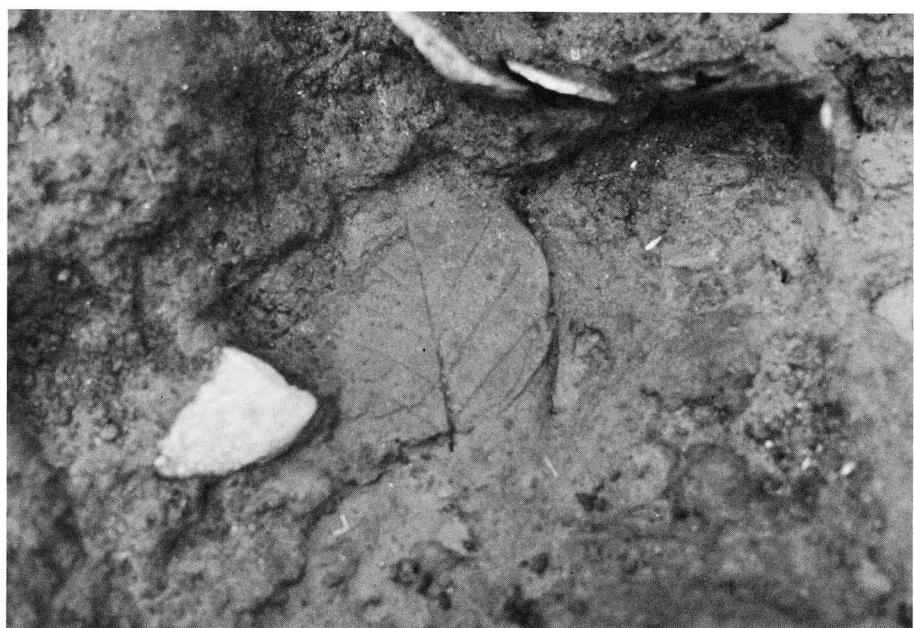
発掘調査着手時の発掘現場北壁、床面は既に文化層にまで達していた。



整理された北壁セクションの一部と炉址及び柱穴

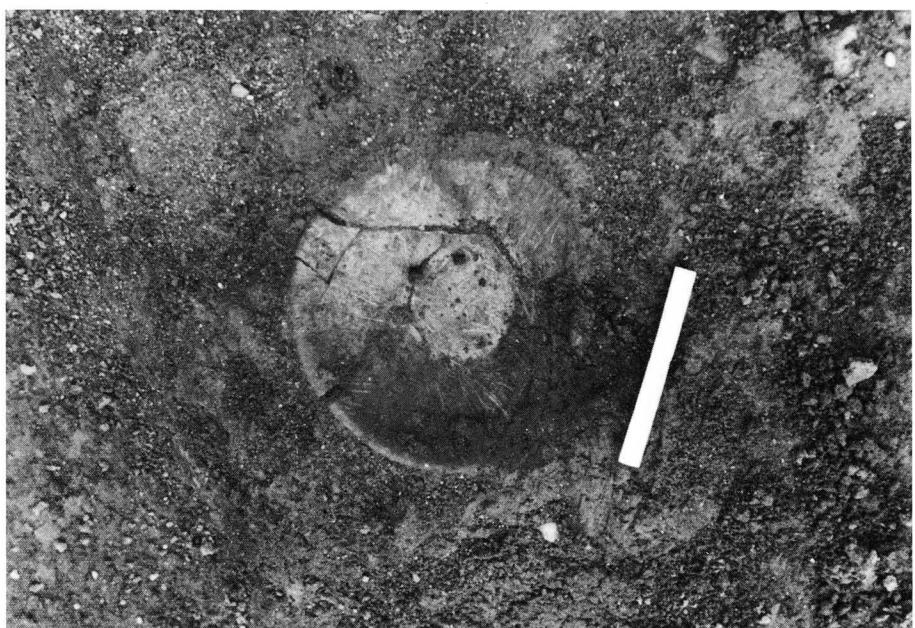


4区西拡張区で発見された炉址と柱穴、灰の厚みが生活の長さを物語っている。



4 区西拡張区に於ける土器分布状況 (−90cm)。

第十図版



9区（上）、24区（下）出土の土師器



30区（上）で出土した青磁と6区（下）で出土した須恵器



24~30区で出土した陶器（上）と須恵器（下）



5区西拡張区から出土した動物の歯（-90cm）。



13区から出土したクルミ、ほゞ完全な形で採集された。



12区から出土した土師器。3個の土器が重なり合って出土した。

土器は第25図版の2個とその間に第26図版下の土器が重なり合っていた。

赤い酸化鉄を含む層の直下からの出土であった。



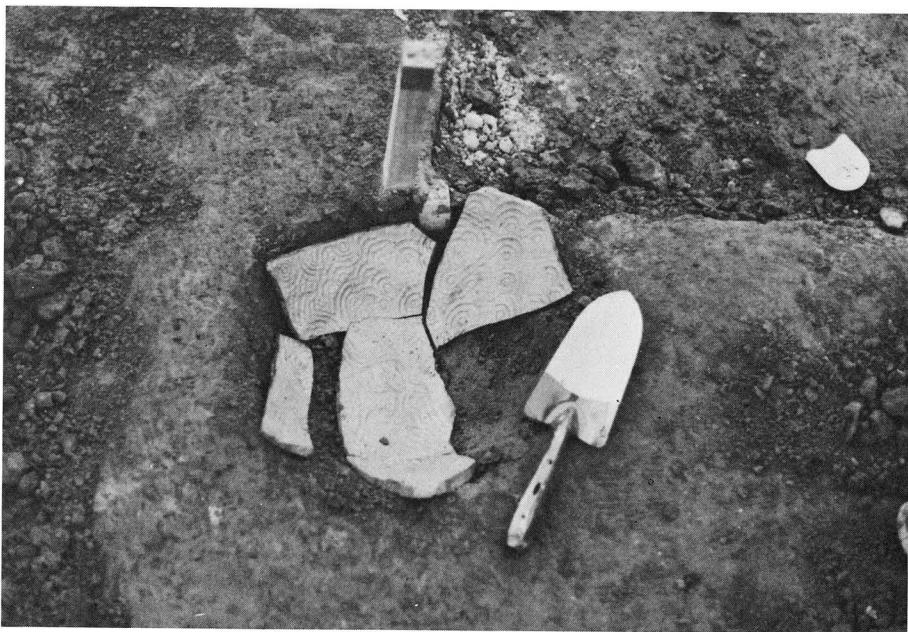
30区出土の土師器（現地表下 160～180cm）。



30区出土の土師器（現地表下 170cm）。

第十七図版

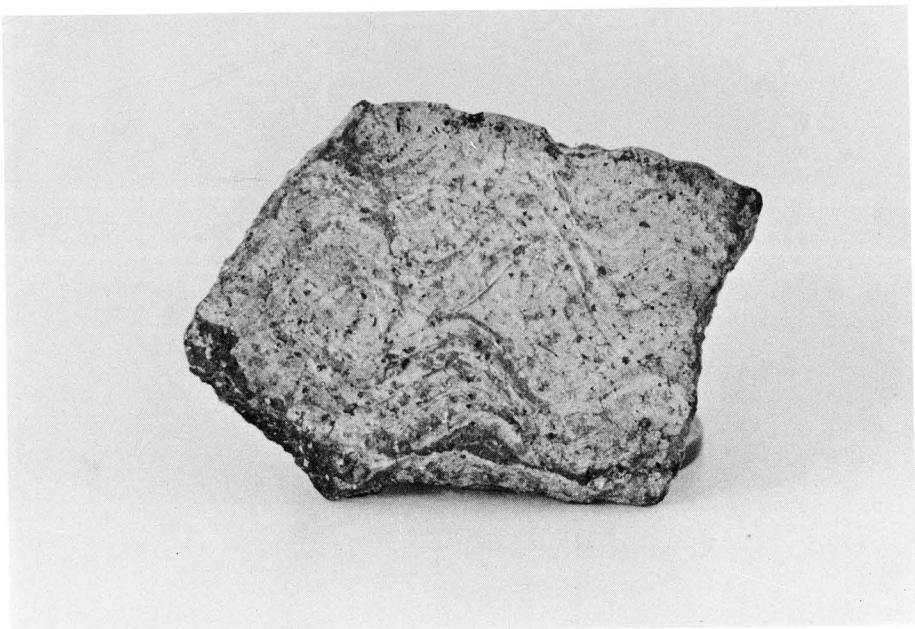




4区（上）出土の須恵器と12区出土の木器（下）

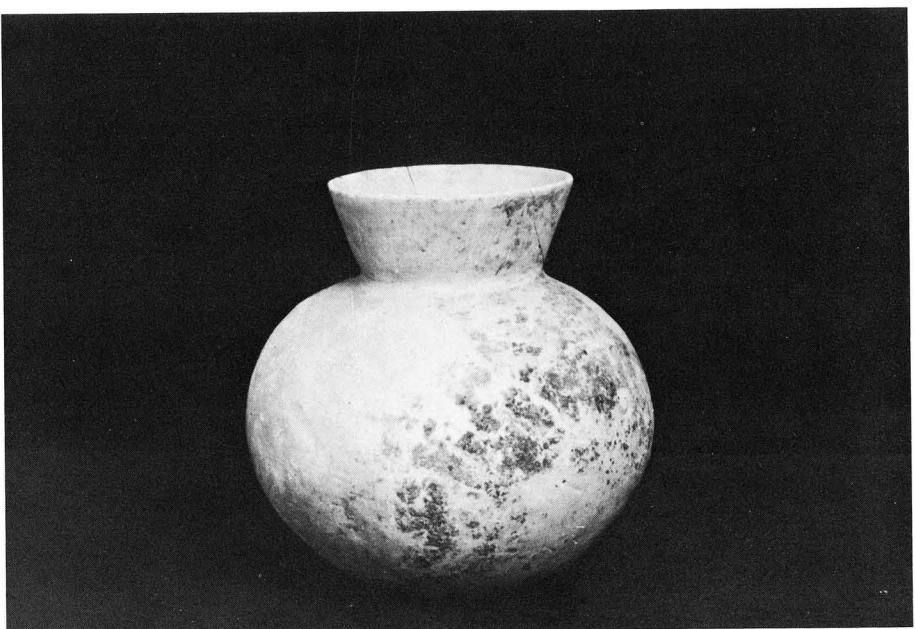


30区東特別区出土の土師器（現地表下 3 m）。

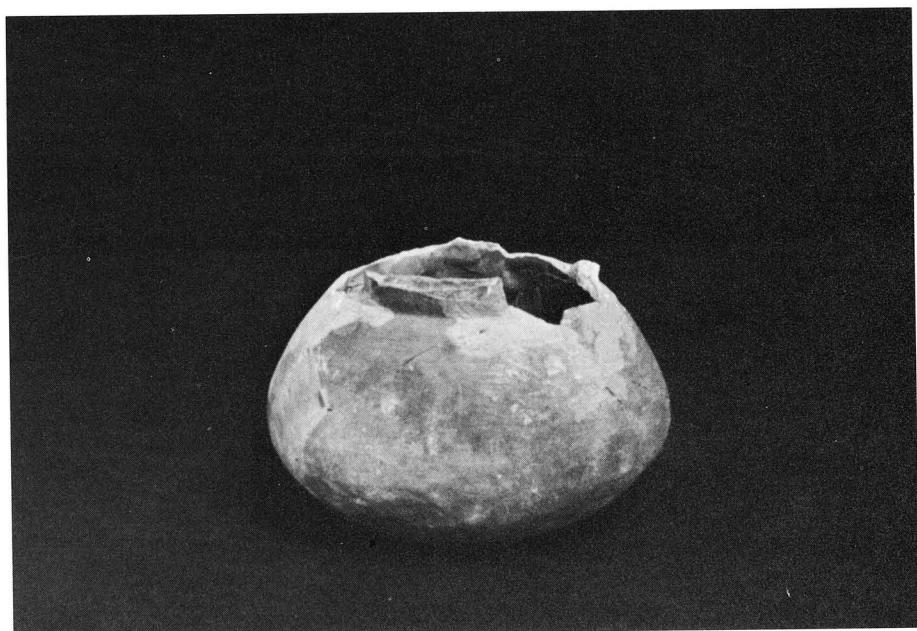
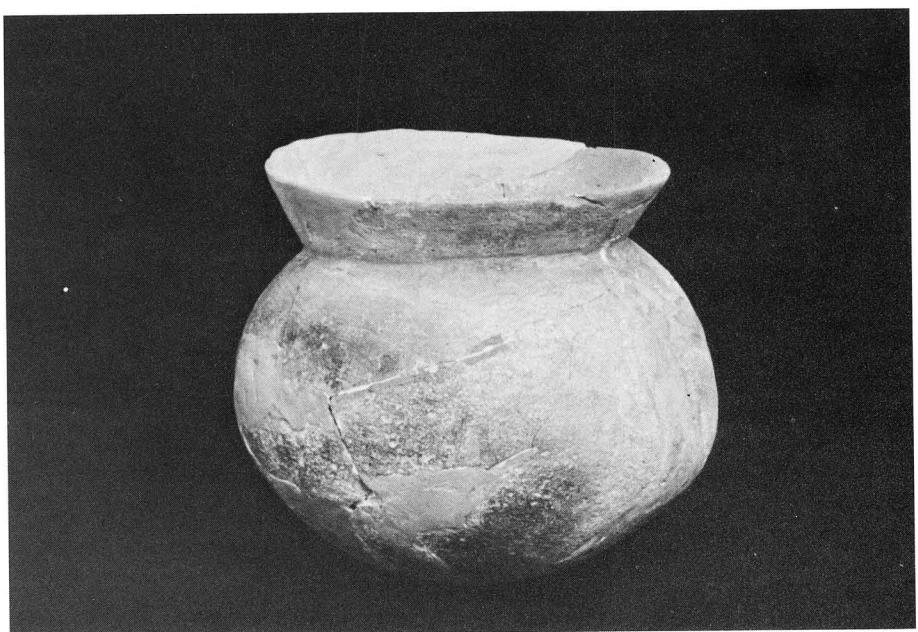


朝氣遺跡発掘で発見された唯一の弥生式土器破片

第二十一図版

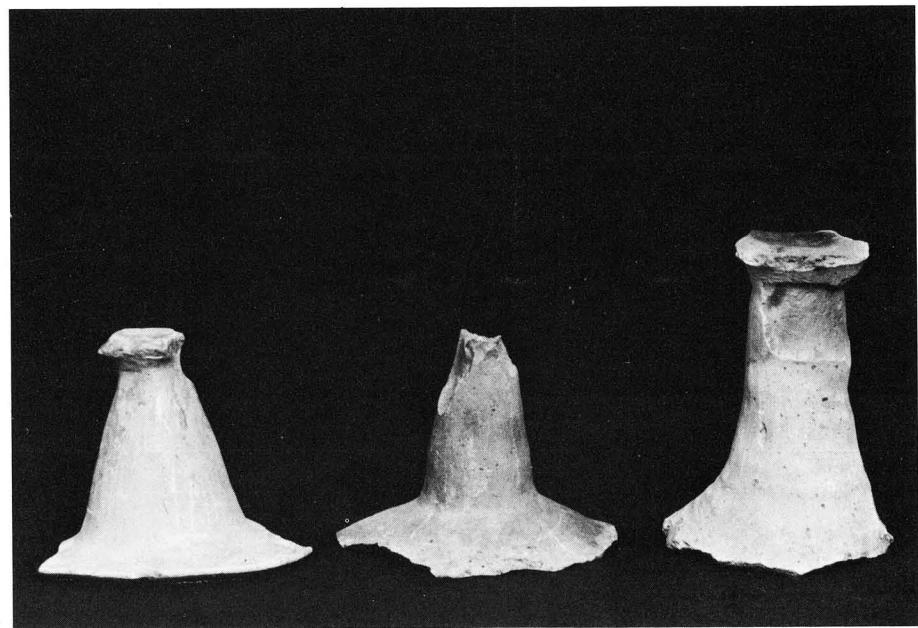


第十一図版

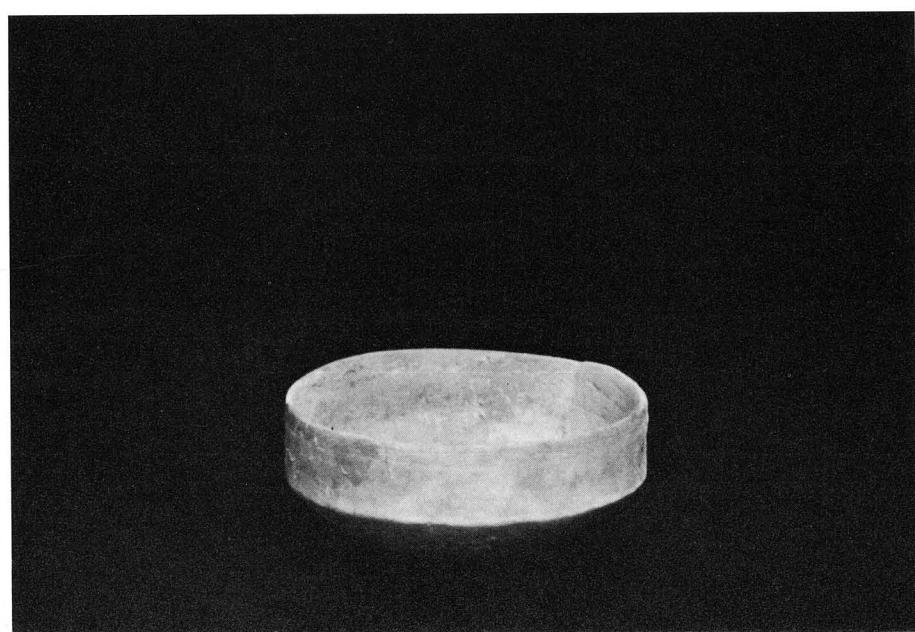




第二十四図版



第二十五図版



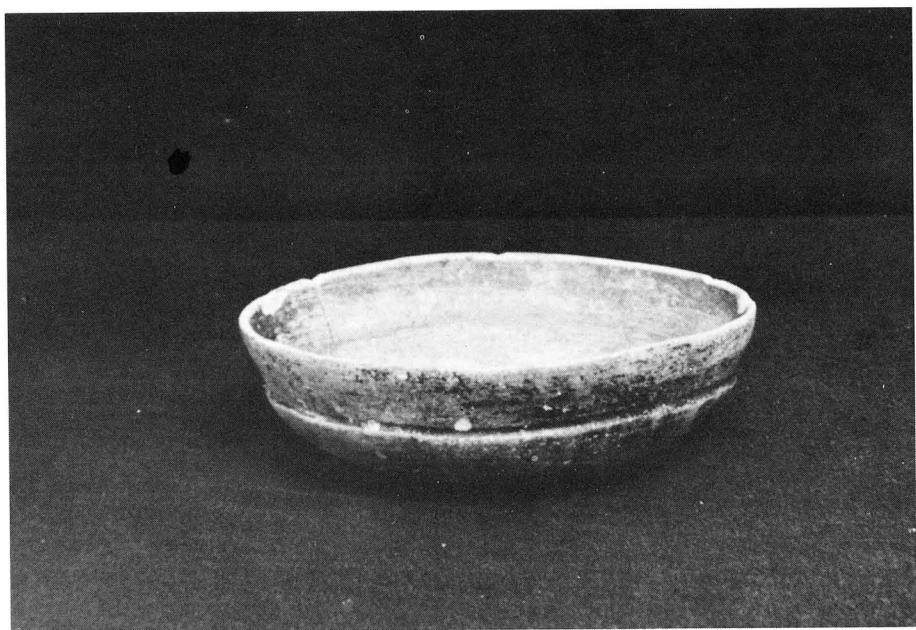
第二十六図版



第二十七圖版



第二十八図版



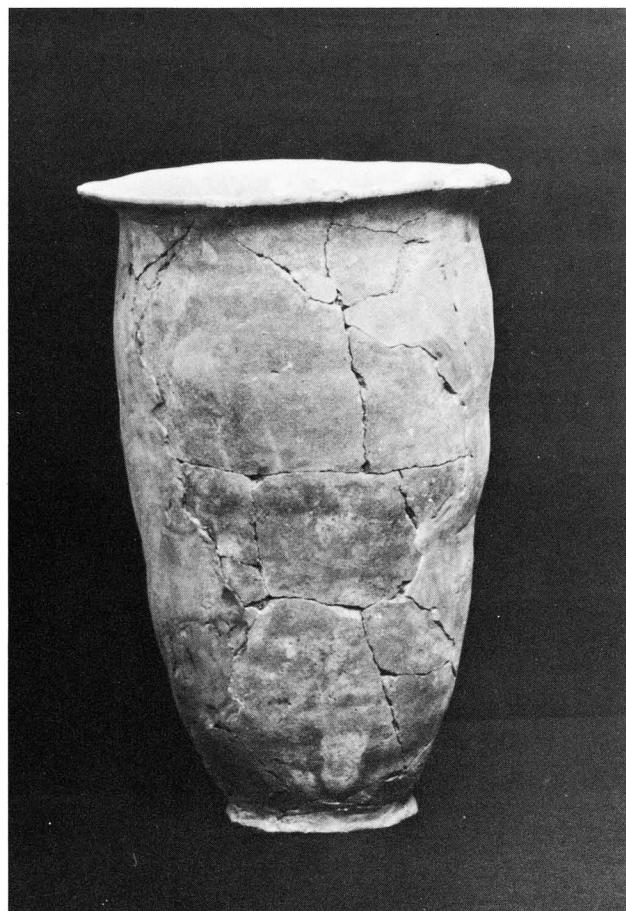
第二十九図版



第三十図版



第三十一図版



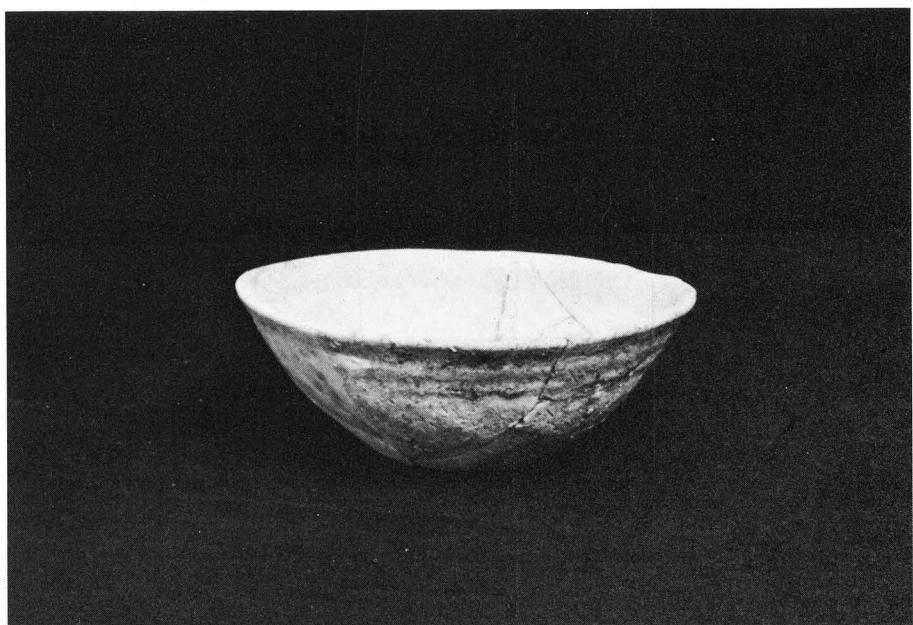
第三十二図版



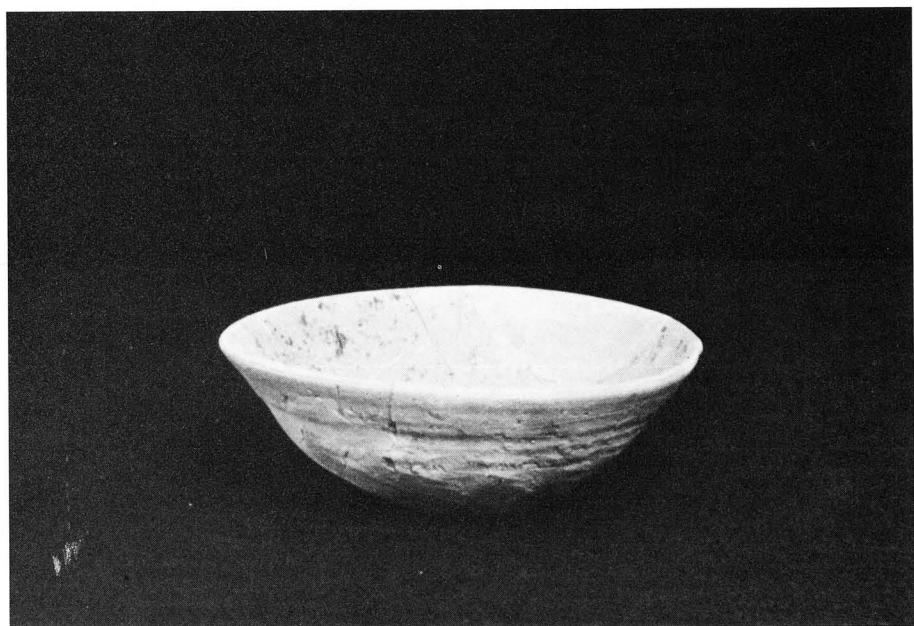
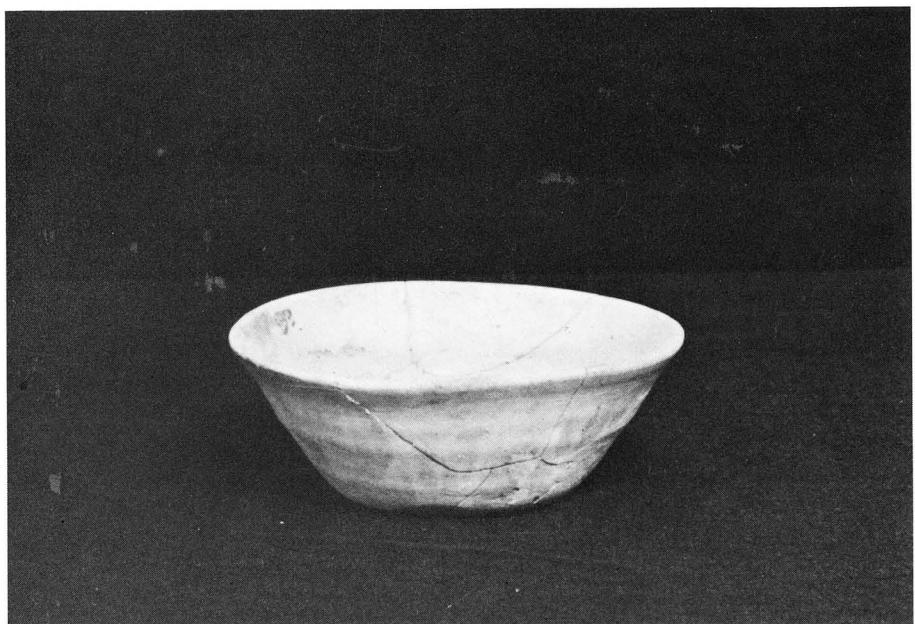
第三十三圖版



第三十四図版



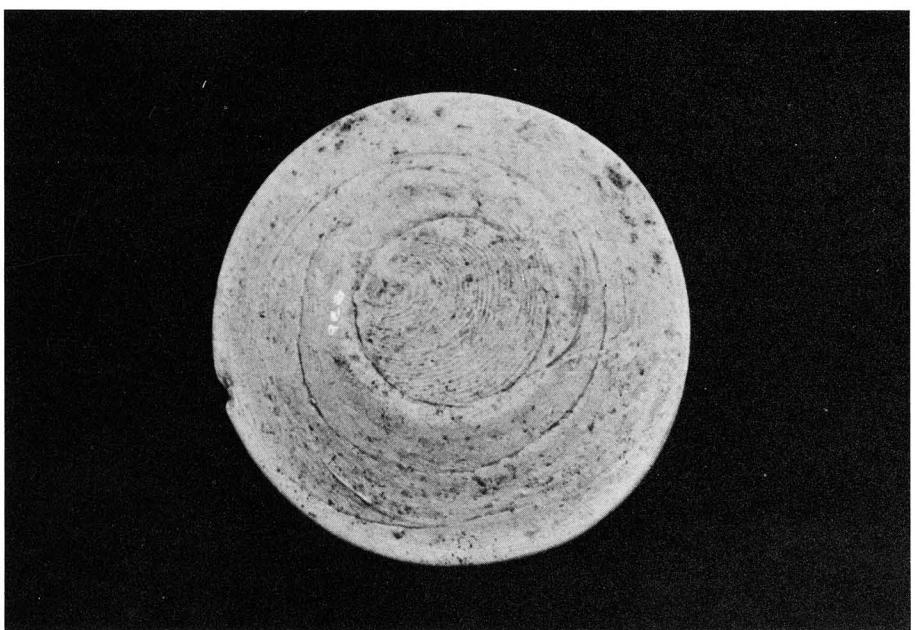
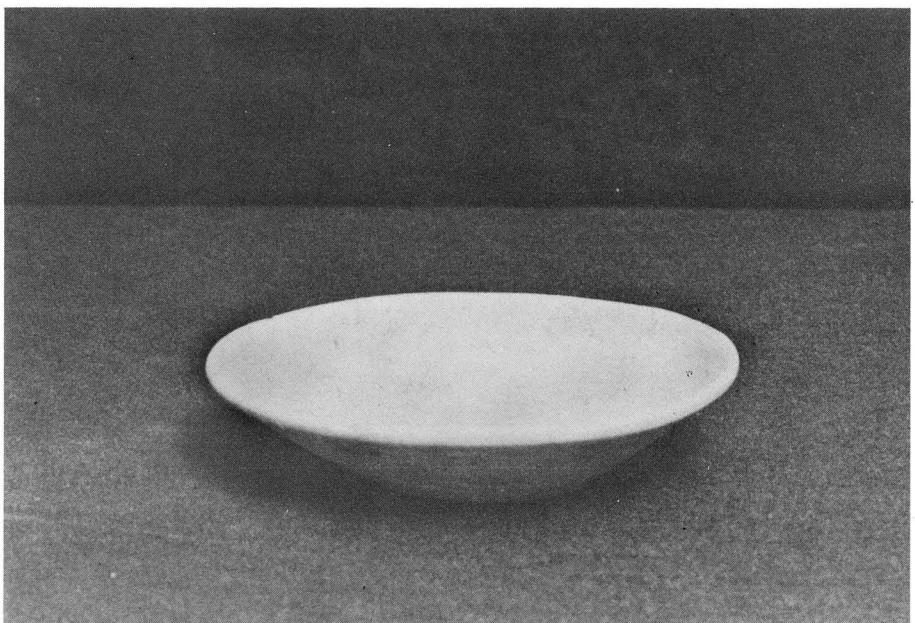
第三十五図版



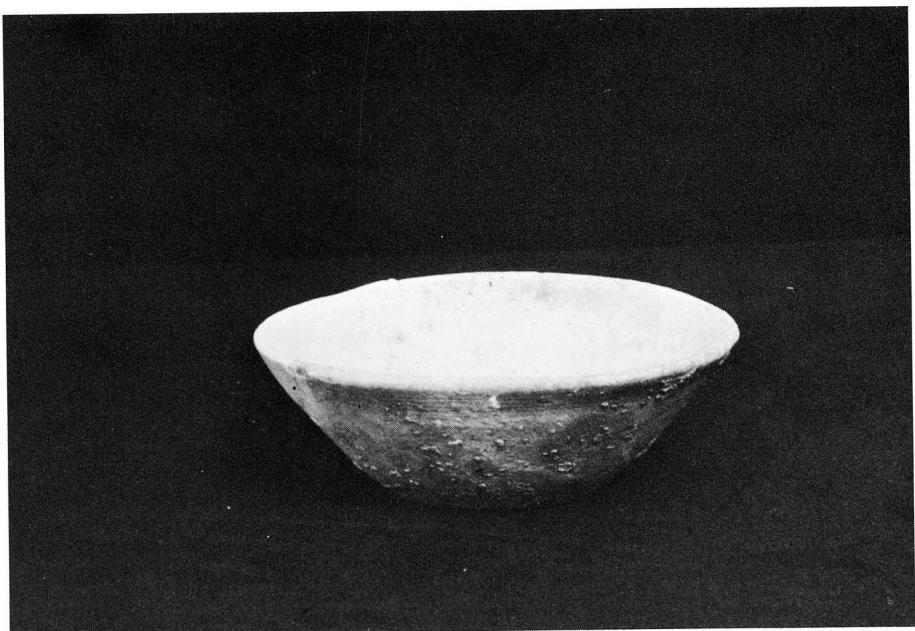
第三十六図版



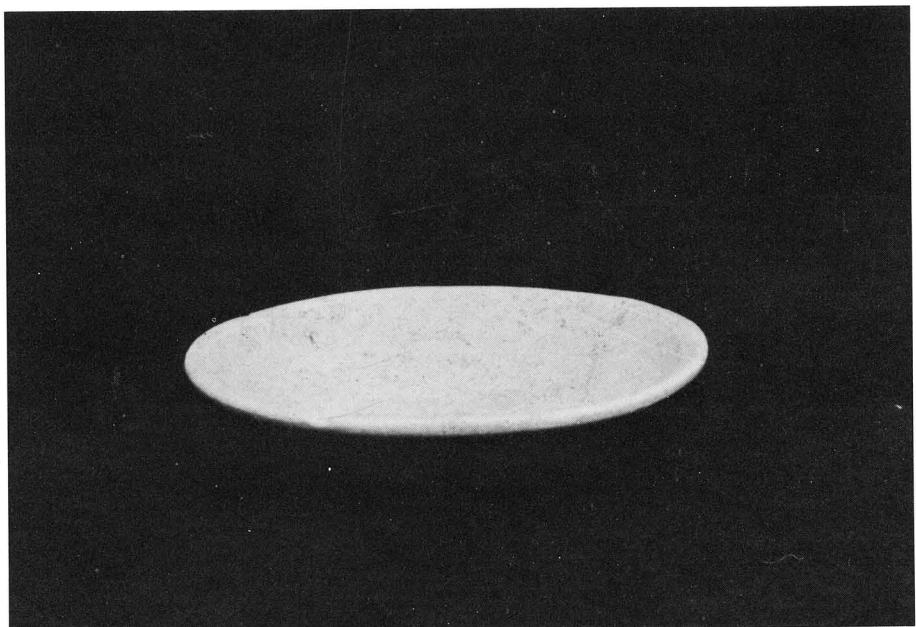
第三十七図版

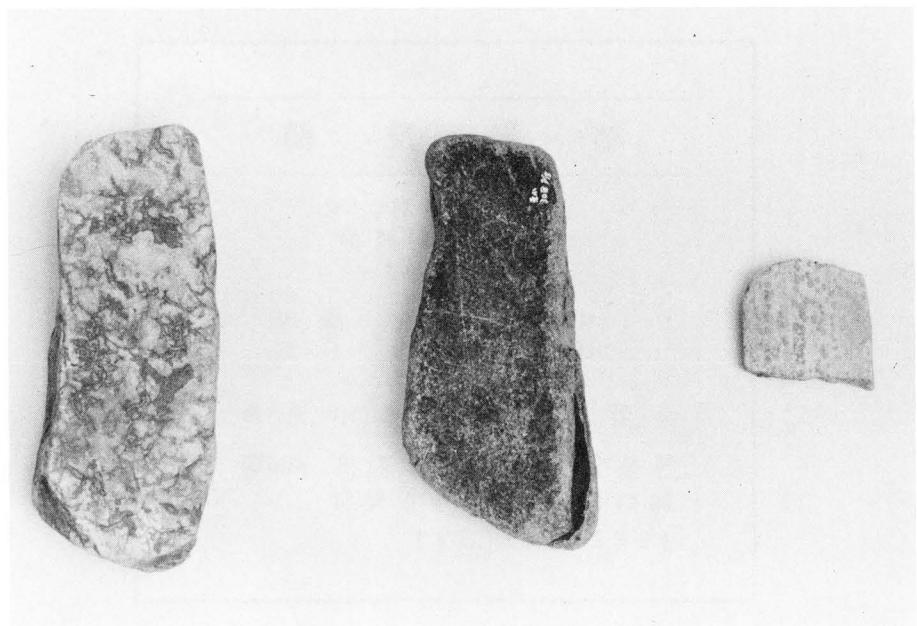


第三十八図版



第三十九圖版





朝氣遺跡出土の石器

朝 気 遺 跡

東小学校々庭の土師遺跡
発掘調査報告書

印刷 昭和55年3月15日
発行 昭和55年3月31日

発行所 甲府市教育委員会
印刷所 東洋レーベル株式会社
甲府市中央5丁目1の29
TEL (35)-2321

